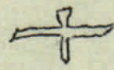


方 向



米 中 新 敬 米
徒 然 草 葛 玉 抄
米 原 田 憲 雄 米
景 受 小 林 太 市 郎 博 士 音 簡
詩 五 篇
十 二 月 樂 淵 一 幸 茶 小 記 一
寒 山 詩 (I)

徒然草 禍玉抄

中新敬

本稿は題して「徒然草禍玉抄」という。「禍玉」は、兼好が愛読した「老子のことば」から採った。「被禍懐玉」によること勿論である。何れ私個人の「禍玉」を銜わんかためてはない。ただ、このことばが兼好の人と作民徒然草に与つわしかろうと愚考し、私もまた遠く先蹤に支やからんと念じたからにはほかならない。

徒然草を愛読し、その作者兼好を追慕して、時にはその得る所を自由に剽記するものであり、何れ論説などというこわばった執筆態度はとりたくない。私はただ私流に感じたこと、考えた所を書いてみたいだけのことである。それが作者兼好や作品徒然草の研究に多少でも寄与する所あれば望外の幸である。

論文などという形式ばったものは、もともと、私の性に合わない。私も亦、過去にそういうものを数篇書きはしたが、どうも自分ペースで書いていこうという気がしなかった。枠をはめられて仕事をするのが大嫌いな無精者だから、四角ばった論文を書くのは苦手なのだ。論文だろうが隨想だろうが、形式は何れにせよ、要は、徒然草という作品

の本質が究明されれば、それでよ、のではなからうか。何れ窮屈な思、をして筆をとらなくしてよさうなものである。私は一介の徒然草愛読者にすぎないのであり、學者とか研究者とかいう種族では通用しない人間だ位は心得ている。ただ「おぼしきこといはず、はらぶくるるわざ」と兼好も書いておいてくれたように、何れ書かすにあられるほど、所持の境涯に安んじて得る超然居士ではない、やはり心ある所、語之に従うてあり、書かなければこの狂狂しいのであり、又、書いてもこの狂狂しから免れうるわけでもない。この幸、兼好とて同断だったのではないか。徒然草という作品を媒体として、六百五十年前の人間の魂が、生活の時代も環境も異った現代に生きる私という人間の魂を呼んでいる。気障な言い草かもしれないが、そんな氣もせぬわけではない。

とまれ、私はこの「禱王抄」によって、徒然草について私の感じたこと、考文たことを存分、書きのべてみた、と思ふ。そう、いう私の見解や感想にも、これより得失はある。誤解や錯違も免れかたいと覚悟している。毀譽褒貶は読者のご自由であり、もしやれを指摘いただければありがたいことだと思ふ。もちろん、問題にされなくとも、別にどうということはない。とるに足りないものは、要するに、とるに足りないだけの話であり、それをかれこれ氣に病むようなことはせぬつもりである。

私は正直に云うて、生れつき不精者だから、學者とか研究者とかいう精勵恪勤の人々

とはおつき合ひできない。困苦し、研究誌や学会で仕事を発表するなどということはおんこうむりたい。私ときよのが、概念を与えられてそれをやったからとて、女した業績をあげることに出来るまい。窮乏な思いを体験するだけの話である。私はただ勝手気ままなことを日方向とて、という裾衣の同人誌に書いておれば気のすむ人間であるらしい。しかし、どういう不精を及ぼすか、私には、かなり批評性もあるようだ。あえて批評的精神などとは威儀ばらない。不精者の批評など頭から問題にならないかもしれないが、ともかく、私には私なりに自分で考え、感ずる所があり、これを自らの主体性と信じているのだ。これが人の言説と照して矛盾するようないことがあると、どうもかま人ができない。腹にすえかねるといふが、私には大きな度量というものが生れつきかけている。勿論修養が足りないといふ批判も甘受せねばならないのであるが、腹にすえかねることは、それが蓄積してくると、「腹よくくるわや」になり、私の抵抗感も自らの精神衛生上、自由放逐を批評を放つことに出来る。批評は腹よくくるわやの排気孔であり、安全装置である。今までの私の女史のためにはいふんと、いふ人な人にも迷惑をかけたことがなかつたとはいひきれない、これは私の人間的な欠点であるのかもしれないが、欠点は裏側からみれば、案外、長所なのかもしれないと、我儘な解釈を下したりする。

それ故、この「徒然草湯玉抄」においては、事、徒然草に關する限り、大家とあがめられ、碩学と尊敬されている方々の論考なり見解なりについて、その名声を顧慮する

所なく、時に礼を失ふことになりかねない程にし、私流に腹藏なく、自らの見解を吐露したいと思つてゐる。「腹さくるるわさ」を解消せしめるには充分な療法であろうか。別に他意あつてのことではないから、非礼にあたる場合は平に御海客をお願ひする。勿論、非礼に対する責任は十分とする覚悟である。このような言い草をはいめに掲げるのは、もとより読者の誤解をさけるためであるが、若氣の過失を数多く犯して来た私に、どうやら年寄り臭くなつて来た証拠であり、自らをかえりみて苦笑を禁しえな、しのかある、

型破りメ「まえがき」を書いてしまつたやうである。これにし苦笑される方があつても知れない。實は「徒然草玉抄」などという題名からして、カビのはえたやうな古びかゝりがあり、いまとき「抄」でもあるまいと苦笑される方たつてないかとほなからう。しかし現代にも「のしヨウ」といふのは流行してゐる。これは兎せしののしヨウであらうが、抄とシヨオとは音通である。私の抄も兎郎の人にシヨウ的性格をてし認めていたなければ、それと十分なのである。

兼好の愛読書と楯にとつて、老子のことは借りたりするものもどうかと思つたが、シヨオのアナクロニズムに一片の諸語を感じていただければさいわいである。命名については兼好はねば、こゝの術学的技巧が嫌いだつた。かれはこゝ書いてゐる、

寺院の号、さらぬよろずのものにも名をつくること、昔の人はずこしも求めず、ただよりのままに、やすくつけけるなり。このころは深く紫「才覚をあらはせむ」としたるやうにきこゆる、いとむづかし、人の名も、めなれぬ文字をつまむとする、益なきことなり。何ごともめづらしきことをしとめ、異説を好むは、浅き人の必要あることなりとぞ。(才百十六段)

なるほど、兼好は出家したとき、俗名をそのまま音読して、法名としたほどの人である。この識見あって然るべきであろう。「つれづれ草」のとき題名も、内容とピッタリである。但し、これは、兼好自らの命名ではなからうである。しかし、これを名付けた人へ、よほど、作品に味到できた人だと感心する。時代は、兼好歿後、それほど遠いものとは思われない。原作への理解の條件がよかつたのかもしれない。

「禰王」などという命名は「才覚」をあらわさんとしたるやうにきこゆる」と評されても致し方ない。地下の兼好にも「いとむづかし」と苦笑されるかも知れない。あるいは六条有房あたりから「才」のほどすてにあらはれたたり。いまはさばかりにて候へ。ゆかしきところなし」とけなされそうでもある。私には、たしかに「めづらしきこと」ともとむる「性癖があるようだ。また「異説」を好む街学癖も多分にある。この「禰王抄」のごときはまるで「異説抄」のごとき観を呈するに至るであろう。これも亦、性の趣く所致し方のないことであり、自ら「浅き人」たる所以を宣伝する結果ともなりかねない。た

た「羊頭を掲げて狗肉を売る」類書に同せんことを恐れるのみである。

一方 兼好は「名を聞くより、やがて面影はおしはからるる心ちするを 見る時は、またかねて思ひつるままの類したる人こそをけれ」(年七十一段)ということをも併せ記している。人の名は大抵の場合 命名者たる親の理想主義的心情に出るものであらう。かくあれかしという親心の念願が命名によられる。しかし子供は親の思わく通りには育たないのが常例であるらしく、名実相及か世間の常である。親に似ぬ不肖の子は鬼子といわれるが、鬼子ならでも 親の理想主義に同せぬのは、何れ子供にはかり難い。サレる責任ではあるまい。この人間の命名は、著者と著書との関係について、ある程度、うなずかれる所があるようだ。立派な名をしつ書物が、案外内容空虚であり、途中巻を捨てるようになるところは常のことである。

女体 徒然草に限らず、古典の注釈書と銘うった書物の名ほどれもこれに近似してあり、同類的表現が余りにも多すぎる。汗牛充棟の徒然草の注釈書に見ても何某の徒然草X Xと云わねばならぬようなのが普通であり、ただX Xといえは、その著者が自ら念頭に浮び出るといつたものは、その数、さいひではなからうか。もしX Xといつただけでそれがピンとくるようになれば、それは余程の名著であるかと之つてよからう。例えは、「講義」といえば佐野係女郎氏を考え、「講義」といえば沼波瑠音氏を思う類いであり、

こゝからは他の類書から採擷である。その他はたとえ命名が相同していても、封書書の個性が判然としていない。命名の類同性は内容に因果の有くらへを思わせるのであり、名実の対照性が兼好の執したのとは別の意味で「名を聞くより面影はあしはらるる心ちするしゆである。不朽の古典徒然草の探求がかくの如き俗迷に止つていてよいためである。

何れも奇矯を衒つて名ばかり仰々しく掲げては、内容に個性が光らねば始まらない。本書の如き、やはり一種の注釈的性格もないわけではない。敢て古色蒼然たる「褐玉抄」と命名して、群書と送る異にするゆえ人を遺憾に掲げては、寧ろ審か之を証せねばお笑草にとどまらう。劉わくはその名のその実の實たるを裏切らず、表現の禍を除きした中に新しいモラルの白玉がその生彩を放たぬことを念頭するものである。

戦標

善橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧よりけり。氣の上る病よりて、年々やうやう大きく行どに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまさまにつくろひけれど、わづらはしくなりて、目、眉、額などいはれまどひて、うちおほひければ、物も見えず、二の舞の面やうにみえけるが、たゞおそろしく、鬼のかほになりて、目け頂のうらつき、額のほど鼻になりなきて、後は

坊のうちの人にも見えず、こしりみて、年久しくありて、なほわづらはしくなりて死
ににけり。かかる病もあることにこそありけれ。(サ四十二段)

兼好の医薬に對する関心の強さは、彼の病氣を恐れる心に裏付けられてゐると見てよ
からう。病氣を恐れる心は勿論、自ら身体の健康を念頭する心とも表裏する。「四十に
たらぬほどに死なんこそ、めやすまるべけれ」(サ七段)と書きとめた兼好は必ずしも
病氣の苦痛を意に介さなかつた人ではない。死にたくないという生への本能は、偏倚を
性とする草庵の住人にも例外ではないのだ。彼は徒然草の到る所で、身命の保全に留意
してゐる。この文段の如きも、そういう作者の関心の強さが筆をとらしめたものに相違な
からう。

身命段抄によれば、この文段の主意は、「天命を知らしむる也。莊子太宗所爲の心が
とあり。また僧都の容貌の激変ゆゑに、「同じく莊子の人間世篇に登場する支離疏の怪
異な風貌「踵墮於腋、肩高於項、会撮指天、五管在上、兩髀爲脅」の形容を引用して
ゐるが、如何なるものであらうか。

私にはこの文段がそうした教訓を寓したものであるとは考へられない。これは作者兼
好の奇病に對する恐怖感の卒直な吐露であるに任かならぬと思う。「かかる病もあるこ
とにこそあれ」という末尾の感慨は、何よりも、この世には恐ろしいことがあればある

ものだといふ身の毛もよたつような戦慄感がこめられていないであらうか。

「氣の上る病」といふのが、今日ではどのような病名に該当するのか知らない。諸注に從つて、これを逆上の病氣、高血壓の症状と解してよいのか、それはともかく、從然草第一四八段には「四十以後の人、身に灸を加へて三里をやかされは、上氣のことあり、かならず灸すべし」と見えてゐる。この「かならず灸すべし」といふ断定の語氣には、兼好自身の体験が強烈に裏付けられてゐると見える。かれは自ら上氣の事があり、灸治によつて、それを克服した体験、即ち上氣の事には何よりも灸治が特效薬であることを親切に教えて、同病者に勧告してゐるのだ。これで想像すると兼好自身、「氣の上る病」に對して、体験者であつたのに相違なからう。「氣の上る病」がわれ自らの病であれば、この文段に奇怪なる凶絶の死を遂げた行雅僧都の可能性は、兼好自身にも十分ある、たわけてあり、かれが僧都の話を知つて愕然たらざるをえない理由は自然に納得されようといふものである。

この文段は奇病といふ異聞を興味的に人に知らせんがために書いたといふようなオミヤ的侍親の好事に出たものでは断じてない。ここに壺齋流の來意を強いて求めれば、この文段の前に「我等が生死の到來、ただ今にもやあらむ。それをわすれて物見て目をくらす、ちろかなることば、なほまさりたるものを」といふことはの實感を、行雅僧都の

終焉に連想してゐるとも見られよう。戦慄の事實は何よりも兼好の身上の可能性であつて、他人事ではない。かれのことばが競馬の観衆に感銘を与えたとすれば、こういふ実感が、ことばにこもつていたがために他なるまいと考える。そこに確認されねばならぬのは、講壇の上から無常を説くというやうな傍觀者的な余裕に出たものではないことである。なへての教師というものの談者が対象を動かして得るかとうかの操縦は、この間の眞実感の有無にかかつてゐると云つてよい。兼好は身をもつて、その氣を実験してみせたといつてよからう。かれはいつてか自讃をこめて、念心の笑を導べるから卅四十一段の筆をとつてゐるのも偶然ではない。女子自ら模範學生であつた学校教師の凡くは説教など業の役にも立たないことを知るべきだ。

この文段の鑑賞として名評をうたわれてゐる沼波瑠音の評に「奇病を書いたのである。例の座談である。この文は無造作に書いてあるけれども、そのなま名文である」とする。「例の座談」という指摘がどういふものか甚だ茫然としてゐて、わかつたやうなわからぬやうな自得ぶりに、鑑賞上の問題はよろう、以下の結いた氏の一流の鑑賞には「二の舞のふしてと、つた前には滑稽がある。笑つて見ているという所がある」と、宗匠風を氣取りが見える。ばかばかしい、何が「滑稽がある」のか、何が「笑つて見ている」のか、滑稽なのは氏の鑑賞態度であり「笑つて見ている」に至つては、兼好の戦慄感を把握しえなかつたものの前評も甚だしいと反駁せざるを得ない。名譽をうたわれ、今日

に、読者を絶たない氏の、突然筆鋒詰めた、その名をささ、えて、その氏は一語の鑑賞の項までよろう、しかし私をして之れいふれば、氏の印象批評にはこの文段の鑑賞に指摘された独断に類するものが甚だ多い。徒然草の研究史に一時代を劃して彼の著作に對しては、衷心敬意を表するに當るべきではないが、印象批評の独断は今日の研究水準では、とくに受け入れられぬものになりつゝある。

この文段を花子より脱化と認めるのは當りないであろう。その天命云々方々というのには堂陰附会にすぎない。なるほど兼好は南華茶、花子の愛読者であるには相違ないが、何れもこの所にまで花子をかき出さなくしてしまふことは、注者のペダントリイと云うべきものであらう。せしむるは、こいつけをして自ら高しとすのは、眞實のモラルがつかみえない、浅學者流の通弊である。そういふものによつては、無知な読者に博學者の術をこゝとてきよすが、所詮はこけ玉どしにすぎない。

天命説に並んで業因説というのがある。行雅は過去の業因により、かくも浅ましい位になり果てたという考え方であり、いわゆる因果應報と見るのである。これは佛敎に根深い見方であり、たまたま兼好が法師であり、仏者である所から、文意の裏に、さういふ説話的な示唆が伏在すると見るとあらう。

しかし兼好は本文のどこにも、そのやうなことはふれてない。又、ことさらに、それを示唆するやうなものも認められぬ。天命説と共に、論者の恣意的な解釈にすぎ

な、しかしこの説には、モラルとして一種の面白さがないわけではない、何とすれば因果説は、それのみならず仏教にみけり最も通俗的な考え方であり、行雅や兼好の當時には、仏教的信仰の浸透と相まって、この見方は大衆に最も歓迎されていたものに相違ない。この奇病の病源論に不可解を懐く大衆の知恵というものは、必ずや、その一部には、これを因果説から解釈しようとするものがあつたかに相違ない。

行雅は、教相の人の師するし程の学僧であり、かれ自らも因果説は常に口にしたのにも相違なからう。その行雅が、かくの如き業病にとりつかれたというのだから皮肉といへば皮肉なことであろうが、それだけに彼の苦悶も、深刻な痛手を倍加したことであらう。

ところが兼好は身、法師であり、出家者であるに拘らず、その行文には一切仏教の因果説奥にみわけてすらいない。かれにみいては、「氣の上る病」が重症に悪化して、かくの如き悲惨な結果になつたのであらうという見方は強いが、今日の医学を以てすれば、その当否は知らず、見方の性格は科学の領域に止まつていたのであり、向ら佛教的信仰はこれに聞きまいていないといつてすからう。私はここにも法師らから兼好の知的な性格を見て、それを掩護することに躊躇することを要しないと思ふ。兼好の考へ方は、當時のこととしては、科学的であると言つてもよさそうである。

鎌倉時代には有名な病草子というような医学的文献も今日にまで保存されている程で

あり、医療に関心の深い兼好も亦さういふものによつて、ある程度の病氣にいつての知識を身につけていたかも知れない。一方、源信の往生要集というようなものも盛行していたのであり、時人には宗教と科学的なものとが、いつとも未分化のまゝ混合しあつて、奇態な考文方が、むしろ常識となつて言論に吐かれるのが、当時の常態であつたと見てよからう。さういふ時代に、このよふな文章を書いて、その行文に兩者の混濁を微塵もあらわしていないといふことは、確かに注目されてよいことではないかと思ふ。この文段に限つたことではない。徒然草のどこに於いては、因果理法を親方は示されていまいといつてよい。徒然草が法師の筆に綴られた文章であるにかかわらず、坊主筆のものといふえんの一端はさういふ知性的な抑制に筆のすべりを止め得た處にも考えてよからう。

兼好の仏教的信仰が厚かつたことは、もとより否定すべくもなからうが、その兼好が仏教的因果の理法に對して、どれほどの信仰をもつていたかは一つの問題提起であり、かれの人間性を理解する上に、一つの大きな手がかりとなるのではあるまいか。かれは知性の人として、その事性は極めて懐疑的であり、筋道や理窟に合はぬものは、どうして信じきれないといふような一面がたしかにあつた。それは早くも母時代の父との仏教向答によつても看取されるであらうが、徒然草の中には、さういふ作者の性格が濃厚にあらわれ、行向にそれが顕える所も決して少なくはないのである。兼好の人間性を究明して、その時代の背景に中世といふ知的劇畫をみくとき、かれの知性人たる風格はより一

管の光彩を放つと認めねばならぬのである。

惠橋の中將という人物は、注書に考証された如く、村上源氏久我家の在流、唐橋大納言通賢の二男、左中將源雅清が當つていとすれば、兼好が家司として仕えた堀川家の血族にならざる。もちろん、語は兼好出生前のことにならうが、こういう奇病は語柄として伝承され、何らかの機会に兼好の耳目に入ったろうことは、十分にありうることである。かれ自身の時代を去るかなり昔の語が、いま現に兼好の實見によつて筆録されたかの如くに、行雅の病勢の進行が、簡潔に表現されて餘蘊なきは、さすがに兼好独擅場の名文と評すべき所ではなくてはならぬ。しかも、かくのごとく生彩陸離たる行文によつて描き尽されたゆえんは、先にも指摘せる如く、かれ自身の体験に觸発された痛切なる戦慄感による、かれは何時、たれかつこのよきな語を聞かされたのかは明らかではないが、かくとも、當時かれには、自らに於いて「氣の上る病」をもつ者として、自賞があり、それを懸念して、条治などの療法にいそしんでいた矢先のことには相違ない。サ百四十八段はその先行文段たる第百四十七段に「条治よまた所になりぬれば、神事にけがれありといふこと、ちかく人のいひ出せるなり。格式等にもみえずとぞ」と得意な考証辭を弄しているが、こういう考証ぶりにも、彼の理窟一行さの一端は認めぬわけではないにせよ、条治の痕跡のある身体をもつて神社に詣で、時に参籠するよきな体験もあつたのに相違ない。(第百十五段参照)。そこにもかれの信仰態度の一端は窺われて、興味

深いのであるが、第四十二段に、かれを震撼せしめたのは、かれ自身、自覚症状そのものであった。例えは、病の症状を氣に病む人が、自ら思い當る兆候を交えて、患者の苦惱痛歎をきかされた時に感ずるであらう。戦慄感の深刻な打撃がこの文段の生彩を、いやがよにもその効果を發揮せしめたものと評しうるのである。

氣の上る病。兼好が徒然草序段で「あやしうこそ物狂行しけれ」と書いたのは、何れみずから書いた文音を、後で讀みかえしたり、またそれに添削を加えたりした時、作品のときばえを顧慮しての感懐ではあるまい。そういふものは多きはふたれもいれないが、作品全体の持ち味をこぼれど端的に道破したことが、そう簡単な心境でありうるはずはない。

文章が物狂行しいのは、それを書く作者の発想心理に物狂行しさがあることである。物狂行しい作品というものは、物狂行しさを痛感している人によつてのみしか書かれ出づべくもない。これが先行の絶対條件であり、作品は人なりという親愛には、たしかに本質的な真実性がこめられてゐるのに相違ないのである。物狂行しい兼好という作者によつて物狂行しい徒然草という作品が書かれたのであり、作者と作品との向ふこの相関性には十分に考察を要する課題を認めてよい。

ところで、兼好の人間性にまつわる「物狂行しさ」は何によつてあらわれたのであらうか。そこには、かれの先天的素質も考えられねばならぬし、また、かれが生きねばな

らなかつた、生活的な環境要素とからんだ体験等も、かれの運命を支配したことを考えねばならぬ。一口に運命と云つてしまへば簡單であるが、特に兼好ほど複雑な人間に於ては、その人間性を然らしめた「物狂行し」さ」という内容はかならずしも、さう簡單な割り切つた答が出るはずのものではない。

運命ということばはよくとしても「物ぐるほし」ということばには、たしかに彼の自己及者的な要約があり、人間と作品との本質を最も端的に之いちてゐるようによつて、私の見解には、或は異論があるかもしれないが、従來の注釈的研究によつては、序段の結びであるこのことばが、簡單に字面をなでた程度に用却されてゐる憾が強く、作品の本質的解にこつした態度の皮相的淺薄感が免れえなかつたのも道理だと考へてゐる。私は作者と作品との必然的な相関性を一言もつて之う呼ぶ。この「物狂行し」さの嗟嘆をおいて他にはこれにかえらば表現はないのではなからぬと之を考へざるを得ないのである。

徒然草の本質についてほつたれつれしを究明すればよいという態度には、そのつれづれを支えてゐる作者の人間の基礎がこの「物狂行し」さの基調に統べられてゐることを考察が不充分であると言はねばならぬであらう。

作者と作品との相関性を解く「物狂行し」さの全體を余すところなく究明することは容易なことではない。それには、作品の各文段について、更にその具体相に即した考察

にまたねばならぬのであるが、その要因の一部に、かれの病氣の事実を考えてみたい。延慶元年秋のころ、かれが相當の重病の床に呻吟していたことは別考をする。かれには早く青年時代から病質の事実が指摘されるのであり、これはその時、回復した以後に於ても、ほと人と健康人として、その生涯を完うしたとは想像されない。示唆に富んだ事実指摘と認めよう。

兼好は生来多病の病をうけてきた人で、ほなかつたかと思ふ。徒然草についてみても、かれが医療に親しみ、病氣を恐れていることは、その文段の文字間や行文の示唆に到る所あらわれ、感じられるのである。「四十歳まで死にたい」と漏しているのは、一種の逆説であり、彼の落柳の病を考へるとき、むしろかれの病氣を懸念し、その病苦の耐え難きに對する一種の恐怖症がいかにも強く、早く、のせから解放されたいという念願にまで、その不安の陰影を感じたりするのである。

早くこの苦痛から解放されたいという念願は、なにも当時流行の淨土教的思想によつたのではなく、より現實的なかれ、生の課題ではなかつたろうかとすら考えられるのであり、一種の安樂派に對するあこがれや放求か、その心情の背景に讀みとれなければない。どうもそのよきな氣持から筆を止らせたのではないかと考へられぬこととなさうである。

この世の無常から筆を起しているこの文段は、文字通りに解して、単なる老化醜態を嘆き恐れたふたつたとのみ解しては、どうも余りに、筆のよきが軽薄であり、兼好

の文章心理に惹付けられたものは、そういう単純な動機づけでは納得できない。しかもあるようた。徒然草が行間や紙背に語られる心理の模倣を誤まねばならぬと、課題はこの四の消息についてである。かれほどの複雑な心理のヒタにかくれ、抑えつけた表現に文章をかく人間には、老醜を恐れるという程度の簡単なダンディイズムにその嗟嘆を満すというようなことは、しやわしくなく、わたりにはあつるおろしうべからざることにすら思われるのである。こゝに、こゝに、文面的に物沈すからして、この文章は青年期の筆になるなどとの見解も出てくるのではなからうか。

兼好の病氣については、すでに早く、島津博士が一流の考証をひれきしてあられた。博士の診断の結果は、かれが神経症の人であつたこととみていたようだ。兼好はかならずしも健康な人ではなく、才子多病の常例に漏れず、多病の人であることと去われたようである。しかし島津博士は医者でなく、やはり文字の研究者のことであるから、かく指通されたからといって、その診断が、作者と作品との相関性に決定的な鍵となりうるかどうか、には問題がまろしと思ふ。徒然草という作品に、作者の神経が、鋭敏な感性をもつて、行き届いて、そのは誰かよんで、空易に判ることなし、もしこの真を押えてならば、作者は相当神経質なデリカシーに富んだ人である程度のこととは想像にかたくな。しかしこれを以て作者は神経症の人であつたといふのでは、連断に失するであらう。徒然草は決して、神聖の園た、人間のあまう？作品ではない。また生来頑健で病氣を

らずの健康優良者のおかげで文学で生ない、それは何よりも、神聖の如かる観察力の鋭い人の筆でなくてはならぬ。但し、このデリカシーと神聖さとの間には、緊密な連鎖的感應があることだけは確かであり、この実態を説く担当強い裏付けが首肯されてよいろうと思ふ。

私は、この神聖さの背後に、なにかの具体的事実として「氣の上る病」を想定したいと考へる。

「氣の上る病」が、今日でいう「高血圧」なる病名に符合するかどうかは知らない。しかし「高血圧」特有のよめいふだたりさは、兼好の「物狂行しきし」心情とどこか酷似の外発症状を見せている、である。もちろん、だうらといつて、兼好の物狂は、どの「氣の上る病」を基因とするかどうかは、医学者ならぬ私には連断の限りでない。ただ、その病箇に想像される複雑な因子的からみ合ひの一つに、この上氣の事が筆外、大まかな方をして、その筆鋒や、その行状に作用しているいかどうかを想像してみよう、である。

彼が徒然草で出家の要を強固して説いた「唯今の一念」は、無常迅速のこの現実世に即して説くわづ、た仏教的教理の一端として、なにかまた教理に同調の場を認められた故に、かくうたうたものとみるのは、私には、徒然草が体験の文学であるという見解から、やはり皮相の感を整へてあるものである。かれの行文は幾許に似ており、そこにはな

れの考前である、精神のゆとり感が甚だ稀薄なことに注目したい。

恐らく、彼には上気の病勢がこもりては逆上して絶叫するような体験がまつたのは
方かろうか。逆上の結果は心のゆとりをとりえよりけずはうく、自らの生命に對して
今にも命終の概がふとすれたのではなかつたかといふばかりの緊迫した危険感に心身をさい
なまれるような体験がなかつたわけではなく、その節の心境が、その文段のニユアース
に出まゝと見るのは許見るのであらうか。私は行文に裏付けられた文章心理にはとう
と兩者軌を一にしてゐるやうな性格が感じられてゐるからである。

今にもこときれるかと思われはかりの隠微的な苦惱にさらされ、体験者ならば、そ
の性急な不安感が、出籠の要を強調するあの文段にも端的な絶叫の形をとることは、そ
れほど不自然ではありえまいと考へるものであるか、この見解軍して如何なるものであら
うか。

そういへば兼好は、徒然草の他の文段で、良寛僧正の説話を記して、彼のことを「極
めて腹あしき人」と書いてゐる。私には、この良寛僧正の「腹あしき」にやはり一種
の逆上の症状を想像できなかつた。

そこには愚直なまでに精神的ゆとりというものがなかつた。全く直情径行であり、放言者
の口さかなへの立腹が、膨れたをかきむしるまうを擽いみとなつてゐる。いかにもその
立場は放言者に對してはなかつた、櫻の女木に對してであり、切りくいに對してであり

場地に好してである。無心のものに對する、かくの如き怒りの吐き気は、正に愚直であり、僧正の人のよさを裏書きしてあり、この人のよさが口さがない連中につけてあるた、恐らく、僧正も亦、逆上の高血圧に悩んだ人ではなかつたであらうか、とすれば兼好があの文段を筆録するにまつた時の心境には、やはり同病相憐れの惻隱の情が動く動かないとでは文章にこめられた愛憎の有無の問題はつなかつてくることは必然でありそれがより一つの臆談に過ぎないにせよ、かく解することは作品の總書にはプラスの立場に考えられてよからうと思ふ。

優れた文学作品の背後に、作者の疾病が作用していろいろという課題は、多くの實証例を認められてゐる、徒然草と兼好との間にもしさうした相関性が十分にある得るとして、私の考察は推定を下さざるを之をくする。少くとも、一つの示唆を見てよからうと考へ、従来の研究がこの課題について、餘りにも無関心であつたがため、兼好は健全なる常識人として、その作家像が誤られてゐるのには究明を要するであらう。

天才者と疾病の關係は、早くロビンソンエタリから指摘されてあり、さるる下りも目新しい問題ではない。しかし、さういふ疾病面への究明は、さういふ上、どの具體的事例が明らかでない以上、陰暗な間に無視される可能性が多分にある。兼好など、その徒然草の表現に、たゞ字面をなでる程度の注釈作業によつては、その深部を洞察することはほとんどできないと之つてよい。人は兼好の好色性についてはい、あはれと、いらぶ、

る詮索をほしいまゝにするであらうが、こういう面への関心は意外に却り易いものである。かれを健康者として考へることには、その健全なモラルを平坂に解釋して自得する立場には、あるいは都合がよいかも知れないが、そのモラルの極めて健全なる所以を説明するのには、かれの身体的健康を理由に指摘することは許すべくもないのである。

兼好は患はれた健康によつて、平凡な人生を送つた人間ではない。徒然草の文章のヒタの細かさ、その見えざる所にかくされたデリカシイは、その作者が精神的に必ずしも幸福な生を享受したことと証しとは認めがたいのである。常識的健康者は、その常識的平坂を鈍感さの故に、兼好の心理的ヒタの内部にその眼光を透視することのできるものである。

徒然草について、彼はその百十七段において興味深い友人論をあげているが、單なる高尚性の羅列のみ、讀みとるためには、その簡明な些微の背後にある彼の友人論は余りにも、彼自身の人間性を告白してゐると考へねばならぬのである。

徒は、そのよき人としての條件に、必ずしも疾病に悩む人を答へたのではない。及社に惡しき友の中に「病なく身強き人」をあげてゐるのには意味があるのである。誰も好きこのんで病人を友に選ぶものにはよるまい、しかも「病なく身強き人」が友人として、好きな人でありえないことは明かだ。生れて病苦の体験を知らぬような人間は、病ある人の苦惱が理解でき、同情が寄せられるはずはなく、彼らはその健康の故を以て、精神的にも

心理的にも、極めて不健全な身を如することの方が多いことを、兼好は益的に指摘して
いるのである。そういう人と友情の暖い交流を希むことは、不可能である。兼好がこの
ような表現に彼自らの友情の條件を想定したのは、これもやはり彼自身が健康者の無知
なエゴイズムを甚々しく体験された事實のあったことをうらづけるものと解してよか
ろう。それはまた、かみ自ら疾病に悩んだ人であるという告白にまで帰趨せざるを文を
いはねてみる。

ところで私は兼好の病氣について、彼が上気の苦惱を体験していたことを指摘した。
徒然草の中に、そういう病氣が 表現の中ほどのような具体性を以て示されているかど
うい問題については、その具体を明示した文字とその中に見出しがたい故に不可能事と
いつてよい。しかし、ここに私には興味深い記録が一つある。それは「月刈蓬集」に次
の如く記された。

人語て之。兼好法師は慶運とは中惡敷くて、度々いさかひける。御子左御許に而、
何れが歌にや慶運が歌を兼好難したりけるに 色々論じ、兼好大きにいかつて、慶
運が頭をけりたりけるに、けいん人物もいはて立ふがりける。人々これるとどめけ
れば、あるじ殿 兼好いかなれば慶運をはるぞとの給ひしとき、兼好うちわらつ
て、「気のはるかいらの山を春と云は霞や腹を立つと思へ下」この歌にて興とな

リぬ。

この説話は 既に石田吉貞博士の名著「頓阿、慶運」に引かれている。博士は、これについて、兼好のことにはふれられず、対象たる慶運の人間論に言及され、次の如くいわれた。

「この説話をどこまで信じてよいか問題であるが、とにかくかくは、慶運に關する話話のすべてが、一種の争氣をもつてぬるのには見逃し得ないことである。それらの話話には誤伝もあろう、てたらぬもあろう、しかし、すべてがすべて争氣をもつてゐるといふことは、慶運の存在の根柢に、何かさうあるべきものが存したことを示すものではなからうか」と。

月刈菴集といふ作品がいつ、たれの手になつたか、今日では明らかではない。従つてこの説話の信憑性については、なほ決定的なことは断じうべくもないのであるが、私はこれを、室町の中葉以降、その末期に至る時期、徒然草が、書寫によつて、かゝり流布して、兼好の名声かきみに喧位されるに至つた頃のものと見てゐる。まち加つて、いふかもしれないが、この説話の語るところは大体において信じてよからうと思ふ。慶運とそれとの仲がよくないことは、同じ四天王に並びながら、淨辨は家集に、頓阿も同じく家集、革庵集、徒然草にその名を見出し得るのであり、しかも、その事蹟がいずれも

兼好と極めて親近感の強いことを示唆してゐるに拘らず、一人、慶運については、これを敬するものがなく、たまたま見出しえた、月刈蓮葉の話はこの怨たらくである、兩人が同じく四天王として宗家二条家、の歌会に屋、同座したろうとも推して知るべきであり、石田博士のいわゆる如く、慶運が「わに争氣を秘めた人物で、たまたますれば、先輩たる兼好を無するよくな言動がなかつたとは併証の限りではなく、弱筆の痕から、そのよくな争氣を以て訂された兼好は、怒氣心頭に發しては、つい鉄拳を振うよくなことだつた、なつとは限らない、特に彼には氣の上る病があり、焦燥感にかられ易い病體があつたとすれば、そのよくなことにもなりかねないことは、自然の心理として納得できぬわけでもない。特にかねがこゝ時によんだ即理の歌に「氣のほるかしら」とある、「香し」とか「腹を立つ」とか、よからか懸詞の妙を得てよまれているところからして、これが後人の恣意に在る歌としてばかりの出来げではよすぎるよくなる感しせわわけではない、恐らくこゝろ、う話ば、當時の歌壇にかなり喧位されたであろうし、その歌壇がほぼ位承の形で存続していつた事情を考へると、甚け口から位えられ、遂に月刈蓮葉に文字として定着したという事情も、まんじらありうべからざることはなやそである。以上は多分に恣意的な臆測を交へた論証であつたが、徒然草によつてのみでも作者兼好に上気の病症のあつたことば推定して、ほぼ大過なからうと考へる。

断絶

兼好法師自筆家集によれば、兼好は横山の山中にあり長 歲月を暮したこ

とがある。この山居の時期が出家後の隱遁生活であつたといふ獨斷説が行われている。獨斷といふのは、考証らしい考証が提示されず、徒々に印系を振りまわしてゐるのに思ふぬからだ。私にこれを出家以前に亘る堀川家の家司となる以前の少年時代のことと推定してゐる。これに關して詳細な考証は別に提示する。貴族の子弟が叡山によつて修學するのは當時の風習であり、兼好も亦、兄善通と同様、出家者として學道をやめた。よつて念願していたかどうかは明らかでないが、かれの持川時代が成人してからのことではななくて少年時代、少くとも永仁五年（兼好十五歳）のころであつたことは實証できる。

この年、従二位侍從藤原公世は五部大進孫養のたぬ東塔北谷の靈山院に之を旅行して、筆の妙手を振つた。十五歳の兼好も所縁をもつて、この孫養に参加してゐると推定されるからである。すでに公世は兼好の親炙せし人であれば、その「せうと」と記された「良覚僧正を關之し」人も亦、兼好の知縁であつたのに相違ない。「せうと」は一般に「死」の義に用いられてゐるが、尊卑分脈の系圖によれば、逆に公世には兼好の立場に記されてゐる。兼好も「せうと」と記す例が他に求めようのないかどうかが問題が残るにせよ、良覚僧正も亦、少年兼好の知縁になつた人であることは信じてよからう。家集には、公世の筆の妙音に感銘した詠が思ひ出草として記されてゐるのみならず、從然草の方では、兄弟の良覚の人間像が簡約の文字によつて、具事なテッサンの筆勢をとりまわつてゐる。今、そのテッサンを鑑賞するが、蛇足を加えてみよう。

兼好は良寛留正を「極めて腹おしきんをりけり」と説いている。この腹おしはもとより腹の黒い人間だという評価ではない。「怒っけい」人間をいつているのは凡百の注書の解く通りであろうが、兼好は、その怒り、けいさの裏に彼の人問の積氣を推賞してゐる。この文段は、江戸時代の教訓家公考えた如く、仏教徒でありながら、律戒の三毒説の實例に、良寛を槍玉におけたものでは更にはない。兼好の本意はむしろ逆に諷みとらねばなるまい。彼は明らかにか、良寛留正の子供の如き天真の性に親愛感を禁じえないのである。腹おしを戒しめるといふ仏戒に違反した「腹おし」に教訓をこめていると見るのは、その道学者流の人間観を淺薄るのであり、解釋の上二りに流れる。兼好の人間を観る眼は、良寛の人間性に透達して、更に鋭く冴えてゐる。皮相な教訓譏刺とよつてαはかである。

徒然草を讀んで、私に興味のあることの一は、その、いろいろの怒りが事例に徴して描かれてゐることである。高野の証上人の語れりたり、清水参詣に同道した「老いたる尼」の語れり「うち腹たちて」と記されてゐる。更に大覚寺に遊々遊びのタシにされて「腹たちて退り出でにけり」と記された源氏物語の学匠「くすし忠守」の語れりたり、光親卿の「食ひちらしたる衛重」に女房達が腹を立てた語れり同断である。また「御堂に、いみじき兒」を誘つて逆山に趣好をこらしたのはよいか、拳句の果は、とんと當に油揚げをさらわれて、仲間別れの醜態を演じた、仁和寺のおそび僧入りの語

し亦、腹立ち話に無縁ではあるまい。

私は徒然草に笑いの文学を認め、のびきかなものではないか、その笑いの背後に表裏して人間の腹立ちが兼好の特別な興味の対象となり、いるべき看過すわけにはいかない、しつし徒然草の材料にされた立腹は何れも、それほど深刻ではない、何れも軽い諧謔に人のふとやいさ自ら解いてくゆる態のしるばかりなのだが、こういう素材を好んだ兼好の作家的人間像は、やはり、の視点に立って、考察せらるべき課題を忘れるべきではないかろう。しかしそれは又別個の考察であり、ここは良寛僧正の「腹懸し」をてするだけ克明に描けば事足りる。

怒りは兎苦しいものであり、人間の最も醜劣な地金がむき出される契機である。しかしその怒りにおいて、かえって地金が露骨にむき出されるのである。地金といえは、虚飾の多い人間の場合には醜劣なものに相場がきまうているのだが、兼好は相憎とそういうものを嗜好するほどにいかものくいではない。証空にしろ、良寛にしろ、幼児のことと、童心の天真さが流露するとすれば、怒りも亦、一つの徳ではあるまいかとすら思われる。兼好は、この徳をよく見据えて、そぞろ微笑まふにはいらぬから、その筆をとったように思われる。

兼好は櫻が大木であつたことを始めに断つてゐる。それを切り倒した後の切りくい(切
断面)も亦その上に人間を踏居せしめるに足るほどの広さをもつていたので、相違なから
う。櫻の切断面にあつた年輪のうすまきは、叡山の僧侶の人間の歴史を究明にあつ
たものであつたかもしれない。なるほど大樹を切り倒せば、その巨大な姿は消えて
これあるがため人の口は自らに封殺されるであらう。さう考へた良覚の計算は十年の
ように無邪気である。しかしトンコイさうは問屋があらさる。口さがるいは京童の
幸であり、へらお口を叩くはスレックラシの幸である。一應大樹が姿を消してもその
後には切りくいが歴然と取り残されていたので、良覚の切断に折つた人間業のおさま
りさを顕彰してゐるのも同断である。「切りくいの僧正」というへらお口が叩かれるの
けむしろ当然の心理であり、それは良覚がはからずして使囃したのと同じことなのだ。
之れは火の油をかけたよる結果に在るのを見えすいたこと。しかしこれにはさういふ
人間の心理的及動性がわからない。子供のように単純であり、その行爲はストレイトな
のである。年少の時代から修道一途に生きて来て、世間という汚濁の土壌に汚れたこと
のない人間には、世間のさうしたスレックラシ、迷宮的心理は對世界のことであるから致
し方がない。仏法に習はられた三毒の一つ、瞋恚の発動に對する評価からして良覚を「肚
腹し」と批評することは易しい。むしろかれの無知や瞋恚が彼の高德を裏付けて有難い
のであり、スレックラシの立場からはお目出たいのである。兼好のわらいは前者にあり、
高野の証空上人に對してなされた「尊とかりけるいさかい」といふ評と同断であるはず

定る防衛となりえたかどうか。濁つた水はまるで地獄の重火の如きものであつた。垢池の僧正、良寛の徒勞はここに於て極まり、また何をかゝる人々である。大樹が垢池に委ぬるまで、世間の地金なわからない。僧正は正しく天真爛漫である。そこにけ世俗の汚れが微塵もない。この純真さは世俗知らずなどという批評を浴せるのには餘りにも出高であり、尊いのである。立腹を腹意と解し、仏教に於てはいた仏野などという教訓家の解釋は無理解も甚だしい。それではまるで世間の汚濁を首肯し、良寛の純真さをその汚穢の中に踏躰することにならう。ここで兼好は証空の場合のごとく「尊とかりけりいざりひなりけり」とは寸評を試みていない。しかし、彼の意圖したモラルは証空の場合と同断であること勿論である。

仏教では現世を娑婆であるとして説く。娑婆は忍土の意であり、万事、隱忍の美德が要請されよ。隱忍が美德ならば、怒を發することは惡徳の最たるものであり、三毒の一つに腹意が提示される所以である。實に現世の勝負は腹を立てた方が負であることのみが多い。すくに立腹する「腹意しき人」は地上にあつては、常時々の敗者の立場に立たねばならぬ。「毒辱多し」と喝破した莊子もこの眞実を裏側から道破したものと云つてよからう。徒然草には、こういふ敗者が決を請ふ諸語の筆致で描かれてゐる。この兼好の決が理解できるようになつたのは、最近のことであり、恐らく大正になつて、沼波瑛音が出てからのことであろう。江戸時代のコチコチの道学者末輩の諸注家たちには、この決

の淫さが理解できていない。明治の趣味論的淺見もこれをどうえいするのには無カであつたといつてよ。かれらには何れも世間の娑婆的実相とその禍根がいかに人間の純情をけしていゝかが見えなかつた。これでは兼好の人間親照が那邊に究明さるべきかわかろ
う筈もない。

躰態はたゞかに人間の心性を毒するものであり、忍辱の徳に支服さるべきものに相違な。しかし腹よしき人は時に、この人間の真情において、その性格がより直情徑行であるために、稚氣の愛すべく純情可憐の人が多い、ことも見逃しえない事實である。兼好の筆の対象となつたのは、多くこゝろいふ人々であり、対象の設定がむしろ無邪氣であるだけに、そこには深刻な、怨恨の暗さがない。人間がいずれも軽いついえはそれまでであるが、その軽さによつて、かれらは決して罪惡感に牽引されて、自ら苦悶するような業の深さからは免れていふよりである。だから徒然草には殿中で刃を抜いたり主君の怨恨を暗さんがために打入りを決行するといふような深刻さはない。宿河原に於けるホロボロの復讐にしても、そこには澄まればよい、むしろ深刻な重苦しい印象は全く、それが兼好の好尚に適つてかゝる筆録であつたよりである。

なりひさご

人は己をつまやかにし、おごりを退けて財をもちたず、世をむさぼらざらんぞいみじかるべき。むかしより、賢き人の富めるは稀なり。

唐土に許由といひつる人は、さらに身にいたがへる野もなくて、水をし手しまさうけて飲みけるを見て、なりひさごといふ物を人の文させたりければ、或時木を枝に掛けたりけるが、風にふかれて鳴りけるを、かしがよしとて捨てつ。また手にむすびて冷水し飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけん。

孫晨は冬の月に食なく、蒿一束ありけるを、夕には是をふし、朝にはをさめけり。唐土の人、これをいみじと思へばこそ、託しとて世に傳へけり。これらの人は、語りも伝ふべからず。(第十八段)

許由は古代中国の伝説的人物である。兼好の愛読書である南華篇(莊子)にも登場しているから、その隱者性は兼好の志向にかなつた理想的人間であると思われる。しかし、本文段の原拠は「蒙求」である。「蒙求」にはほかに源光行の撰に在る「蒙求和歌」というものも行なわれていた。兼好はそのいずれをも閲讀して、いたのに違いない。ここでその一を採らねばならぬという問題ではなからう。

ところで莊子と蒙求とでは、時代もちがえば、撰述の内容にもかなりな差がある。蒙

求は違か後代になつたアンソロジイによつて、書名の示すごとく幼童の學習に資するを目的とした。「勸学院の直は蒙求を嚆る」という語もよき位で、古くは首族の子弟の初学テキストに使用されて来た。恐らく兼好として少年時代には、この書を學習したであらう。許由や孫農は現代人がイソソフ物語に對するような親愛感を以て彼の人間像を成長せしめたことであらう。もちろん、本文段のテーマは冒頭に述べられているように簡素清貧の強調であれば、莊子の中の説話よりも、この方が適切である。

兼好は清貧や簡素の生活を唱道するのにも何れも異國たる中国の伝説的人物をもち出さなくともよい、と一應考えられる。求めるとなれば、わが國にも、より近い時代により切實な教材はいくらでも求め得るものでもない。むしろ彼を措いて之を採る方が、一層効果的ではないかと思われろ。いまさら家人熟知の許由や孫農を引用するに當るまい。

しかし、人を所にも筆者の對象への親愛感と古典的憧憬が著しくあらわれている。兼好は自らの教養親に立脚して以外はものを書かない人であり、その教養親を支えているのは、いうまでもなく、古典へのまごがれてあつた。新聞や週刊誌の記者とは、その執筆の態度が自ら提を擧にしてゐる。たとえ家人熟知の事柄であつても、自ら親愛の情をこめて筆をとりえないようなものを敢て書くよきことはせぬのが兼好の執筆に見られる基本的な態度であつたと之えよう。

所で蒙求の「許由一瓢」と「孫農藁席」もその表象するところは一見極めて現實的な

れのした例の中国人に常套の誇張癖を感じせしめる。彼らは大陸的民族であり、すべてを極限に誇張して表現せねば虫がふさまらな、のかも知れないが、そういう性質は、われわれの島国的感覚ではいさゝかしてよまず。いはゆる「漢意」などという批評も、こういうところに反接の一因があるのかも知れない。彼らには彼らの大陸的感覚が自然であり、われらにはわれらの島国的感覚が自然であるまでのことだ。この誤差を無視して、このことを論ずることは、批評として妥当を失うことになるかねない。

兼好は自ら奉ずる古典主義もさることながら、これ位のことでは百も承知の上での引用である。彼の古典主義に見られるこういう好尚を指して「つくりみやび」などと書きあつけるのならば、それ以後人の酷評というものである。しかし、こういう觀念的問題は、ふくとして、兼好は自らの主題を説くのに、異国人たる許由や孫農を引用し、兼好は自らの国でよる日本人のことを、ことさらに「これら二人は語りも伝ふべからず」と慨嘆している。コナコナの国粹主義者ならば、この現実批判は、自らに鞭うたれるの思ひがして反感なきを得ない所であろうか。国学派の人々に徒然草かとかくの論議をよぶのも所以なしとしない。しかし、徒然草の価値は国学派の権威がいかにかこれをこきあふして、いさゝかも色あせるものではなく、その生彩は依然として光芒を放つことをやめない。徒然草の中にこのような自國蔑視の文章があつたからとて、読者はなほ自らの愛國心を傷つけられたとは思わない。傷つけられたと思ふのは、自らの愛國心が偏狭に失してゐるからであり、これは寧ろ兼好自らの愛國誓世の至情がはとばしるころに出

た、先達のいましめとして、ありがたく頂戴おわねばならぬ所であらう。

古代中国文化への憧憬は、歴史の遠い昔からの伝統であり、兼好の時代にも、モラルとして上下に浸透した事実であった。そこには、一ヶ焼刃的な性格は微塵もない、中国人の叡知は、遠い時代からわれわれの文化に指導的権威を樹立していたのでより、兼好も亦、それを尊望しながら、自らの教養を培養したまでのことである。彼が談話の誇張を念頭しながらも、これを取り上げたとして、その間にはいささか不自然さはないはずである。

兼好が筆を執るとき、想念のきらめきを、かれ自ら、「心にうかぶよしごと」と告白しているのだが、その「よしなくごとし」を「そこはかとなく書きしつげることわつてし、それをそのまま気楽にうけとつて読みながすことには、彼の発想を支えている古典主義の重たさ、厳しさが、これを許さないのではないか。

「心に浮かぶよしなくごとし」を「そこはかとなく書きしつげた」とは作者の謙辭である。謙辭をそのままうけとつてノホホンとしているのでは、不朽の佳品を残してくれた作者に對して礼を失することにならう。徒然草を讀むのに禮を正せというのではない。拜讀は、うけとる創の心構えの問題である。この構えのできなない間は、味讀したつもりでいてし、作品を形象した作者の精神とは遊離した世界で自慰しているに過ぎない。従

朱の徒然草論に物足りなさを痛感させられるのはこの處である。あたくりのこの討論とて、権批であり放逸でもある。また先達の勞作に導かれた所は決して勤くない。誤りて感銘をよらわすところである。だが、また、私は誤解を恐れず、自由に解釋し、窺見をよべ。作者の意圖がいかん表現せられたか、という根本をさぐるうとするのである。

第一八段の原拠が「蒙求」であることはすでにのべた。その「許由一瓢」に「逸士伝」を引いていう。

許由隱箕山、無盆器、以手捧水飲之、人道一瓢、得以操飲、飲訖掬於水上、風吹塵、塵有聲、由以爲煩、遂去之。

こゝによると、許由が一瓢を得て、これを棄て去つた話は堯帝から天下を譲ろうと試われたのを耳に汚れたと潁川に耳を洗ひ清めたのち、箕山に隠れた後のことになる。天下を一畝したほどの彼に一瓢を捨てた位のことでは塵を吹く如くであつたらう。よほど清潔に徹していたものと見えて、耳を洗つた後でも、物紋への連想は一瓢の鳴る音にすらそれをかゝりかまると聞いて我慢ができなかつたものと見える。こゝらの心事は、第一五四段に、日野實朝がかたわ者を見てから、愛玩の植木を振り捨てたのとちよつと似ていないだらうか。兼好は耳を洗つた話にも、やはり潔さを同感したのに相違なからう。

「なりひてご」は諸注のごとく瓢箪でよからう。原形のまま使用したのか、切断して

飲器によつてたしうか、考証家に諸説あるようだが、ここは粗末を原始的蓋器なることを押之れば足りる。面白いのは、「人のえさせければ」である。許由が「水をも手してささげ飲んでゐる様を見て、さぞ不自由なことだろう」という好意に出た行為である。「なリひさご」を與えうれたときの許由の氣持はわかろないが、仰山を言ひ方をすれば、原始的な生活主義者・自然主義者許由が、文明の利器を手にする生活者になつたことであり、文明の歸趨する後進化に一步を踏み出したことであるとも見られる。

許由は伝説的人物である。果してそのような人物が實在したか否かはこの段のモラルに關与しない。その原初的な生活態度は老莊の提唱する自然や道の想念に通じる。老子には許由の名は見られないが、その唱導する太初的な生活は、例えば「小國寡民」にある程度具體的に描かれてゐる。恐らく許由は「小國寡民」の住民で、老子の「道」の實踐者たるにふさわしい。莊子の中にはこの人物が登場する。

人工的作爲を極端に蔑視する老莊の立場から見れば、使ひふるした「なりひさご」一ツにせよ、礼教的人爲に汚された器であり、貰つて有難くは感じなかつたかも知れぬ。ともあれ、許由は、人の好意に恵まれた「なりひさご」を受けとつて、以後は禮制を破つて、それで水を飲んだのである。同じ水を飲むのでも、久我相国（一〇〇段）が内裏で水を飲むのに、主殿司の差上げた土器をしりぞけ「まがりまゐらせよ」といつて「まがりして」飲んだのとは、大分趣を異にしてゐる。土器よりは「まがり」の方が「な

「ひさご」には近いかも知れないが、兩者の生活的位相は比較を純している。そういう無條件な許由を見込んで、内裏にあった帝堯は、この人物なら天下を托するに足りると考えたのであろう。大体、帝堯の宮廷に寄食する官僚たちの志向する所は、今日の官僚たちと比較して大差はない。一身の榮達ののみを望んで名利に汲々としてゐる側近連中に取囲まれていたのでは、帝堯の眼に、許由の生活態度が清潔そのものに映するのには当然である。堯帝の爲政については、莊子には「堯堯之治天下也、使天下欣欣焉人樂其性、受不性也」(外篇在宥第十一)と見える。「天下欣欣焉」や「人樂其性」ということは、もつてすれば、彼が理想的天子であつたことけうなすける。しかし老荘の立場からすれば、それすら「是不性也」であると否定されねばならなかつた。許由が天下の事を断つたのも自らの「恬」を尊重したからであらう。天下などという、死介な代物を背負ひこんだつては、到底、恬へ境界に安住することはできない。さういふ許由の心境だから有難い論言を交故にするぐらい朝飯前である。彼が「なりひさご」で朝飯を食つたかどうかはわからぬが、生活必需のそれすら風に吹かれて鳴るのが耳障りだと捨てたのだ。勿体ない話だが、勿体なきには多分に我利私欲がこびりついてゐる。況んや天下の事には百億百官の汚濁や利後がこびりついてゐる。それを受けよとの申し出を失礼千万と憤慨し、聞くも汚らわしいと、潁川の清流に身を洗つたのは、随分、現実をなれぬいた話ではあるが、徹底して「その心情すがすがしい。小國寡民を理想とする人物に天下を押しつけるとは、人樂其性」さうたわれた帝堯にしては千慮の一失であろう。

耳を洗つた詩は「なりひてご」譯と同趣だが、むしろこの方が人口に膾炙する。對照は極大と極小だが、利欲の対象たる莫ては同一である。許由にとつては帝堯の綸言は正しく汗のごとき、鼻もちならぬ、いや耳もちならぬ汚穢であつたわけだ。潔癖性も、こゝで行くとスケールが大きい。人間の物欲因執を絶對否定する立場は、対象が極大であるだけに、ちよつとやそつとの行爲では討抗できないう、許由の「なりひてご」は、天下よりも大きな重量感をもつて読者の心に迫る。

許由のモラルセンスは愚昧な野蛮人のそれではない、語け極めてデリケートである。一般に老莊的モラルを宗とする人間は極めてセンシブルな人物が多い。彼らの書く文章に詩的要素が濃厚であり、儒家の礼樂を重視する立場の連中よりもはるかに芸術的なのは面白い現象だと思ふ。彼らが読者を魅惑するのは、逆説的モラルの面白さによることだから、それを表現する文章に韻律要素が多く盛りこまれてゐるからではあるまいか。筋道は通つても盛るべき文章に感じさせるものがなければ、人間は動かされぬものである。「文は……老子のことば、南華の篇」(第一三頁)といつたとき、兼好に儒家の經典を輕視する心はなかつたであろう、ただかれの藝術的素質がけしなくも老莊に手をのばさせたのだ。史記の老子伝に「名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ」とある。「耳」はせよ「聃」にせよ、音に鋭敏な藝術的素質の豊かさが感じられる、名は實の實として、

その筆にするとこも、詩的表現が幾く形骸したのである。許由の事蹟は伝説であるにかかわらず、道徳的でより、道徳的であるにとどまらず、詩的である。かれが箕山にかくれ、老聃が聞きこえ、屈臣轅に行儀の醜陋をかざねた伝説者のわらいは、興味深い。

ここにいう道徳は、太初原始の「道」を体現する徳さすし、儒家の規範ではない。兼好は盛親僧都の行状を非凡の筆で描いた結びに「徳のいたれりけるにや」と一言鋭く書きとめた。(第六の段)。注釋家の多くは、この徳に儒家の理念をみちびいて、紛然混乱する。僧都に儒の君子の性格は毫釐もない。儒の礼教の下らなさに及逆しているのであつて、むしろ老荘の道徳に近いのである。

盛親僧都はともかくとして、論言を反故にし耳を洗つた許由に、礼教は無用の長物であつた。天下を受けとることは、附屬する礼教をも併せ受けることである。とんをものを有難がるから天下が治まらぬのだとする批評の立場が、そこに認められる。一種のアナキズムである。許由傳説の発生は、古代中国にアナキズムを成立たせるほど礼教的文化が爛熟し、官民の間に繁文縟礼が淋漫し、すでに齋具を放つていた事實をうらみかきする。許由の無欲怡淡は、生活力の萎縮した衰弱症の無終ではなく、死生同生の筋金を背骨に通していたのである。

許由が手に結んだ水は、触覚に冷たいのみではない。自らの心を淨化する自証の清冷である。「なりむさご」といえども、すでに礼教の方向にある。そこに汲む水から筋金をみかくべき清冷の勁駿が得られるべくもない。「いかばかり心のうち達しかりけむ」と評したとき、兼好はあのれの内域で許由の感覺を追体験していったのだ。かれは久我相國が「まかり」で飲んだ水にも拍手を送っているが、宮廷人には到底知りえぬ、手で結んで飲む水の味をここにしかかき捨て、虚空のごとき精神世界の味覺に、誤者をみろびくのである。平凡な「涼しかりけむ」の一語も、文字に拘泥しては味わえぬ。また「なりむさご」を捨てねばならないのである。

蒙ボの「孫震蒙席」は「三輔法録」を引いている。

孫震、字元公、家貧織席爲業、明詩書、爲京兆功曹、冬月無被、有蒙一束、暮臥朝收、

「三輔法録」は漢の趙岐の撰といわれる。功曹は「事物紀原」に「秦漢有功曹史」といふ。孫震は漢の人である。許由よりはるかに時代は下り、註に伝説的要素は少く、実在の人物とみてよい。「明詩書」というからは學識の人では、たに遠いなく、しかも「京兆功曹」すなわち一書記にすぎなかつたとすれば、清流の魚、汚濁の官界を遊泳するすべには長しなかつたのである。「織席爲業」は苦学勉行の時代のこと。位はいやしくとも官に副業を許さぬとは、漢代にも人にちか日本とかわりはない。もともと、

女房名儀でキヤバレーを經營する輩は、もとよりないではなかつたろうが、そのうちこそ
すからい連中は、今の席。はかかわりない。ここでの席はむしろあつて、原料はわら。
「一束」は例の誇張だが、受するに、おのれのつくつたわらむしろにくるまうて寝たと
いうのでよろう・倉庫の状、空すべきである。ただ、いまの日本にもわらふとんは受用
される位で、よんかい温い。冬月嚴寒の氣はふせけるのだ。語は左かなが實際的である。
けれど、モラルの表意性において「なりひさし」が格段に面白い。二つが同じ重さ
で書かれたのは、水とわらとをつきあわせて興かつたのか。今日の東京はいかしくす
水やわらはいかなる會者にもこぼれまわれぬ天恵の資源、冷と暖とを対照布置して、簡淨の
行文に自得の心機を治字する禪的悟境は非凡である。ひとの溺れる水を手にひすび、あ
わてふためいてつかひわらをしてねむる。同じ水とわらも、窮通の二途を同時に作り
たたせるその玄妙處こそ「道德」といふのでよろう。

下さまの人の物語は、耳ふとろくことのみあり、よき人はよやくきことを語りず。
(第七三節)

こうはいつても、おのれのことばに縛られて、珍奇の語に徒然草の座を閉すような尻
の穴の小ていんでけ。兼好は、ないが、二つの説話は、文中通り童蒙の口おさんだ当座
普通の話柄で、たゞ万人の知る話を、ことさらにとりあげるのは、それを枕に、言ひ
たいことがよるからで、「これらの人は、語りも位ふへからず」がここでの的である。こ

わらの人、とは北村季吟が文段抄に「今の世の我が朝の人をいふにや」と解くのみかよるしく、すなわち兼好が徒然草を執筆した当時の日本人をさす。許由や孫晨とよき注家もなしていないがそれでは日本語はよめぬ。

さて、面白いのは、ひさごやあをを枕に吐いた寸鉄のことは、徒然草を成立させた時代をけしと射ていることである。

元弘の乱以前にすでに徒然草が書かれていた、とするのが、世のいわゆる通説であるが、管見を以てすれば、兼好が筆を下しはじめたのは建武初年である。すなわち、いとこゝろの「中興の世」とにしかくはれし王政は復古したが、乱後の処理に失敗多く、世情は輕佻浮華、人は名利を求めてあくせくし、末世の様相を示していた。事ほかの二條河原の落首に赤裸々な指拍がみられよう。落首は直ちに毘羅別扶するが、兼好の筆はひさごとわらに迂回婉曲する。迂回の婉曲は内心の情りの弱さを証するものでけなげ、まっすぐなれぬこそほつきり折れる。

余談ながら、徒然草二部作説なるものがあつて、前半第一部に「感傷的無常感」なるレツテルをばる。感傷的無常感などというようないよひよした心情から婉曲に迂回する体の批判は生れぬのである。またこの段を、隨筆儉約の美徳勸進とする説がある。草庵の陰適僧なる看板からは簡筆を引き算のように出てくる答文であるうが、かれは高等教養の達人だつた。その草庵には庭がまきりつまつていたのだ。

元弘乱後 建武年間にかけての風俗に一つの傾向が著しい。いわゆるアフレゼールの時代で、新旧価値が転換する。新興勢力の旗幟にけけはけしい原旨がめたくられる。元弘の乱後を風靡した「蓬萊窟」がそれだ、質素儉約などは何者の寢言かとはかり軽佻浮薄な華美に妨を敷いた。

眼に見 耳に聞く現実界の風潮はことごとく、兼好のデリカシーを傷つけたことであろう。恥も外聞も知らぬ連中がうちひめくとき、高度の文化性を身につけた保守的人間は、どのような姿勢をとればよいか。兼好の文章は婉曲性に富み、落首のような直接の痛烈をもちたない、これをいとは抵抗の虚しさを知った一種の諦観から生じたものとみられてよろいか。

兼好は、この段を質素儉約の美德を強調せんとする教訓的意図により、つみ 執筆しているのではない、もしそういふことであれば、蒙求和歌の繰返しにすぎぬ。徒然草が何らかの軌執性を念頭において、一定の方針で執筆されたとすれば、隨筆ではなく、説話集になつていたであらう。また質素儉約の如きし 中国人の獨占物ではなく、現に、鎌倉幕府は、これを尚い、高時をのぞけば 執権も自ら戦を示したことでより、松下禅尼や最明幸入道所頼の美談は、徒然草も書きとめていろほどである。

徒然草に教訓的要素がないといふのは、教訓だけでは人は六百身と七百年し一つの書を受読しつづけさせぬことをはうきりさせたものである。また 聖なる皮肉や諷刺が人のこころをさほどにうつしのでけない。冷徹な眼が凝視した人間と時代の現實を

情熱をもつて書いたかたは、人けその文に魁せられるのである。「これらの人け語りも伝ふべからず」は情熱から發したことは、許由、孫農を邊遠羅に對置して、かれを表わし、これを默殺したのが、この段におけるかれの冷徹の眼である。この情熱と冷眼とを、ひとけなふ、諦観といふてあるが、唐山を揚げて和朝を貶すこの段を國學者流は「つくりみやび」ときらうてあるが、かれらは國體を愛國心によつて、日本と日本の人物を性急に背誦しよとす。それを敢て咎めさせぬか、せまい愛國心が、この兼好のモラルにいかほどしつかり耐えうるか。

わが國の歴史上の人物で、もつと日本の英雄として、玄い階層の聲をばらすのは豊臣秀吉である。戦亂の世に生れ、波瀾万丈、その生涯は、講談、大衆小説の詩柄を存分提供した。人を面白からせるためばかりに生きたといふは酷評だ。長い戦亂の世にヒリオドを打つという歴史的使命を見事果たした。かれの進む道にはつねに千成飄箏が風を切つた。飄箏から駒かどび出し、金屋風がどび出し、麒麟の宴がどび出し、北野の大茶の湯が飛び出し、津津浦浦まで黄金色の豪華絢爛たる桃山時代がどび出した。それで足らぬと打ち振るうち、朝鮮征伐がどび出し、その失敗がどび出し、あのかの身が死んでいくばくもなく、子も妾も共に、金色の飄箏は、ふくれれば、つけた風船よりも青くしなびて泥土にうちすてられた。

秀吉は英雄である。歴史の舞台の花形である。許由や孫景は説話の中にしかすゝめぬ人物で、歴史の舞台はふみにくい。せいせいが脇役である。一個の瓢箪すら持て煩う人間には脚光の浴びせ甲斐がない。黄金色に輝く千成瓢箪だからこそ大向うをヤンヤとうならせるのであろう。けれどその花形がわら、たれは、金匱たる隠者許由のすてた唐山の天下であり、ねらいはすれて朝鮮さえも拾いえなかつたのだ。

竹林院入道左大臣殿、太政大臣に上り給はんに、何の深かおはせんかれともしつ珍らしげなし。一の上にて止みなん」とて出家し給ひにけり。洞院左大臣殿、此事を甘心し給ひて、「相國の望おはせざりけり。元龍の隆ありしとかや云ふ事侍るなり。月満ちては缺け、物盛んにしては衰ふ。萬の事前の詰まりたるは破れに近き道なり。
(等八三段)

かの土の許由を描いた同じ筆が、この國の竹林院を右のように書きとめた。兼好は秀吉に先立つ人である。猿面冠者の舞台なんぞは夢にも見よはすはない。けれど此太政大臣をすてる精神を描きえたかたに、それを後する人間の欲望の歸趨を見ぬべき文をいはずはない。かれは一箇の「なりひざこ」を示すことによつて「千成瓢箪」への批判を先取りしたので。

もっとも秀吉を知らぬ兼好も元の皇帝フビライの日本侵攻は聞いていたはずである。元寇はかれが生れる数年前のなまなまし、事案であつた。神道家の流れを汲むかれは、

「神風」をいかに解したか。かれの長兄慈遠の「神風和記」の著があるようににはあらわにこのことを云わないが、碁石の遊むに於いて「馬のゆきて三苗を征せしと歸るかへして徳を布くにほしかかりき」(ハカセ二段)ともしらしているのである。神風の功德を説くよりし、英雄の霸圖に苦々しさをかみしめらる人であつたに違いない。

澤国江山入戰國 生民何計築樓臺 憑君莫語封侯事 一將功成萬骨枯

功の成つて凱歌を奏した一將の背後に枯死した萬骨。咄々たる鬼哭がある。功成らぬ遠征が彼我の生民に何をもしたらしたか。戦争の罪惡は詩の諷詠にまつまでもない。

秀吉の遠征に元寇への報復が意圖されたかどうか知らぬが、大義名分の立たぬこと、フセライのそれと同断であつた、さきごろの軍國時代、秀吉は最大の英雄、朝鮮役は海外に國威を宣揚した美事とたたえた。実は、無謀な作戦を強行し、朝鮮半島を荒しまわつたにすぎぬ。いかほどの人命と物量とが消耗されたことであろう。

一人の横勢欲から万骨を枯らすのが東西古今の英雄なら、英雄ほど愚考を人間はなしい。しかも、英雄の愚行はつねに時流にこびる者者が周到に準備する大義名分によつて修飾される。現役の大將たる人ことを發心した男たちによつてエネルギッシュに拡大されたさきごろの戦争すら、山ほど大義名分がつくられ、それかほりきり敗殘した人たちになほ、修飾しようとする者がたえぬ。國際紛争はあるいはまぬかれ難い現象かもしれないが、その利害に個人の欲望が侵食しうる可能性が恐ろしいのである。

さすかに朝鮮の役を義戦とせぬ人も、加藤清正が窮地に捕縛された二五子を許した仁
慈、蔚山龍城に壁中の藁を食って観文をしのいだ堅忍持久の精神をたたえて長舌舌を弄
した。同じワラでも猿農のそれと比較してみるかといふ。一英雄の欲望の膨脹する過程で
虚飾される美談の何と陰惨であることか。

朝鮮征伐に失敗した秀吉は大塚に城を築く。権力を誇示するつもりだったのかし知れ
ぬが、恐怖心のあらわれとしかみえぬ。死への門出に遺孤を托する姿勢には命乞いする
ものゝ卑屈かあったと伝えられる。後代に文士は英雄の心事を桐一葉に象徴する。猿芝
居に拍手を送りつづけた観客は、このときほろりと感傷したろうが、文士はたぶん、そ
れをソロバンに入れることは忘れたかつたはずである。當の花形は、感傷ヤソロバンど
ころではなかつたであろう。辞世にいう。

つゆとおき つゆときへにしわかみかな 左にわの事し ゆめの又ゆめ

許由の捨てた一つのなりみさごすら逐一得め極微の露に、黄金色の千成瓢箪のほかに
ささ ようやく思ひ知つたのが、この歌に見える眞実である。

Comedus est fabula, ut vulgo et planitie

血ぬられた道化芝居の幕切れに今を百万雷の拍手がとどろいて、殺々の鬼氣が、アン
コールと叫んでいる。さらば残酷物語をもう一曲

耳塚 京都東山方廣寺の洪鐘は「國家安泰 君臣豐樂」の銘語があるため、秀吉死去のすぐ後に 豊臣氏滅亡を弔う哀論をひびかせた。

大仏殿には首だけの大仏がグロテスクで有難い佳句をさそう気配になり、これでも洪鐘と共に觀光客の眼を奪い取らせているようだ。境内へ近く、西方に「耳塚」があるが、鐘や大仏を見よう人にはけとんど気づかれぬ。

この耳塚については「豊臣秀吉公譜」に「文祿中頃年伐朝鮮、在陣諸將兼進其斬獲之數、或人以其首級之重 故剗之、斷之而遠京師 秀吉大喜賞之、埋之于洛畔大仏殿辺、号耳塚」と見える。

昔は敵と闘って首級をあげ、主君の御前にしたらすが、武士の功名手柄であった。秀吉の軍隊は朝鮮で暴れまわり、功名を競い、本國に存する總大将たる秀吉の実見に供するため、首を切りとって首の代用とし、樽か何かに遠づけにして送つたのである。剗断は中國では罪人の刑罰であった。敵を罪人扱いしたわけだ。送られた首や鼻を見て「大喜賞之」した秀吉には 戦国武将の躍如としていて、戦懼を禁めない。

秀吉が朝鮮征伐でえた戦利品は、恐らく樽詰の首級であつたらう。功成らして万骨枯れた耳話を許由のそれにくらべると月とすつぽんである。「いかばかりか中流にかりけんと兼好は許由を評した。涼しさと戦懼とはその本質が似て非である。

耳塚に戦争の残虐を感じて哀悼する者は、豊臣氏を呪咀しその滅亡を嘲笑したくなる

てあろう。冨塚にほゝむられた無事の生民もきくことなき耳で國家安康の声をさくみだ。

方広寺東南の阿弥陀峯に秀吉の墓がある。「秀吉公請」にいう。

慶長三年四月十八日、前関白太政大臣従一位豊臣秀吉、薨於伏見城、年六十三、葬於洛東南辺阿弥陀峰、築墓其顛、構祠其麓、以卜評茶爲神主、四年四月十八日、勅賜秀吉社諡豊國大明神、額後陽成院宸翰。

文にいう卜評茶が誰であり、兼好の縁者が否か、明らかでないが、墓を阿弥陀峯に築かせたのは、恐らく秀吉の遺命に出たのであろう。世傳の娘も死後は仏の攝取された人だめか。いさ頂上に五輪の巨石が、かれの性格をむき出して建っている。

徳川氏の世になつて、豊臣氏につながらぬものはきびしく迫害されたらしいが、この石塔も徳川の代に姿を消し、明治に再興されたとのことである。

家康の家臣、石川丈山は、大坂城を攻奪した武将であつたが、血氣も勇がたつたつて罷免せられ、のち修学院に籠居して隱者の生活を送つたといわれる。兼好も出家して一時ここに隠棲した。その因縁も面白いが、丈山の著「養鶴集」に次の詩をみるのけさらには興味が深い。

題豊國神廟壁

零落東山古庭廊

茶苔蔓草上繪塙

英靈飛散無巫祝

秋月春風作主徒

「茶苔蔓草上繪塙」といふは、「秋月春風作主徒」と結ぶあたり、さうに徒然草の身
三十段を連想させ、風興またいとしめてある。

からはけいとき山の中にをさめて、さるべき日はかりまうてつづ現れは、ほどなく
卒都婆し苔むし、木の葉ふりいづみて、夕の嵐、夜のみみぞ、こととよすがを
りける。

身吉の五輪の石塔は堂々たる巨石であり、徒然草の卒都婆に比すべくもなかつたろう
が、死ねば英雄も田舎人もない、無常の前には一切が平等である。いかに巨石を積み
生前の学業を誇示したとて、虚しさにかわりがあらう筈はない。

いま身吉の堂は、教誨をかかげた豊国神社の空神として鎮座する。しかし、方庵寺の
鐘は朝夕、没落の哀韻をいひかき、耳塚では朝舞役の無事、生民の声をきかぬが悲傷を
かこつてゐる。これら有声無声の声を日夜に聞かされては神霊も安らおえない。

この一代の英雄についての、学校教育でのとり上げ方には一考を要する。かれが戦略
、政治両面にわたつての傑物であり、桃山文化を成立させた背後にかれの人間性が存し

たことは覆いべくもない。だがかれの業に成功のみをたてたのは僻見である。大衆の好尚にかなりとして、教育の資料として慎重を要する。

朝鮮役の失敗を「國威を海外に宣揚した」といふより戦前の歴史教育の歪曲けましかくりかえされていきいが、朝鮮役を、征服欲のあらわれと規定することを避け、その失敗を、簡單に「兵を撤回した」とやりすごすのでは、大きな犠牲と教訓とが慥にまいる印象しかのこすまい。太平洋戦争は朝鮮役の轍をふんたものといつてよい。勝てば宣軍で、勝利の暁には名分はいか、よにも立つと多寡をくくるわが民族の單純性が両者に共通する。

人間というものは、一片の主義や主張で割り切れるものではない。徒然草は、人間の複雑さに対応している。徒然草の前後に矛盾を描いて得々としてきたり、組織的思考の薄弱を論じたりするものは、人間の複雑をまますところなく凝視することのできない人である。かれの複眼的観察と思考とは、乱世に生きた文学者が、心肝をけずりてみかいたればこそ生れたのであつた。そして、それをわがこころ、宇宙時代とよばれる今日にその時代をてらすかがみたりするものであらう。

第十八段が、單なる教訓や啓蒙でないことはすてはいた。そこに予言者先覺者の風貌を仰いでほかの陸者精神が、わづらわいとすることであらう。ただ「物狂ほしい心情

から生れた徒然草に「これらの人は語りも伝へずからず」と言い切ったことは、その重たさは、か水の謙抑のことばをそのまゝに「筆のすさむし」としたのでは、その真意真情を汲みとりがたいと、くどくどほあろうが、あべたのである。

原爆をこゝむり無條件降伏した日本人が、また候、秀吉の千成瓢箪をかつきたかつて、いふようにみえる、いや日本だけではない。地球の上の西も東も、どつやら千成瓢箪だ、くけ。こゝなると許由の一瓢、地球よりも重く、その重さを説いた兼好の帝智はアトラスの力量をけるかに起えることにはならないか。

小林太市郎博士書簡

系田憲雄編

来る五月六日は、博士の一月忌である。遺稿は門下の方々によってまとめられるであろうが、その資料の一つとして、博士がわたくしと弟高雄に与えられた書簡を、ご遺族の許しを得て、ここに編んでおこうと思ふ。

簡中にちりばめられた中夏（ちゅうか）の詩文に關する評語は、その一つ一つが『王維の生涯と藝術』や『禪月大師の生涯と藝術』のような獨創的な大著を生み出すべき、首重な種子であつた。天か博士に生命をかすことを吝んで、ついにそのことを無からしめたのは、かえすがえすも口惜しく悲しいことである。

文中しはしはわたくしどもの作業に對する選褒の語がみえて面はゆいけれども、実は博士はそのことによつて、わたくしどもの至らぬところを示し、進んで未知の宏大を世衆へみちびかれたのである。讀む人はただちに事情を看取せられるに違ひない。わたくしどもは、心安んじてこれを公のものとするのができる。

書簡の例により原文には句讀を切つてないが、いま私意によつてこれを施した。新舊假名づかいの混つたところか間々あるので、これを博士の主とせられた新假名づかいに改めた。その他はつとめて原形を保つた。宛名の在いは憲雄（けんすけ）とてハガキである。

（一九六四年三月二十日）

昭和二十九年二月十二日

拜啓 方向、三号面白く拜見致しました。殊に裾襦すそじゆは中唐の世が貴兄の體驗で生かされて躍如たる感があり、また譯詩にも敬伏致しました。特に王維や高適が美しく出来たと思えます。兼好論も我意を得た処が多く察しく讀みました。次号が待たれます。草々

二

昭和二十九年九月廿六日

拜啓 「方向」を頂戴致しまして早速拜讀。譯詩では貴公子夜聞曲、洞房思不禁、辛夷塢うらなど殊に絶妙に覚え、李長吉の幽深な御解釋にも歎伏致しました。酒不到劉伶墳上土は、そこに到らないものを言うことによつて、そこに到るものを示したのではないでしょうが、すなわち、現實の酒は死者に飲めないけれども、詩句の酒はよく墓墳の人を享樂せしめる。現實の繁華に沈溺する貴公子は李賀の詩句を味い得ないけれども、鬼はそれを十分に楽しみ得る。俗人は現實の酒に酔うがよい。われ李賀はそれよりも一そう芳醇な酒を、現ならぬ遊宴を創造して、死者とともに樂しむ、という意味がないでしょうが。白玉冷が冷でなくて柔暖を 麗構れいこう礎いしが礎ならぬ礎を去うように、唐人の詩句の多くが指月で、時として字句の表面とは全く別のものを指すことを想えば、そういう風に解釋して好いのではないのでしょうか。「魚氏易林」に、延頸望酒、不入我口。深以自喜。という如く、人を樂しませる酒は欲望の酒で、飲む酒でないとするれば、酒の享樂は酒池肉林の中にはなく、却つて劉伶が墳墓の中に在りと言ひ得るかも知れませぬ。孰れにしても李賀の歌つたのが欲望の酒であり、ひいてそれが墳墓上に到ることを李賀が確信し

たこと、俗人がそういう眞實の酒を知らないことを彼が惱んだことは確かでしょう。中新人の御説もなかな面白く拜讀致しました。先はとりあえず御禮のみ。草々。九月廿六日。小林太市郎 原田憲雄様

三

昭和三十年八月十五日

拜啓 先日は方向五字を頂きました有難う。今度は内容が殊に豊富で、讀後の感想を詳しく書いて差上げたいと思いましたが、少し急ぐ書き物がありました為、御禮を申述へるのが遅れて失禮致しました。李長吉論は愈佳境に入り、彼の藝術の中核をつき始めましたが、則私去天の御説には深く共鳴致します。色々に最も直接具体的のものはわれわれの體験の域にはないから、藝術の基礎は固より私でなければならぬと思えます。美人梳頭歌の御譯には全く感歎致しました。御蔭で此詩がよく判りましたか、殊に持上る転體について、それに引かれて西施の身体が起き伸びるような奇妙な感覺がよく感じられました。その爲か、何かひいやりした井戸水のような冷感が全篇にこめらるうで、無聲不語などの語が静けさという以上の金屬のように冷たい沈黙を表しているように感じられます。背人不語向何處は明らかにその沈黙の後姿を黙って眺める人の感覺で、向何處というのも遠く冷たい言葉のように感じられます。普通ならは人に命じて折らせる花を、わざわざ階を下りて自ら折るその異常な動作を、冷やかに眺める人の針のように細い神経、女しの物音にも感えられない神経が、無聲と不語とに浸っているのかも知れません。また巻末引は、音と寫象との關聯的生起を示す作として殊に興味深く、普通の

音楽が身体の行爲的反應を惹起するに反して、藝術音が寫象となつて展開する相違をよ
 く示していると思ひます。最も普通の場合は寫象が無意識のうちに展開するので氣付か
 れないけれど、意識の日常的統一を破れば、寫象は自らその中に氾濫するでしよう。
 要するに長吉の理は人理ではなく鬼理かもしれませぬ。潘岳傳は尚に一部の史書で、杜
 預や張華が、ただ著者としてでなく、實際に活動する人間として出て來るのか面白く讀
 まれよした。武帝や晉亮も中々よく描出されて潘岳を引立てています。御譯詩では末生
 縁と生へる靈の₂とに殊に心をひかれました。次回あたりはどうしても王次回の御研究が
 期待されます。李長吉は少し鬼をてううふうな処がありますか、考必は全く此の世から
 冥界に住んだ人でしよう。兼好論も例によつて中々面白く拜讀致しました。次號を待望
 しながら幾重にも御禮申上げます。御閒暇の節には御立寄り下さいませ。草々。八月十
 六日、小林太市郎 原田憲雄様

四

昭和三十年十月十四日

拜啓 願狂の御高論を有難う。早速貪るよ様に拜讀して、直なるものが左せ狂になるか
 面白い問題だと思ひました。女子大で御講義の御様子。新聞社は御止めになつたのでし
 ようか。もうその方が好いと存じます。毛晋が元章の遺事を晒めた本へ題は米元章との
 ミチリますしをちけてみたら、左の記事がありました。

米芾好古博雅世以其不羈士夫其目之曰米顛茶詹公深喜之嘗爲書畫學博士後遷禮部員
 外郎數遭白簡逐去一日以書抵公訴其流落且言舉室而指行至陳雷獨得一舟如許大遂盡

一 般於行間魯公爲馬茶條得是卷而讀之

毛晉分之を向處から採つたか今檢へる暇がありませんが、不取敢御禮儀々御知らせ迄、
草々、十月十四日夜、小林太市郎、原田憲雄様

五

拜復 御手紙有難う。毛晉の記事に茶條とあるので、鐵圍山叢談を閲たら果してありました。茶條得是卷而讀之は晉の語でした。古とりあえず、草々。

六

昭和三十一年七月七日

拜啓 幽歎集を有難う。啾啾たる鬼哭の聲が全篇にみちて、どの頁をあけても、微かにその聲が聞える想が致します。鬼雨瀟空草のその雨ならぬ雨の泣聲が切々と身にしみつくようです。どこをよけてもあの世の冷やりした匂が人を襲い手にしみて離れない詩集——永年の夢想の詩集を今手にする想です。紙も字も不思議に茶條のもののような石か瓦生に生きています。また題字が何と云えすばらしい。幽の中央の「」左の「」に之い知れぬ鬼氣があります。詰、兩眼のようて光って面白い。「方向」をいつし拜見し、御譯詩に強い鬼氣の憑ひのを不思議に思いました。はじめにそれが判りました。これは尊兄の詩集というよりもむしろ故御令閨の詩集でしょう。月午、銅雀妓、蘇小小墓、迷える靈などの鬼歌と、悼亡詩、わかよし、たの歌、東生縁など實感の詩との、殊にすくれているのも偶然ではありません。そのほかにも、王昌齡の「おとろなる樹がけにこしる昭陽の宮、杜甫の「草ならぬが」と、つふやけら、など御名譯に感激致しま

した。これは私の枕頭の書になりましよう。幾重にも深く感謝致します。御間暇にゆつくり御越し下さいますよう御待申上げます。

故御令間の御冥福を祈りつつ。七月七日夜。小林太市郎

原田憲雄様

七

昭和三十一年七月三十日

拜啓 今朝わざわざ御越し下さいまして、桃栗集を頂戴致し、また鞍馬集を頂きまして洵に恐縮に存じます。桃栗集、一気に讀了、まことにこの十四五年の悲惨な時代の詩史と稱すべく、故御令間は寛に蘭秀の杜南といつても過言ではありませぬ。それはこの艱難な時代を健氣に生き抜いた可憐な魂の記録として、同じ世に生きた人間に強く訴えるのみでなく、その深い人間苦の叫びには、凡そいつの世の人も動かす、美しい真率の響があります。これは私を最も深く感動させた詩集になりました。鞍馬集注も多年探し求めていたもので、まことに有難うございました。とりあえず幾重にも御禮申上げます。御暇の節にまた御越し下さいませ。

なお、李賀について御承知と存じますが、適之の「金壺記」巻下に「李賀、字長吉、其手筆精捷」という語があります。また先日「楚辭集注」に収めた李賀の評は、瀟灑について「感慨沈痛、詩之有不款款泣者、其爲人臣可知矣」天問について「天問語、甚奇峭、于楚辭中可推第一、即開闢來亦可推第一、篇極意好之、時居南園詩、數過、忽得文章、何處吳秋風之句」その他になつています。右、氣付きましたまま、草々、七月廿日、小林生、原田學兄

昭和三十一年十月十一日

拜啓 昨日は御枉駕いたたき、方向六号及び巖雨亭を有難うございました。方向の李賀論 愈佳境に入り、殊に37頁の歴史と藝術との対比のあたり、人間存在の秘奥への幽深の展望が開かれて、面白く拜讀致しました。還自會稽歌は後に首好の過金陵詩、臺城柳に餘韻を遺しているようですか、やはりちかいますね。昌谷詩についてのユリシースとの御比較も、ちようと芭蕉や蕪村の連句と、シヨイス、プルストゥとの類似を考え、たときで、全く共鳴致しました。溯つて考之ると、御譯しなされた日出東南隅左どの漢代の歌謠にもキウという聯句的なものがあり、あるいはしとけ問答的に歌った手まり歌などの面影をの、しているかも知れません。漢詩もみなそれと面白いうち、やはり李賀が殊に魅惑的で、か黒なる雲、城壓えしを請んて、ふと蕪村の句「鮓鮓や秀柁が城に雲かからし」が何人やり解りはしめたように思ひます。また「惱まじき」の金銀寶玉の世界にも、異常に美しい感覺がよく出ていて、人を深く打ちます。色々の示唆を與えられつつ、行人とついで嬉しく拜讀致しました。一わづれ草²では花園天皇が自然と全篇を壓して来ました。ついに来るシツが来たとう感じてすね。とりあえず幾重にも御礼申上げます。草々。十一月、小林太市郎 原田憲雄様

九

昭和三十一年十二月廿日

拜復 御手紙たのしく拜讀致しました。蕪村は深く玩味すると意外な趣味と新味とのあるのに驚きます。前に「研究」9号に二三の句圍についての研究、「美学」25号に春風

馬場曲の解釋をのせまして、その二つが最も面白いのですが、後者は抜刷が出ず、
 もなくなり、前者はつかうかと抜刷をひな人にあけてしまつて、今お目にかける
 のか残念です。そのうちどこかて探して出して拜呈致しませう、お正月にお暇
 御並びにおいで下さいませ。お待ち申して居ります。草々。十二月廿日、小林太市郎
 原田學兄

一〇

昭和三十三年六月十七日

拜啓 詩葉夜の歌を頂きまして早速拜見、殊に最近の御作に溢れる切々綿々の哀響に深
 く感動致しました。墓 墓石、夕ぐれ うたごえ、頼れし絶唱ですが、ペンペン草の茂
 る庭にいつし言葉なく遠ざかつてゆくその人の後姿を彷彿と見る想が致します。墓石の
 限りない思情は、天地が盡きても盡きることなく、うたごえの中には、いつか壮麗に展
 開されてダンテとヘアトリチエの物語になるようなものが含まれていろのを感じます。
 前の御作では、夜の歌が殊に哀切で、思わすフィンケートエロースの物語を想起致しまし
 た。中国文学の本質的な情感がほんとうに痛切な体験のうち、新しく生動していろのは、
 全く愛異の厚がありません。これに私の愛讀書の一つに必ずなりました。前に頂戴し
 た故令聞の歌集と併せ讀んで殊に哀愁の痛切なを覚えます。幾重にも御礼申上げます。
 草々。六月十七日、小林太市郎 原田憲雄様
 連伸 いま風邪で寝て居りますが、二三日のうちには拙稿掲載の雑誌一部御送り申上げ
 ます。御笑覽下さいませ。草々。

昭和三十三年六月廿八日

拜復 拙論を色々とおほめ下さりまして恐入ります。あの中では肝心の藝術の感受を殆ど説いていず、大和繪史論も、繪畫史論致にしやはりその感があります。自分のや、ていることしまだまた抽象的で、しつと、と体験に即かねばならぬと思ひます。中國人のいう「情」というものか、一種不思議な生物のようなもので、そこにこそ藝術の最も深い源泉があるようにすが、これほど、西洋人や日本人には稀薄なような気が致します。「夜歌」にはそれがあるので、それが俳詩の本質的に中國的な感じを作っていると思われます。蕪村もそれが溢れて、彼の本質を中國的にしているのので、「假名書」の詩人」というのし、そういう本質的な意味にとるべきだと思ひます。御暇に御趣し下さいます。先は御返事のみ。草々。六月廿八日。小林太市郎 原田憲雄様

昭和三十三年九月九日

拜啓 長中郎の玉篇續稿まことに有難うございました。藤もなかなか気分が出ていて、また見るからに楽しく存じました。折から急ぎの原稿に追われていまして、御禮を申しますのが非常に遅れ、洵に失礼致しました。御研究によつて始めて、中郎の性格の形成から、ひいて彼の生活態度、ひいてその藝術の展開が、よく具體的現實的に把握され、中郎その人に即して、その藝術を深く味得することができまして、實に樂しうございました。家庭の雰囲気かその人の本質にどういふニアンスを與え、その色合が、その人の生活、思想、藝術に、どういふ風に薰染してはくかは、凡そあらゆる作家について必

はずべきこととてあり乍ら、殆ど閉却されていまずのを、前に李長吉について、今また袁
 中郎について、見事にお進めになつてゆく御成果に、深く敬伏致します。殊に叔父の少
 溪に對する崇拜と、羨望と、憧憬と、非常な迷惑の實感とが、微妙に交錯した感情は
 御説の通りなかなかに面白いですので、この叔父の感化が意外に強く歪んで、中郎に出で
 るかも知れんと思われます。五木は、今讀んでいます李文公集に五木經があり、その遣
 方が詳しく載っているので面白く思ひました。それにこの夏は、前に載いた「方向」や
 幽歎集を手引にして李賀を讀み、あの難解な昌谷詩に始めて親しみ得て、日人どうに樂
 しみました。李義山の騎驢錦囊説の御解釋など、誠に拍案擊節の妙があり、猶御綺篇を
 待望致して居ります。昌谷詩の御兩譯を比較して大へん興味深く覺えました。やはりあ
 の時代の中心になるのは韓退之であることを今更に痛感し、それから皮日休、曾休とつ
 づく傳統が浮び上つて、中晚唐に對する興味を愈深く致して居ります。いつか御話し致
 しました春風馬埒曲の抜刷がようやく出来ましたので、同封拜呈致します。御笑覽下
 います。まづは送引ながら繰返し御礼申上げます。御暇に御枉駕御待ち申上げて居りま
 す。草々。九月九日、小林太市郎、原田憲雄様

一三

昭和三十三年九月十二日

拜復 御懇書多謝。天台止観との御比較、石や蘇の字の點綴の面白さ、荊棘―香芹の變
 化の秘蹟、聯句への展望など、まづまづたかな御示唆に深く感動致しました。冒説を
 採入れて書改めるのを娛へんに致して居ります。「惱公」の首解は最も面白そうです。

次へはせむ御願いします。以別復中新元への抜刷及び貴元へ講演筆記一部拜呈致します。
御殿に^御覽下さいませ。先は不取敢御返事のみ。草々。九月十二日。

一四

昭和三十二年十月廿八日

拜後、貴歌集墳墓を頂きまして、早速拜讀、全篇を通じて影の如く幻の如く、故郷令聞の魂の彷彿とただよふのを覚えまして、そして巻後に剖つて「inspiration」が忽然と其の姿を現すのも、海に心憎い御編集と覚えまして、巻頭の御肖像はさすがに不思議なもので、貴元の魂がよく映って居ります。やはり墳墓から最も深い感銘を受けましたか、その墳墓はただ御先祖のもののみでないような縁感が己にあるようです。少くとも小序に貴元の感懐であり、また奥様の深い喜びであるにちがいありません。戦争と御令聞の逝去とを二つの契機として、貴元の詩境が、詩情から詩史へ、詩史から詩観へと、次第に深められていったあとを、實に床しく偲びました。以寸楮幾重にも御礼申上げます。草々。十月廿八日。小林太市郎。原田富雄様。

一五

昭和三十二年十二月廿三日

拜復、御郵重を御手紙をいただきまして恐入ります。いつも乍ら私の想い及ばず書き足りなかつた処をよく御示し下さいまして、ほんとうに楽しんでございしました。中國精神の自覚が韓愈に始まり晚唐に發展したと想われますので、どうして中晚唐に心をひかれます。李杜にはこの自覚がまだ無いように思われます。先は寸楮御返事のみ。草々。廿一日。

昭和三十三年一月五日

拜啓 大分寒くなりましたか。御元氣の御事と存じ上げます。別便にて拙稿掲載の「華道」一部拜呈致します。御笑覧下さいませ。さて少し厚願な御願ですが、六甲の経済学部を出まゝで、小生の講義を聞いていました横山君と乾君とに貴著「幽散集」や詩集歌集を見せましたら、大そう欲しがり、殊に横山君は自今で「ちよ」とした詩人で小さい詩集を出していただけますので、それを拜呈したいと申して居ります。恐れ入りますが、若し残部がございまして、横山君に幽散集と詩集とで、乾君には何か一つ（歌集でも）御送り下さいましたら、大へん喜ぶことと存じます。両君住所は次の通りでございます。

廣島市古田町古江三三七 ブリジストンタイヤ薬島アパート 横山 昭
 神戸市兵庫區山田町小部子安場一、一五 乾 幸之助
 あつかましい御願ですが、若く御手許に残部がございまして、よろしく御願致します。御暇に御遊びに御越し下さいませ。草々。一月五日夜。小林太市郎 原田憲雄様

一七 昭和三十三年三月三日

拜復 御手紙を頂きありがとうございます。あれは短かく書かねばならないので、意を盡さない所が多く、難解になつて困ります。王次回の鬼詩は貴譯によつてはじめて核心をつかみえたのですが、全体鬼（魂魄相具して中有に迷うもの）の詞で、初句はその名乗り人の世恋しさに川辺まで迷うてくると向う岸に懐しい人の呼ぶらしい聲がする。早くその人を迎へとつて寂しさをわかとうという、何れも云えない鬼のさびしさか、はい

めて判りました。代亡妻作といつたものでしょうか。
そのうち暖い日に御趣し下さいませ。家内は寐たり怠きたりですが、付添が居りますので、私の手はかかりませぬ。先は御返事のみ。草々。三月三日。小林太市郎 原田憲

雄様

一八

昭和三十三年四月廿六日

拜復 整の音、朝日で拜讀。常連の詩に劣らぬ美しい御文章。やはり御説明があつてほんとうによくわかりました。俾なくてただ祈りのみというのは全く妙です。それに餘の一字がピタリ整の音をおさえていることに驚歎致しました。あらゆる音を消して消してついにただ一すしの整の音にしほりつくした凝縮の作用、萬籟をただ一筋に代表する整の音が餘の一字に心にくくひいています。幽微集 平松集の各詩について、みな説明が欲しいと思ひました。それこそほんとうの新唐詩選になりませう。苦惱は祈りに直結しますが、藝術はどうしても傍道へされたものにちがひありません。その本質は *peace* と云つてよいと思ひます。先は御返事のみ。草々。四月廿六日。小林太市郎

原田憲雄様

一九

昭和三十三年五月十三日

拜啓 大乗をいただきまして有難う存じます。貴兄の事かと思つて讀んでいろいろうちに、つしか淵明になつてゐる処、實に妙で、詩を讀むということは詩人が自分になる事だと痛感致しました。請者が詩を逐うのでなく、詩が請者を逐う境地に達せられたと言えま

しよう。「恨」というのげやばり何かのすれて、この微小の、しりし無限のすれて、藝
術の源泉があると思われれます。桃花源記に淵明の解脫の述べられたことを、むかし狩野
先生から教わりましたが、彼の叙景はすべて心の過歴を象徴したものにちがいありません。
寸楠袋重に、御礼申上げます。草々、五月十三日、小林水市郎 原田学兄

二〇

昭和三十三年五月廿三日

拜復 御手紙並に御弟さまの歌集癡痕を頂きまして恐入ります。つねに死と生との間に
御仕事なさる方の特異な感覚が歌のリズムにまで出ていて深く感動致しました。「白き
運搬車が 軋みつゝ入りゆきて 靈安堂の小てき燈ともしる」けちよつと王次回のですね。
その燈にはたしかに魄が宿ったのです。「對象はなきにはにかみてすきたりきー」そ
こには見えない人の魂魄がいたにちがいありません。しかし科学をなさった弟御は魂魄
をどう言いなさるでしょうか。別便にてルオー終篇掲載誌拜呈致します。同誌にはコン
ト(?)「バエストウム」及び諸書案内を書いていますから御暇に御笑覧下さいませ。
草々。五月廿三日。小林水市郎 原田憲雄様

二一

同日

拜啓 御尊兄から御歌集癡痕を頂きまして幾度も拜讀、死と生との交替をつねに身近に
眺めていられる方の殊常な感覚が溢れていて深く感動致しました。生という奇妙なもの
の性が、死の近くで不思議にはつきり見える思いが致しました。もっとも素人のうちで
はさまざまに展開する生死についての空想が、科学的環境では強く抑えられるがために、

却って一種不思議な、不自然な、奇異な内攻をみせていて、それがまた美しい。やを出して、いるとも思いました。頁の組方、注の置方もなかなか面白く、のしく拜讀致して居ります。寸楮袋重にも御礼申上げます。草々。五月廿三日。小林太市郎 原田高植様

追伸 別便にて上代の呪術に関する拙論一篇拜呈致します。御笑覽下さいませ。草々。

二三

昭和三十三年七月廿一日

拜啓 中國詩の御高説、いつも乍ら面白く拜見。露滴の天はやがて白んで、紫だちたる雲がたなびき、その紫雲から、微妙な来迎の樂の音がきこえてきそうな夜ですわ。それはまだ聞えていないけれど、音をき樂が却って耳を聳するばかり高らかに全篇に響いているようです。李賀がもし四五十年長生したら、中國に居んとうの宗教詩人が生まれていたことでしょう。彼の本體は案外ヴェルレーヌか、知れませんが、黄耆の貴譚をよむと野人禪月大師が眼前に浮んでくるようです。一茶にたしか、頼のない子花わねと来てあそべ、という句がありました。同じ寂しさを大師も感したのでしよう。この大師には全く中國に珍らしい童心があります。貴譚は原詩に隠されたそれをよく出していると思えます。別便拜呈の拙稿御暇に御笑覽下さいませ。暑さの初御身体御大切に。李賀もきつと蒸暑いお寺の下宿の夜を想ってあの詩を作ったのでしよう。草々。七月廿一日。小林太市郎 原田雅兄

二三

昭和三十三年九月廿九日

拜啓 先日「方向」及び「大衆」を戴きまして有難う存じます。生憎手の放せぬ原稿

を抱えていましてすく拜讀できず。本日漸く小閑を得て熟讀、久し振に精神高揚して最も深い法悦を得ました。顧況は小生もつねづね心掛けていました。御研究によつて始めて考察の確實な基礎を得ましたことを深く喜んで居ります。聽角思歸の御解釋には全く拍案擊節の高興を覺えました。詩は音楽であることを明示されました鮮かさに唯々驚歎致しました。大輿禪師の唐詩解頤に

故園黃葉滿青苔即故園 城頭曉角哀即角

と云い、更に「思歸二字見于題而藏于詩有旨哉」と説き、そして唐詩集註に謝朓の「故心人不見」を引いているのは、深く賞意に稱うものと思われれます。「憶故園」の故園此去千餘里春夢猶能夜夜歸二句もまた賞論の確かさを明證致して居ります。猶封氏聞見錄卷五に

大壘中吳士姓顧以畫山水歷抵諸侯之門每畫先帖絹數十幅于地乃研墨汁及調諸采色各貯一器使數十人吹角十餘而取墨汁澁寫于絹上……然後以筆墨隨勢決為峯壑島嶼之狀夫畫者澹雅之爭今顧子瞶目該噪有口載之象其畫之妙者乎

という吳士姓顧はどうも顧況らしく思われれます。この文は辨説卷六に引いていますが少し異同があります。また歷代名畫記王默の條には潑墨の狂畫を得意とした王默（即ち王墨）に顧著作が新亭に於て畫を學んだことを記しますが、これから思うとやはり狂畫の吳士顧が顧況なることが殆ど疑を容れず、彼の天邪鬼的性癖が愈々現れて面白いことです。尤も張彦遠は筆意を尚んで潑墨を貶す立場ですから、それで況の「畫評」を殊に

善く言わないのでしよう、高水君の華陽^ニ華山説は唐詩集注の管里、溯つては唐詩品彙に「^ニそう云つて、ますから、彼一人のみの誤とし言えませぬ。潘岳論は全く御確論です。が、誰か生きている妻を道具としてでなく人格的に讃歎した詩人はないものでしようか。ピカト讀後の御感想には全く打たれました。尤し芭蕉^ニやはリ旅は嫌だつたのでしようか。彼は「存在」に堪えきれないので旅に逃げたのでしよう。しかし安史亂最中^ニ中國の旅よりも、徳川太平の世の日本の旅の方が遙に楽しかつたこと間違ひありません。それにしては程なき結婚の事とにつづいて大へんな堤下^ニのよろめきかててきて、どうしよう^ニつりが妙になりきた、これは私の罪です。幽^ニ即^ニは實に好い詩ですわ。その他首譯はすべて敬伏の行かありません。李夫人など全く神技です。二子乗舟^ニも。袁中郎は李卓吾や陽明かててきて愈々佳境に入りました。御説によつて李卓吾がはつきりし、陽明もまた女今具體的に小生の頭の中に降下したのを覚えます。御繕稿を深く楽しみに期待して居ります。「大乗」の方は孫星洲夫妻の羨し、仲、床しい限りですが、詩は妻君の方が遙かに上ですわ。星衛も詩では敵わぬと思つて考證学をやつたのでしようか。こんどは顔況の影響かして天邪鬼的なことばかり言ひまゐりますみませぬ。重ね／＼幾重にも御礼申上げ、またその邊れをしたことを御容し下さいませよう御願ひ申上げます。草々。

九月廿九日。小林太市郎 原田憲雄様

追伸 別便拜呈の「華道」今度の今はベルシヤで、大して面白くありませんが、お慰みまでに、草々。

昭和三十三年十一月八日

拜復 御節重を御詞を戴きまして恐入ります。安土の放光菩薩に就ての御教示詢に興味深く有難う存します。普門品は西域住還の胡商の間に成立したものだと思ひますが、御説のように法華經の中でも民衆的であつて居りますね。とりあえず一筆御返事のみ。草々。八日、小林木市郎

昭和三十三年十二月十五日

拜復 御鑑賞、例の如く面白く拜見。林鴻の儒生好奇古はどうも彼自身の自問自答のように思われます。彼自身 好奇古から出發して天地初に辿りついたのて 一杯やりながら自らの遍歴を自らに語っているところのようです。雀囀の寒鳥忽高翔は彼の魂の高翔で、雨霜を夢る無衣の客は 寸ちわちそれについていけず、悲しくこの世に傾倒する魄の姿と思われます。日月遙相望は 別の視覚で見れば魂、遠相望のようて、この詩には實に天翔る魂と 魂を空しく望むのみで、それに具していけな、魄の怨情とが、人に迫つて出ているようです。過雁はどうも音でよまねならぬ音楽のようです。尋尋覓覓とはじめから魂をとめてもとめえぬ魄の怨が人に迫つてからみついてきます。魄は迫です。しはや人語をなすぬ魄のうめきが、人に迫つてくるようです。とりあえず一筆御礼のみ。草々。十二月十五日。小林木市郎 原田学兄

昭和三十三年十二月廿日

拜復 御節重を御てかみを恐入ります。佛教藝術は毎日新聞の発行ですが、ちよつとも

宣傳しないので、知る人稀です。好いお正月をお迎えなさいますように。草々。世日。

二七

昭和三十四年三月十日

拜啓 大衆をいただきまして、春がまた唐虞の桃から訪れた想が致します。柳宗元の御
解釋は全く自由で、しかも最も適切。ほんとうに自今独自の解を下し得たときにほん
うに作者の意を得たのだということを感じ致しました。李夫人歌の御譯を「漢文」三月
號に魚鱗拜借致しましたので、御詫言同誌を別便拜呈致します。連載の小論は、一年ほ
どして本にまとめたかと思ひますので、本になりましたら呈上いたしましよ、それが
今日本道形藝術のつづき二回も御覧下さいませ。春から何かと忙しく、そのう之風邪
をひいたりして、拜呈遅れてしまいました。恐しからず御許し下さい。先ほどりちえず
御礼のみ。草々。三月九日。小林太市郎 原田憲雄学兄

二八

昭和三十四年五月十二日

拜啓 小宛の御解釋を有難う存じます。原文ではどうしても讀みづらいものが貴譯によ
りほんとうに樂に面白く生まれまして、野の鳥や昆虫を友としてひそやかに暮した古人
のころが、直ちに自今のものとして痛切に感受されました。行動主義、立身主義、功
名主義か、昔から今もほとんど多くの平和な人々を苦しめてきたかわかりません。幸に
怠け者、身亦名亦蓋といふたような怠け者が多いので、まだしも人間が死に絶えずに續

いてきたようなものです。享樂を行動に求めず、想像に求める藝術の職能が幸に強くなるから人間を破滅から救つてゐるのですが、それをしつと強くして、行動的人間、即ち他人を傷ず人間を絶無にする必要がありません。小生の日本美術説 二月休
みましたが、近日五月号を拜呈いたしました。先ほどりあえず一筆御禮を。草々。
五月十二日、小生女市郎 原田啓元

二九

昭和三十四年六月七日

拜復 先日は御ていねいなみてがみをいただき、また昨日は「大衆」を頂戴し、まして有難う存じます。孟詩の妙解いづもながら拍案して面白く拜讀致しました。初句からして日を逐う月、月をおう日の決して相會わぬ永遠のフーガをまづ現して、そしてさつぱりした椽側のごろねに蓮の香の風が吹くというあの四句で、何ともいえない手持ぶさたの牀いさ—無察というより淋しさ、辛大がいれば却つて氣つまりでしょうね—を出し、そのあまりのさびしさからおもしろ琴を抱くように取ったが、しよせん、それを鳴らしても聞く人もないと思えば、さびしさはいよいよつるばかり、その身にしむ寂寥の遙かな身になかぬ故人の姿が遠く見えるけれど、それに決してゆきつけないのは、ちよつど月が永遠に日を追つて空をめぐつてゐるようなもので、月しよぞ淋しかろうと見上げた空の中空高くひとり月が寂しく光つてゐるといふ情趣は、やはりその友王維の竹里館の詩と通うところがあるように思われます。辛大は要するにだして、魂をしとめる魄の無限の寂しさをこの詩が、つたうと思つのは、やいゆきすぎでしようか。とにかく御解釋

の妙文をよみなから、その奥に漂うやういふ情趣の身に迫るのを覚えよした。詩の途中からいつか辛大が辛大でなくなつてしまつていて、懐故人の故人はすてに一般的な故人——イデアにたいする遠慕の幻像となつていて、そして勞夢想に至つては、はつきりあらはる夢想の根元、あらはる夢想をうごちしものになつてゐるやうに感じられます。つとゞ辛大をおもう現實の思慕はたしかにありますか、それがいつか変質してゐるといふより、それかほしめから魂を懐く魄の思慕に復歸してゐるといふといふ、好いかしれませぬ。とりあえず一筆御礼のみ。草々。七日。小林太市郎 原田学兄

三〇

昭和三十四年七月廿五日

拜啓 ぼんとうに暑くなりました。書き物に追われて、すっかり御礼申上げること遅れました。頂戴の夏花明はま、たくモノの燃えるやうな真夏の正午の繪を想わせます。また「牧神の午後」を彷彿させます。セサンヌの浴女も浮んできます。夏糸は男、朱葉は女で、復成妍はニンフ、榮燈は…… *des nymphes et d'un, leur incantation* といふやうな妖しい幻想と想つて好んでしようか。しかし、しうすぐそに深遠か迫つてきてゐるやうな感じ致します。遠くもわびたてゐし、ヨアそやういふ風なものにちがひありません。遅れながら一筆御礼のみ。別便にて造形藝術の鑄き二冊拜呈致します。御笑覽下さいませ。草々。七月廿五日。小林太市郎 原田学兄

三一

昭和三十四年九月廿日

拜復 きょうはいめて秋晴れのたのしい日に存りました。先日頂きました貴書、いつもながら面白く拜見、殊に「夏夜」の美しさに深くうたれました。やはり蜀主の作の方がこまやかですか。起來携素手の一句はさすがに東坡で、これがないと原作さえよく判らないと、った妙味があります。私は原作を次のように読んでみました。

冰肌玉骨……花葉のやるせない蒸暑い夏の夜のみなされぬ寂しさ

水殿風来……孟昶來りて暗中に媚香秀す

簾開明月……細が簾をあけたので月光さし入り花葉羞しらう

……雪鬢乱 その乱れ髪を直して庭にてやは あたりは森として

……情無聲 たた水の流れる音のみあり

……渡河渚 その水の音を天上にも聞くよう

……幾時來 このたのしい暑さの去るのか惜しまれる

……嗒中換 現實のこの一瞬かもう過去の追想のように 仄かに永遠になつていろ

「幽齋」は世間の煩さ、連中であり、また人の心をうるさく魅みたてて狂氣のようにする恐怖や欲望の由であり、それを退治するには、たた心を鎮めてじつとしていゝほかなしい心しすまれば皆すーっとなくなつてしまふという安んみ方を説いたものと思われま

す。
常建は御教示によりちよつと氣をつけて讀んでみましたか、なかなか面白いものですね
哀哀哭枯骨——立馬哀不發——殍兵突遠水などは魄の鬼哭、また天際一帆影——一身為

輕舟——一絃清一心などは魂の高揚として、まことによく魂魄を詠んでいるように思われます。御高論に大いに期待して居ります。

きのう中新さんがお見えになり、徒然草の研究³を頂戴致しました。精密周到の大作で、ゆつくり玩請するのを深めたのしんで居ります。兼好は日本思想の分水嶺に立つ大思想家で、彼を知れば日本藝術の全体を極め得るとさえ思いますので、いま同兄により立論の確實な基礎を与えられましたことに無上の喜を感じます。架城の詩餘畫譜に「夏夜」の圖がありますので、それをお見せがてら、いずれもうサシ涼しくなりました頃、一々御高談を伺いたく存じて居ります。先は遅れながら一筆御返事、御礼のみ。草々。九月廿日。小村水市郎 孫田雅兄

三二

昭和三十四年十二月十四日

拜啓「大乗」の御謬詩を戴きまして有難う。道古堂詩集は私も愛讀のものので、御謬匠人とうにびつたりしているのに敬伏致しました。斜陽の頃に尋ね入り、歸りにはもう暗くなつていたので、鬼唱が殊にヤビしくなしく響くのでしようか。曹子建²と阿彌陀經との結びつきについて始めて教えていたのも有難く、玉樓春及び空屋の御説³と照し合わせて、阿彌陀信仰のこれまで氣付かなかつた深、契機にまさまさと觸れる想が致しました。阿彌陀經のあの語をただの比喩と思つていたのが全くの不覚でした。いつも幽深な御教示をえまして、一ねに感謝致して居ります。取りあえず一筆敬重にも御礼申上げます。拙論をつづき三篇御照覽下さいませ。貴兄と小生と同日に發送しよりましたの

と一奇に存じます。草々。十二月十四日。小林太市郎

原田学究

三三

昭和三十五年三月八日

拜復 詩兼無花果の骨にを戴きまして早速拜讀。各篇ひとつひとつから、すへてつよい
感銘、あや世の中から身うちを浸み込んでくるような感動をうけました。私にはどうも
すべてがあや世のかげの薄明りに歌われているように感しられましたか。そうではない
のでしうか。そして業の中へ消えた女も、ほほえむ土偶も、小鹿も、黒いトシボも、
あなただけ誰かにも、妻も、すべてじいいのまえをいらいらにげてゆくなまずめのように思わ
れます。そうそうあやの谷間も、くらい灰のかげのような谷間でしたね。しかし「無花果
の骨にしてはなまずはどこにいらのでしうか。タキニの谷へにげていったのでしう
か。あの辺の石の泉、黒い月、沼の髪の中の藪が、すばらしく美しいです。暗い砂
石の夜も。ことに石の夜は、まうたくそういう夜がありますね。讀み了って、黒いトシ
ボやあなただけ誰かをメシテースとして、幽玄なあやの世を身近にまがまがとみつめる想
がいたしました。ほんとうに有難うございました。私はこの頃は書き物と家内の病氣と
に、一時にまた交代にせめられ、前に戴いた御手紙にも御返事を差上げず、たいへん失
礼致しました。どうかあしからず御容し下さい。別便で連載の結末を差上げます。その
うちゆくりお目にかかりたいと存じて居ります。まずは寸楮幾重にも御礼迄。草々。

三月七日 小林太市郎

原田憲雄 啓

三四

昭和三十五年四月十二日

拜啓 杜甫の詩の御高論三篇を讀きまして恐入ります。就れし小生の注意しなかつた作
で、大いに珍らしく、有益に拜讀致しました。どつし杜甫はただゴツイ面のみを皆注目
致しますか。御示しに依りましたような、氣の弱い繊細な本質を見ないと、どうして深
く理解できないことを痛感致しました。恐らく、杜甫研究史上に一新紀元を劃する見解
として、敬儀また感敬致しました。此頃はじめて唐詩壇というものが、種々の酷評に拘
ず、なかなか好い書であることに氣づきました。常建の「西山」の前後など殊によく響
んでいると思ひます。別便にて中國陶磁の拙稿一部拜呈致します。御暇に御笑覽下さ
ませ。先は一筆致重にも御礼のみ。草々。四月十二日、小林太市郎 原田孝元
唐詩を讀んでいふすと、みる大きい壯麗な自然または運命の中の小さい自己をみつめ
ているように思われますが如何でしょうか。宋以後になると、この雄大な背景が失わ
れてゆくようです。

三五

昭和三十五年四月廿四日

拜啓 御歌集雜体外路で讀きました有韻う存します。早速拜讀 生命というふしぎに死
忍ぶものに 医学という幼稚で眞剣なものか、あるときは傲然と、あるいはゆるら減法
に、またあるときは遠慮ぶかく、あるいはこわじわに、兒戯のような、惨酷なような
あまりにも單純な、貧弱な手段でもつて大まじめに立ち向ひ挑みかかつてゆくコメディ
ーが眼前に展開されるのを覺えました。そうしてまた、狭窄や小罪の純情の弱々しいし
る文にもつとつとよくうたれました。私の知らない世間のさまさまふしぎに深い感動を

御承し下さいますこと深く喜んで居ります。別便拜望の拙稿御笑覽下さいませ。先
はとりおえず寸楮御礼のみ。草々。四月廿三日。小林水市郎 原田高雄様

三六

昭和三十五年六月八日

拜復 先日は御郵重を御手紙を頂きまして恐入ります。何かと取給れて御返事も致さず
たいへん失礼致しました。又昨日は中國詩御解説三篇を戴きまして早速拜讀 韓偓の句
ともしえぬメニンコリー、眞山民の爽かな清遠、寒山の人を導く藹暗 孰れも作者の核
心を判る御解説に思わす拍案驚節致しました。中ても眞山民は最も幽玄で、牧兒は塊、
牛は塊 塊も塊によつて解脫して欲苦をはなれ 相伴つて飄々と陰雨の下界を下に、天
上の樂土へ上つてゆく妙音をさく想が致しました。爛然掛疎林はすばらしい好句で、こ
の一首は王維のたぬよくその心を歌つたものと想いました。近頃明詩遣で華察の詩を讀
んで共鳴致しましたか やはり眞山民の方が幽玄で、無限の意があります。惜花は蕪村
の瀬河歌と恐らく同じような心境で 亂辭のうちには彼からはなれていつた麗姫でなくて
も、その追想の中の幾人の美女を詠んだような氣も致します。もちろんそれが彼自身や
唐朝の滅びゆく邊とも交錯してよいわけて 必ずしもその言葉を一つに限定することには
ないと思われれます。こういつた超論理的な曖昧不定の深い面白さが唐詩の眞髓かも知れ
ません。とりおえず一筆御禮のみ。草々。六月八日。小林水市郎 原田憲雄様

三七

昭和三十六年二月七日

拜復 美しい感動にみちたおてがみを頂きまして恐入ります。おてがみを学生たちに見

せました。必、みを取りあつて回覧し、友人たちにも見せているように、また私に戻つて参りませぬ。ピカート博士の詩はたんとしう羨しい詩でしょう。天地の間に降つては消える孤獨な人間の悲しみが、そのまゝ雪のかたまりかたまりはかたまりなうたになつています。そうしてその悲しみの中から黙々と立ち上る偉大な人間がいかにか崇高なことでしょうか。またこの詩によつて淫俗の雪景がそのまゝピカート博士の解得されるのもふしぎなぐらひです。はいめてあの繪の意匠が上々わかりました。しかし私の暗い冬景にはまた太陽がさしてきませぬ。生と死とか月とついで接するキリキリの所へまで。私はまだまだ追いつめられてはく気が致しませんが、あるいはそのどたん場になつてこの世の生で新しい生にめざめろの氣も知れませぬ。ほんとうに好いおてがみと好い詩とを戴きまゝ有難うございまいた。近いうちに拙著と抜刷とを御呈致します。御暇に御覽下さいませ。草々。二月七日迄、小林太市郎 原田禹雄様

三八

昭和三十六年二月五日

拜復 先月十六日、ヤラに廿四日、御親^切をお手紙を頂き、深い感動を以つて拜讀致しました。またピカート博士の「沈黙の世帯」を頂き、けいめつて博士の幽深な想観にふれえて、日々に愛讀致して居ります。私たちが何よりも許けさつて *Silence* を愛しますのは、その中に世にも微妙な音楽を聞く故で、そういう *Silence* の中から生れる音声が音楽となり、そうして、音——その中に *Silence* を含まない音が聲音となると思われます。あの本はほんとうに有難うございまいた。ピカート博士から同封のような御親切をお手紙を

頂キマシてたいへん恐縮致して居ります、今日寸暇をえまいたので、ようやく御礼の手紙を差上げました。その御親切と深い体験の御指示とに何ともいえず感動致しました。また、たく助けられた想で、いつも博士のおことばをのみしめて居ります、貴兄からしづうかよろしく御申上げ下さいますよう御願ひ致します。

私の本は要するに私の苦しみと体験をちよつとカモフラージュしたものにすぎませんが、ただ、嘘か書いてないのて、すへて自分自身の真実をみつめうる方々に共鳴していただけるとのと思われれます。「真実」に於て讀者と著者とが結ばれると言つてよろしいでしようか、この世の中にはあまりに虚偽が多い。法、経、匠、工など、すべて有益とされる学問はみな嘘のかたまりで、しかもその根本にあまろしい偽善が牙をといています。魂魄についての美しい御書見記は實に貴重な資料で、ほんとうに嬉しく拜讀しました。私たちがどつし物質と精神とを無理に離して考えるように、欲望が物質となり、物質が精神となる変化こそ直接体験の事實ではないのでしようか。なほ解剖生理説への御教示も興味よく拜讀致しましたが、それらのことについていろいろと(三四字不詳)いたく存じて居ります。いつも乍ら肴席にとりまかれ、御返事が遅れてた、へん失礼致しました。御親切なみてかみとピカート博士の御本と、重ねて幾重にも御禮申上げます。草々。三月五日、小林太市郎 原田禹雄様

三九

(同封のピカート博士の手紙は省略)

昭和三十六年七月十七日

先日は失礼。これは短かすぎてわかりにくいのですが、御笑覧下さい。小林生 原田

学者

四〇

昭和三十六年七月二十日

御てがみを有難う存じます。世説の御過衰には恐入りました。無意識を照らされた喜びにふるえました。冊府はきつと御覧になると思つて拜呈致しませんでした。二三の脱字句字があります。禹嶽さんに進呈した本にそれを直しておきましたので御暇に御覧下さいませ。また信西の子の澄憲はまさしく安厩院流の唱導の始祖で、いわば繪解きの大塚たろことを川口氏の平安朝漢文学史の研究下巻によつて知りました。信西一族は「平治」のみといわず、當時の文化の随処に指導力となつてゐることを痛感致します。山梨いくらか食欲がでてきました。まあ安心して居ります。おたすね下さいまして有難う。とりあえず一筆御返手のみ。草々。七月廿日。小林太市郎 原田淳兄

四一

昭和三十六年十二月十八日

拜啓 寒さに拘り愈々御健勝およろこび申上げます。

さて妻奈美子糖尿で久しく病臥致しておりましたところ、先月十五日夜半他東致しました。生前にいかとおせわになりました御文誼をおもいますと、まことに無量の感慨が致します。一つしんで深謝申し上げます。昭和三十六年十二月十八日。小林太市郎

四二

昭和三十六年十二月廿九日

拜復 御親切な御てがみを頂きまして有難う存じます。家内ミサを善く居りますことと存じます。京都の寒い日にすゝて鞠戸内海の小春日和に暖ま、いろいろな和やかな

きもちになりました。此間御兄様に参つて頂いて御経をあげて頂きました。御二人の御
親切ほんとうに有難く嬉しく存じます。草々。小林太市郎 原田禹雄様

四三

昭和三十七年二月二十日

拜復 おてがみを恐入ります。多くの詩者は、貴兄の御教きになるようにしか讀みませ
ん。あるいは高級エロたといふ、ある書店からは「芸術とエロティシズム」の出版をす
ずめて参りました。柳田國男さんがどこかで論文の中に猥褻なことを書くものではない、
人はそれを讀んで他を讀まぬから、と言つていますが、これは至言です。但し私の解脱
は色欲あつての解脱で、その変身としてはじめて解脱があるというのですから、欲望の
ほうを強調せぬわけにいかぬというのは、やはり色欲の方が主となるからでしょうか。
ほんとうは解脱も色欲のうちと云つてよく、また解脱のために色欲ありと言つてもよい
のです。その解る人は愈々少なくて、また解脱のために色欲ありと言つてもよい
ない人は、色欲のほんとうのたのしみを知らずして、解脱までいつてはじめてその樂
しみに徹したといえましょう。しかしこれは四五人の人ばかりか理解、れないでしょう。
その四五人の心友のために、私は「芸術とエロティシズム」でも何でも書きますよ。
某英社はよほど困つたらしくて、私にも貴兄に御話するよう頼んで参りました。齋藤
氏は卒論審査に忙しいのたそうです。そこで私は、解釋する詩人の性質により、あの形
式からは必であることの止むをえぬはよいもあろう。しかし大体としては、あの形式を踏ま
えることも必要だろから、三月中旬に原田氏にお会いして相談してみよう、と言つて

やりました、それまでには私に書き物で一才快くして居りますので。まあそんな用事はとしかく、来月中頃には久し振りにお目にかかつて、ゆっくり御高談を伺いたく存して居ります。根本としては自分の研究を出すのであれば、まあ本屋のために一應の形式はととのえて、や、ては好いかと思ひますが、いすれ経曆の上お話を伺つて御一緒に考へてみましよう。

寒さの折

お身体御大切にございませ。草々。二月廿日、川村太市郎

原田憲雄様

四四

昭和三十七年三月十五日

拜復この間はお手紙有難う。齋藤さんに通解が長く存つて下欄空白の頁がでるおそれありと言つてやりましたら返事には、ある先生からは字注が長くなつて上欄空白の頁が相当でると言つて来たこともありました。尤もそれはノートか日記のようになつて本らしくないので困る。それにくらべると下欄の空白はまだまじりましたが、なるべくはさけて、何か備考、註論、考証のようなもので適當にうめてほしい。自分も上下欄のつりあいに今苦心執筆の最中、とのことでした。本屋からも同じ趣旨の回封手紙のようになつて参りました。まあ文筆の士がそれくらい筆曲藝が得意めというては恥？だから、私も上下欄を太ししろくつりあわせるつもりで、今から大にたのしみにしていきます。註論といえは何を意いては好いわけて、おそろくそれが最も濔判として生氣ある文章になるかしれません。きつとすばらしいものが書けるでしょう。いちばん面白いところをのびのびがやりやすいように、てはいちばん面白くなるしめです。右御返事候々御知らせまで、御暇に

またどうぞおより下さい、草々。三月十五日。小林太市郎

原田憲雄様

四五

昭和三十七年八月十二日

拜啓 「天刑病考」を戴きまして恐入ります。精緻な御研究たいへん有益に啓蒙されるところ多く拜読致しました。別便にて弱法師の繪について書きましたものを拜読致します。何かの奇縁のように思われます。暑さの折、御身体御大切に。草々 八月十二日、小林太市郎 原田憲雄先生

四六

昭和三十七年十一月十九日

御吟書を頂きまして恐入ります。他に急かれるものを書いていて王維がなかなか進みませんので、先月から連載を休んで王維に専心することにしました。また幾らも進んでいないので、御取し、幸いです。李賀、大いにたのしんで待望致して居ります。先は一筆御返事のみ、草々。十一月十九日。

四七

昭和三十七年十二月十七日

拜啓 御高論李賀の長歌短歌を戴きまして恐入ります。早速拜読、魂魄説が貴兄において更に妖奇に幽深な展開をとげつつありますことに身にしみるよろこびを感じました。ことに夜半何處々以後の御解は真に詩人の心霊に通うもので、長言の詩の特徴は、まさにそれが魂にとりのこされた魄の哀しい悲泣を切々とひびかせることにあるのが、實によくわかります。王維は反折に魂のほろろを解脫のよろこびをつねに高らかに歌って居り、その魄もまた魂につれて自ら魂化するたのしさをいつも歌っていろろが感じられます。

長吉にもまたこの格いがあるのてしうか？ とにかく王維を魂の詩人とすれば、李賀は魄の詩人といつてよく、この二人からみると、李杜では魂魄がしつくりついていて離れていないところは、二人の詩の現実味と通俗性とがあるのでは無いでしょうか。李白には魂の意識がないように思われます。

王維は書きはじめたものの、あれでいいのか、もうとすつきり王維にふさわしいようにいかめしめかという気がして、もう一つ意氣の高揚しない所へ、次々に急を要する書き物が舞いこんで来て、些か停滞、皆様に御迷惑をかけていますが、そのうち活路を見出して速度を加えることに致しませう。どうもおれではいかめという氣がするのですが、書いていると愈々重苦しい考證的なことへ興味が沈下していつて、それをぬけ出すのに苦んでいます。いらぬものをふりすてることはなかなかむづかし、ことですわ。七日から最島へ二三日いって来て久し振りの旅行で面白く、島の女神についてすばらしい靈感をえました。日本のヴァイナスですね。寒さの折お身体お大切に。一筆お礼のみ。草々、十二月十七日、小林木市郎 原田隆兄

四八 (三八と三七の間に入すべきもの)

昭和三十五年十月十二日

拜啓 先日は「方向」9号を戴きまして恐入ります。早速拜読、今号は殊に力作と雄篇との双璧にて、感銘別して深く、早く御札申述べようと思いたが、山荆の看病や何かを取紛れ、甚だ遅れまして申訳ごいません。李賀の頌歌は、恐らく李賀の本質を誤らず御つきになつたもので、この筋金が一木つよく入つていて、しかもそれをすつきり変

貌した所は、まさしく李賀の格調の高さがあると思われます。ただの鬼語とか僻とかい
 っしのでなく、彼の詩に、根柢において三代の鑿器の奇古が溜むことを貴論はひしひし
 と人に感じさせます。その作詩年代の御考定の確妥は言うまでもありませんが、そ
 れより以上に李賀の頌歌じし人に方らぬ奇古の高趣が貴論に横溢しているのにふかく打
 たれよした。「玉琴」はじつに常連についての最初の、しかも最初から最も完全な、決
 定的な御研究で、何人もこれ以上に出ることはできません。王昌齡、殷璠、胡應麟以後
 彼は貴兄によつてはじめて見出たされて、その幽深な天才を明らかにされたと言えまし
 よう。はじめに彼の全詩を上げて精しく校合され、たのも貴重な著作で、それによつ
 て何人も安心して建の詩を讀みうるようになりました。別して私が殊に深い感銘をうけ
 ましたのは、白湖寺後洋宿空門詩の御解釋で、およそこれまで唐詩をかしく深く味讀し
 た人であつたでしよるか、心靈の歷程と自然の叙景とがじつに微妙に交錯しつゝ相即相
 入する奇趣を、貴兄はまざまざと、手にとつて説明するように説きあかされました。十
 二
 マふべきものはこの詩と芭蕉との一致で、たとへば 新花水對定は

象湧や雨に西花がねぶの花

を想わせ、そして圓月明高峯はまつたく、
 雲の峰幾つ崩つ月の山
 で、しかし「奥の細道」のそのの「息絶え身こごえて頂上に臻れば日没して月顯る……
 臥て明るを待、日出て雪消れば湯殿に下る」という條は、ほとんど建と同く体験さるべ

ていろように思われます。ついで日出城南隅には、

梅ヶ香のつと日の出る山路哉

と同じような靈感のひびきがあり、また却窓雪門深は、どうしても、

門しめて黙つてねたる面白さ、

を想わせます。すへて人間の心の旅路は時處をこえて同じだということを深く悟りま
た。そうしてまた常建のフエミスムから王維のそれ、ひいて根本においては観經のそ
れすなわち中國の淨土思想と女性尊重の關聯など、想いはさまざま遙かにはせて、何
ともいえないたかな示唆を蒙り、深く感謝致して居ります。御礼が今日まで達しました
こと致重にも御詫ひ申上げます。草々。十月十二日・小林木市郎。原田學元
別便舟屋の「弘法大師」御笑覧下さいませ。

注

一 方向 中新報 原田憲雄を同人

とす3雜誌。方向社より不定期刊。

2 福機 憲雄の李賀論。

3 兼好論 中新の「雙面隨想」

二 1 ヌ 李賀詩。この原題は「謝秀オ…」

3 王維詩。

二 4 憲雄の李賀論。

三 1 巽幾道の玉樓春

2 王彦泓改回の鬼詩

四 1 一 袁中郎私記

六 1 憲雄訳中國詩選、方向社刊

2 憲雄長女恭仁子筆

七 1 憲雄の前の妻原田千美の遠歌集

- 七 王彦泓詩集
- 八 李賀「樵公」
- 九 中野の「雙園隨想」
- 一〇 憲雄の第一詩集、方向社刊
- 一一 「禪月大師の生涯と藝術」王維の生涯と藝術」大和鈴史論」中國繪畫史論 文など
- 一二 博士の「春風馬埒曲の解釈」に、
への憲雄の読後感
- 一三 原田十美の「原田憲雄の歌について」の一文をさす。
- 一四 常建の「破山寺後禪院」について
の憲雄の小隨筆
- 一五 憲雄試中國詩選、方向社刊
- 一六 雜誌名。毎号一頁、中國詩鑑賞を
以後三年にわたり執筆した
- 一七 烏雄の第一歌集、自書像短歌会刊
- 一八 李賀「十二月樂歌」七月
- 一九 廣休（禪月大師）黃雀行
- 二〇 顔況親記
- 二一 マックスビケルト著佐野利勝訳「マ
クスキ結婚」読後
- 二二 「春風馬埒曲の解釈」読後
- 二三 孫星洲夫人王采蘋の「池上書寄蔡
陰」
- 二四 漢武帝「李夫人歌」
- 二五 詩經
- 二六 林鴻の「飲酒」
- 二七 首瞻の「早發交崖山還太官作」
- 二八 李潛照「声声慢」
- 二九 雜誌名
- 三〇 唐寅「桃花庵歌」
- 三一 柳宗元「柳州二月」
- 三二 藝術の理解のため
- 三三 孟浩然「夏日南亭懷辛大」

三〇 韋應物の同題詩

三一 蘇軾の「洞仙歌」と孟郊の原作

二 舒岳祥の同題詩

三 中新著『徒然草』の成立に關する研

究― 兼好の伝記考証を中心として―

三二 枕せ駿「錢塘詩人潘雪帆墓在蜀岡

往尋不得」道古堂は枕氏の室名

二 曹植「五遊詠」についての解説

三 晏幾道の「玉樓春」王彦泓の「空

屋」についての解説

三三 憲雄の第二詩集

三四 「元日」「対雪」「畏人」

三五 高雄の第二歌集

三六 「雪」ピカート博士の青年時代の

作品。

三八 此れはのちに佐野利勝氏によつて

翻訳された。

四〇 博士の「若山先生の垂訓」が世

説新語』を思わせる名文であることをい
つた憲雄のことばをさす。

四〇 二 前注の文が掲載された雑誌名。

四二 一 高雄は岡山縣長島の巨久光明園に

勤務している。

四三 一 同社企畫の『漢詩大系』の一冊と

して執筆した「韜愈」に対して同社から

形式的な種々の注文をつけて来たのを憲

雄がことわつたことをさす。

二 『漢詩大系』企畫者の一人。

四六 一 『漢詩大系』の一冊で博士執筆分

をさす。

二 『漢詩大系』の企畫者の一人。

三 『漢詩大系』の企畫者の一人。

四 『漢詩大系』の企畫者の一人。

五 『漢詩大系』の企畫者の一人。

六 『漢詩大系』の企畫者の一人。

七 『漢詩大系』の企畫者の一人。

牧

歌

禿げた土から

草木が起き上るとき

舌を噛み

石ころ踏んで

めすまれた牛をさがしにゆく

遠くから見る都市は

幻のように美しい

晝は税吏が

夜は盗賊が

荒す

分有される叡智は

神に接するもの

係けい蹄たてにかかった cogitation

原
田
憲
雄

静かな生活がしたければ
柳の細^{まなわ}を曳^ひけばよいのに
蜜蜂はうまごやしに満足しない
角の突き出た額^{ひたい}をふって
いつもやさしく呼んでいたのに
女媧の風陵のあたりから
柔毛^{なげ}のようにふわふわ
消えていった
水は山から青黒く流れ
牝鹿は孕んで毛を落とし
意地汚い鴛鳥は
群がって泥の中で鳴き騒ぐ
羊飼も
足どり選い豚飼も
好きな仕事を始めたのに
カッパドキアの牧人は

棘だらけの藁をたぐ
歩きまわるのに忙しく
歌をうたうこととしてきないのだ

壺の中の瓜に

—山中智恵子夫人家集讀後—

眸にうつったおのれの表情をみつめるひとは

批評家をおのれのうちにもつ詩人だ

草にかくれた薊のたくらみを捉える眼

ぎっしり行儀よいマツチのまじめさを

さかしあてた言葉は螺旋にとじこめ

噴水のまわりに大砲と柵とをおき

禁じられた葡萄酒を

夏の終りのポプラの尖に

注がせた

陽には老いゆくよるこび

朝空に雲雀ののどの礎石

少年はいつまでも涙ながし

癒されしことの不思議さに

はれはれと座を占める

むなぐるま

窓の外の絃付鳥は

隙ばかり

壺の中の爪はのびず

悲しみの姿勢のままに

狐の耳せる人は

ふりむかず

晴朗のひかりは野に歪ひたみ

きみの指は沈めり
怒りの市にゆき
くがたちの丘を越え
發端の祕儀を蕩盡せよ

街角に光る誠い海

圓をつらぬく鳥

熱いくぼみをもつ埴輪

不意におそわれて受するよりすへを知らぬ毒ある蛇

ネミの水車をめぐらせて

鳩を追え

わが骨くぐり

あんずを煮よ

髪けぬけてゆくものは

手を垂れ

曝された貝殻は

春

風に飛び

まことば束のまに途ぎゆく

春はいつも不在だ

坂道を下り

椎の木のかげで

雨は

びしよびしよ泣いた

糸車をまわす

婆さんの髪の毛は

毎日抜け

死んだ嫁と孫を

思い出すのに

俺

丁度よかつた

息子は杏んだくれ

濡った土間に

ピストルをぶっぱなす

そんなこんなで

死ぬひまもなく

婆さんの髪の毛は

どんどん抜けた

熊になりたければ

着物を脱いで

森の中へ駆けこみ

唸りたまえ

熟知することのみ

語るのほ

賢明である

やがて ぼくたちの背中に

黒い毛が生え

講壇から

ANDOO について

深遠に述べる

教授に

噛みつくことができらざらう

それは實に

優雅な

趣味である

日

蔭

チヨロギをほくは食べたことがない
耳のうしろが痒いので

親切な隣の人か

水ガラスの種をくれた

あいにく ほくは

エリック・サティではない

赤鉛筆の芯を削って

舌にのつけるわけにもゆかないのだ

世間の義理は

つらいものだ

孔子だって梓に乗って

海の向うへ

行きたかった

羣書類従をひっくりかえし

ぼくが

うんうん唸るのを

キノコは陰惨に

噎っている

日蔭者だとあいつはすねるが

そこの

けっこう愉しいのだ

上り下り・ヤマトエサカ

水やぐさの貯るくわ

難問の期に入

百のり」を本意の

今口千三郎の

今口千三郎の

日 新

十二月 樂辭 田 憲 雄

はじめのうちに

李賀がはじめて韓愈を訪問したのは、元和二年^{八〇七}の夏の終りか秋のはじめのころであつたと思われる。この年、愈は四十歳、賀は十七歳であつた。愈はその元年^{八〇六}月、江陵府法曹参軍事から権知國子博士に轉じて長安に選られた。権知國子博士は、國立大学の准教授といふほどの官である。二年、東都分司、すなわち大学の洛陽分校勤務となり、夏の末に入洛した。賀がおのれの詩集を獻じて愈の弟子となつたのは、この時であらう。

愈は翌三年、國子博士すなわち正教授に任せられ、四年、都官原外郎に轉じ、五年冬河南縣の令すなわち知事となつた。この間下つと洛陽に勤務した。賀の家のある昌谷は洛陽から四、五十キロメートル西南の地で、朝暮を出入れば、騎馬をもつてしまつた夕方までには洛陽に到りえたはずであり、またかれは、ある期間、洛陽に下宿していたようにも推せられるから、たえず下師を訪うたと思われよう。進士の試験を受ける資格を得るための

選拔試験である。この試験は當時、各地方の長官が主宰して毎年行つた。すなわち愈の直上上官河南府尹房式が賀のうけた府試の主宰者であつたと思われる。これにおよまりなけれど、その年は元和五年と定めてよいであらう。賀の答案がすなわち「河南府試」十二月樂辭并ひに閏月の十三首で、一年を月ごとに一首、これに閏月一首を加え、額出のため歌詞である。

正月

樓に上り 春をのぞめば 新しき春は 歸り來
ほのぼのと 柳黄ばみて 水時計 みる漏る處し
あわあわと たたよう鶴は おちこちの野べに たわひれ
寒き緑 幽けき風に 短かかる 絲 崩えそめぬ
錦の牀に 膝を なみ臥す 玉の肌 冷えて
露の跡 あさめぬまに 朝やみに 白いそめしか
都大路に 帯なして つらなる柳 折るに堪えんや
さあれ いつかは 花菖蒲 かたき契りを 結びなんかな

作者、ある、ほその人を想像させるような青年が、春を迎えようとして樓に上ると、
新壽が、東方から、光のように輝かしく、歸ってくる。

上樓迎春新壽歸

薄んだこころを押しかねるように、明るく軽やかな調子でこの詩ははじまる。
いふれつ國のひとひとにとつても、陰惨な冬が終つて春の来るほどうれしく楽しいものはない。正月を壽のはじめにあくことが、多くの國の多くの民族を通つたならわいであるのは、その樂いさ嬉しさをことほぐ心から出でたにちがいない。ことに大陸の冬は、
暗く冷たく、たとえは對愈の「苦寒」だ。

肌は鱗とひびわかれて

衣はかなから氷の利鏝

寒氣ピリピリ鼻にみわす

生き血凍つて指つまみず

喉にやけつくドフロクも

口先いつき猿ぐつわ

匙で食おうとすくえどし

コチコチ竹べらならべたよう

と歌うような有様であるから、春の遷徙をむかへる心は、ことげに盡しかたく、なごみ
群ひひである。

當時、長安や洛陽をはいぬ、地方の城市にいたるまで、柳や槐を街路樹として植えつ
らねた。一九四四年、中央飯店の樓上から北京の様子を眺める機会があつた。森林を街
観するに似たその風景に驚いた。唐代の都も樹木に富み、ことに柳は多かつたに違ひな
い。

陰暦の正月は陽暦のそれよりも一ヵ月おまりされる。この詩が元和五年の作なら、
その元旦は西暦八一〇年二月八日。前の年の冬に葉を落した柳の緑い枝々に、ほくの
すみながら、黄色いものが、ほう々とかすみ、なんともしいえないのどかな気分をたよ
わせていたことだろう。

暗黄着柳官漏遞

の暗黄は、そのかすむ黄いういものを指すので、暗けさだかならぬさまを示すことば
が、ここでは裁分のくろ下む氣味をよくめて用いているに違ひない。

官漏は、都内の檀弓時計とせられた皇城内の水時計である。時間の推移にことに敏感

で、エ、た、賀、は、し、ば、し、ば、こ、の、時、計、を、う、た、う、が、
「十二月 終結」では「十月」にみえる玉
壺、銀、箭、が、や、ほ、り、滴、な、の、で、あ、る、。宮、漏、進、は、急、に、春、め、い、て、日、脚、の、の、び、て、ま、た、こ、と、を、
時、計、の、水、の、し、た、た、り、が、遠、く、な、つ、た、た、め、か、と、ひ、わ、つ、て、い、う、た、だ、が、ま、た、こ、の、た、は、み、の、す
か、ら、春、の、盛、り、の、来、る、こ、と、を、待、ち、遠、く、思、う、心、を、合、わ、れ、て、末、の、二、句、を、み、ち、び、く、結、初、め、
こ、し、伏、せ、ら、れ、る、。

薄薄淡露弄野姿

う、す、う、す、と、淡、く、た、る、び、く、露、は、新、齡、を、野、の、姿、愈、を、撫、で、ま、さ、ぐ、つ、て、い、ろ、ま、う、に、み、え、る
こ、う、し、て、寒、さ、む、し、た、緑、に、か、す、か、に、風、が、わ、た、る、の、を、よ、く、み、ると、短、い、絲、の、よ、う、な
苔、草、が、萌、え、そ、め、て、い、る、。

寒緑幽風生短絲

作者の筆は、早春の野を描きながら、淡露のまわりにほのめく野の姿に、うららかな
女性のイメージを重ねている。伊蘭西の詩人 Arthur Rimbaud の "Soleil et Chair"
にうたう、

Et, quand on est couché sur la vallée, on sent
que la terre est muile et déborde de sang;

河邊の野に臥すや、
大地が 年々として 血のたぎりを
感じぬ

行と卒六直接ではなにか、それでは臨終の時たる状態に於て "Première Bohée" の

Et de grands arbres indiacetes
aux rités jetèrent leur feuillee

Malinement, tout près, tout près
ついでに大なる樹々は

空硝子の方へその葉を押しつけるのだった
いしわたるに 葉の間に 葉の間に

この indiacetes はまた、
中々みたのは Rimbrand の葉、葉を空硝子に押しつけてきたと聞く
Selle était
fort deshabillée 下着のたすき

錦牀曉臥玉肌冷

錦の牀に、曉を、まだ臥して、その玉の肌を、ひいやりと朝の空気にむきだしている
女體である。

露臉未開對朝暎

暎、北窓水作暎 今從元刊本

露をよく花のようなその臉は、まだ開かず、朝やみにむかひ、匂うている。これまた、

Assise sur un grand chaise

M-me, elle jouait les mains.

Sur le plancher frissonnaient d'aise

Les petits pieds si fins, si fins

わたしの大きな椅子にかけて

半ば裸で 彼女は両手を組んでいた

ゆかの上に しどけなく 揺れていた

きゃしやな きゃしやな 小足を足が

との間にほとんど隔りがないうらに感ぜられる。

「十二月樂辭」は賀の數々年十一歳の「Première Service」は Rembrandt の著十
六歳の「すなわち同一年」の作である。賀は九世紀のはじめの洛陽の人 Rembrandt は
十九世紀のパリの詩人である。時間的にも空間的にもまったく隔絶した兩世の人々
はあつたが、ふたりの感性には、ふしぎに共通するものがある。この早熟の鬼才たちの
女體にやそく凝視が、かくまでに相似た美しい句を造り出すことは、まことに契あるこ
とといわねばならぬ。

さて、賀の詩中の青年の眼は、ふたたび、街路に帯のようにつらなる柳を見おろす。
その柳のすがたと女體の幻像とは、なみわがちがたくもつれあつて、かれの手はそこに
ひかつてのぼされる。だが、また欲望にめづめめ女に似た、幼、柳の枝は、さすかに
折りとるにしのびない。賀がもし西方の人ならば、このときソロモンム「雅歌」に「愛
のよのづから起る時まで殊更に喚起し且つ酔すなかれ」とうたう聲をききたであらう。
かれは佛經をも嗜讀する人であつたから、あるいは「大智度論」卷三の偈の「日光等し
く照らせども、華散すれば即ち時に開き、若し華いまだ應に敷くべからずんば、即ちま
た強いて開かざるが若し」の句を念じたかもしれぬ。

官街柳帯不堪折

はつとして 手をいいた青年は、さわやかな朝風に無心にそよぐ柳にむかい、明るい表情にかえて、こういいかけるのである。「存んといつても、もう春だ、やがて遠くない日、玉の菖蒲が結びれるように わたしとみよえのちぎりも、かたくむすばれるであらう」と。

早晚菖蒲勝縮結

この詩を一樓上で宮女が寝ながら春を迎える空子を述べたしとする注家がある。それは最初の上楼からして解けなくなる。

初句の終りの文字の餘は平聲の微韻に属する。第二、三、四句の連、姿、絲は平聲の女韻である。兩者は別の韻ではあるが、唐代には通じて用いられたから、その間の微妙な差は意識せられなから、この四つの句は同じグループとして押韻結合されているわけである。第五、六句の冷と暎とは平聲の青韻で、ヤ、キのグループとは區別されず、第七、八句の折と結との入聲の有韻で押韻された句のグループとし區別せられる。すなわち第五句と第七句で換韻しているのである。現實から夢想へ、夢想から現實へとうつりかわる境で、意を用いて韻を換え、讀者がそれに氣づいてくれることを、作者はさりげなく、求めていたのである。

夢想の女性を現實のひととみては、この詩を理解することはできない。

採桑のみなとべに 酒くむに

宜男草 生いいで 蘭や 人に行ほえみ

蒲の葉は さいかわす劍のごとく 風 薫る 香のごとし

いたすける 胡の燕 ときすきし 香を怨めば

薔薇のとばりに なすいて 煙は練の塵となる

金のかんかし 高き髪 夕暮の雲に 愁いて

たふたふと 恋一や 眞珠の裾 舞う

みなとべに 別れ送ると 流水の曲を うたうに

酒くむむと 背を寒く 南の山 又まかりしばや

「一月」の詩に溢れた感情が、ここではいちろしく屈折して、かがやかしい光と、
くらしい影とが、なまよわされた 複雑なむびきを伴って、歌われる。

飲酒採草津

採桑注は日左傳に 僖公八年に 晉が狄に敗れた地で、
後漢書に 郡國志に「河東

の屈縣の西南」とみえる吉地の名である。王光謙の「葉解」には「一統志のきいて、
「故城、今の平陽府吉州の東北」とするす。津はすなわち海であつて、そこで酒を飲む
といえは、旅だつひとと送るひととか、別れの酒をくみかわすのであらう、採桑はもと
より地名ながら、春蚕のために桑の葉を「む女」たちの姿もあつたからとに隠見するま
まを、この詩では兼ねて描く風情である。

宜男草生蘭笑人

宜男草は、萱草とも護草ともいひ、*Taraxacum vulgare* のことである。護は忘
と同義で、この草を食べると憂いを忘れるといひならわし。和名に「わすれぐさ」と
いふ。中夏の俗に、始婦がこの草を禁につけるとかならず男の子を生むと傳え、それゆ
えに宜男草ともいふのである。「くわんざつ」の小さき前えを見て居れば胸のあたりが嬉
しくなりぬ」といふ歌を齋藤茂吉の家集に見た記憶がある。茂吉の場合には心の中心に
ゆらぎをうたつたのだが、賀の詩は「二月」と題する。すなわち「周礼」に「仲春の月
は男女を會わしむ」といふ婚嫁の適期をうたつたのである。その詩に特に宜男草といひ、
他の草木の中からこの草を目すところとらえてゐるのは、いま酒を飲んで別れようとする
ひとたちの間に、子を求めるまでにつき進んだ戀情のあることを歌ふとしたからに遠
い。蘭笑人には、笑いかける女性のみならずが婀娜っぽく、むしろ蘭の花をみしの

けてその前面にこぼれ出ている感じである。

薄如交劍風如葉

pú rú jiāo jiàn fēng rú yǎn
 薄如交劍風如葉
 pú x fēng yǎn
 薄く明るく音を二
 六 rú jiāo jiàn fēng rú yǎn
 薄く交する音が二重に響く
 jiāo jiàn yǎn fēng rú yǎn
 交する音が響く風が吹く音が響く
 厚くかたい葉
 が、響く音が響く音が響く音が響く
 音でこころを打つが、視覚と聴覚とに鮮かにひびく句で
 1470° Rindland "Sensation" 6

j'irai dans les sentieres,
 Peoté par les liés, fouler l'herbe menue

Je laisserai le vent baigner ma tête nue

小徑と草

木の根にチクチク刺されるが、心持がな草を踏みだした
 小径と草

わたしは さらかな髪を 風にさらせばサヤカク

を、あるいはここに對比させることができずしれぬが、賀の句には *Rain-band* のにはない陰翳が、すてはこのおたりからたよいはじめ、その輝きとざわめきとが、實は、別れを前にして「憂いを忘れよう」とことさらに交したこいびとたちのたわむれだからであらう。

勞勞胡鶯怨酣春

目くろやく光と響とは やがてしのうい疲れをよし 強いてつとめた胡燕の羽の動きにも さかりをすきた春をかろむ痛たしなくさが、あらわれる。胡燕というからには、女は當時流行の胡風の化粧をしていたのであるうか。あるいは、化粧のみでなく、女が胡の人であつたのうし、わめ、繕く一句は、むくくたたよう。

蕨帳返煙生綠塵

蕨帳とは 善葎の花をつけた蕨がつくるとばりのことであらう。流れる露がこれをよぎると、紙枝が織りなす網目に、こまかな水粒がむすんで、緑の塵かうつすらかかつたようだ、といふのである。帳は室内にあつては寢牀を覆うものである。ここは野外ゆえに、善葎を帳としたのであらう。

よろこびのおわつたのちの落とした青年の眼には、こいびとのすがたも、緑塵のさい
た蔽帳のあなただにさすんでみえる。そのような場面はふかれたものの、かろしみを合人
だ心理が、なんと陰微に、またうつくしく歌われていくことであろう。ついで、何と
人ど凝むに似た重くろし、一行が、夕ぐれに雲にこかう女の表情をみえう。

金翹岷髻秋暮雲

翹岷 北京本作翹岷、今從京蜀本

金翹は黄金の髪飾、岷髻はたかたかと結いあげた髪みまげ。金翹岷髻のひとは、いう
までもなく、別れをおくるひとである。ひとは、この重くろしさを振り切るように立ち
よがり、眞珠をちりばめたもすそを翻して舞う。だが、そのしぐさには、ふかい怨いがま
つわつてゐる。

沓鷗起舞眞珠裙

沓鷗か。その舞の終るとき、ふたりの顔別が始まるのだからである。

ここまでの句末の文字で、津、人、春、塵が平聲の眞翹、眞、塵、空、裙が文韻。たつ
は通韻である。ははれは軽やかにひびいた韻も、いくたびかくりかえすうちに、重くろ
しくなつて来たが、ここで、急に、異種の韻をふむ異様な句は、濃れみちる。

漣頭送別留流水

「流水」とは曲名である。中樂府詩集の卷二十五に「漣頭流水歌辭」三曲かみえり。その第一首は

漣頭を流るる川は
たたよいて西へそくだる
あわれあわれわが身ひとつ
曠野をさまよいなんに

さびしく、かなしい曲である。その曲をとなえる李賀詩中のひとの歌聲もまた、去つてはふたたびかえらぬ逝く水のように、かなしい。

酒宴背寒南山苑

いくたび酒をくみ、いくたび盃をましたことであろう。はしかかわらず、酒ばかりたを暖めることなく、かえつて背をのあたりは、そつくり寒く、うち見やる南山の、死んだやうなその色。南山といえは、あかしから、永遠のいのちにたくえられるが、別れのうなしみは、その南山をさえ、死なせるのか。

水と死とは上聲の紙韻である。ただ二句押韻しただけで、詩はよいに打ち切られる。意味はなほ意味を求め、韻は韻を求めて、次の句をよぼうとするのに。

『聖府詩集』には初句を「二月飲酒採桑津」とする。おそらくこの詩を傳唱した樂工のたぐいか、みだりに「二月」の兩字をかえて、他句とその長さを齊しからしめたのである。みだりに、というのは、この句の他句より短いことが、この詩の奇數句から成る作品であることと共に、必然なることが、「二月飲酒採桑津」とうたうてきた人には、顧慮されていなからである。

中夏の詩は、一句一句が獨立しなからし、二句をもつて一つのまとまりをなすことが多い。ほとんど大部分の詩の句數が偶數であるのは、これによるのである。ところが、賀の詩は九句である。第一句が五字句であることは、他の句が七字句であることに對して、缺落の感を與える。缺落は、他の句に出席することによつて、全體の中で一種の均齊感をとりしどす。この詩では、他の句はそれに隣りする句と結び合ひ、初句はその缺落を補うべき他の句を見出せず、第七句まで進む。第八、第九句はそれらのみでならは互いに結んで充足するが、換韻したことによつて全體のパターンの中では、一種の缺落感を與え下にはおかぬ。第八、九句が、第七句以前と對應して安定するためには、かくとも更に二韻をかさねなくてはなるまい。それを、第九句で打ち切ることにによつて、初句の缺落が久しくしとあつた相手を見出し、またおも澱んだ水が階礎をのぞかれてたちまち流下し、生きおぐわした絶望が死によつて急に解決を與えられるかのように、この詩は充

定し、同時に終結するのである。

「十二月樂辭」のうち「二月」のほかは、のちにのべる「四月」「六月」「十月」「閏月」が奇數句である。「六月」と「閏月」とは初二句を三句で、あるいは一句を兩斷したものとみてよいが、いずれにしても、七字句である。點「二月」と同様、詩中に缺落をもつたのである。ただこの兩詩は、その缺落が、相違なく、兩箇の三字句によつて補せられて「二月」ほどに特異な効果をもたない。「二月」の詩は實に、外形を整い、まことさらに破ることによつて、内容的により高い表現に到達した作品といふようか。

このように自由な詩形は、實によつて創められたものではない。古詩とよばれる詩體は、句數、句の長短、押韻などにおいて、今體詩にくらべ、まことに自由である。ことに漢代の軍樂である鼓吹鏡歌は、長短銘雜する。唐人の樂府は、これを繼承し、別に、「長短句」といふ。李白など、この體の作者はみくない。「十二月樂辭」が樂府である以上、その自由な故は初めから予定せられたものであつた。とはいへ、一つの句けい主一つの句を求めて一對とならうとする傾きの、本能のよりに強いのが、中夏の詩なのである。「二月」のような形の奇數句は、他に例を求めて得られぬことにはなるからうが、タラリ稀で、かゝるまよはしうの名手でないければ、試みて成功することは難いのである。

東の方より風のそよぎ来て 眼に満つる春

花の都に 青柳はほの晴うして 榴まじきかな

複宮の深きふたりの館には 竹群さえく風たちて

さ翠の舞姫の衿 きよらなる 水のごとしし

蓬わたりて光る風 とみく百里のちまた吹き

霞キ霧 雲はせて 天と地のなへてふふいぬ

みいくさの装いなせる宮つ女の眉引あわく

ゆらゆらと錦の御袴 夾城に暖きかな

曲水に飄る香り 去りゆきて 行くせししらず

東方風来満眼春

dong fang feng lai man yan chun 七つの子守のうた六つまでがらん

音をうく心弾んだ音で のこりこり一つし *lai* とひるがえるといへば 軽くあかり、東の方

から来る風か、やわらかくたのしげにそよぐ風情が、そのままにあらわれ、満と眼とは

man yan とゆるくうねって、みわたすまなざしが及ぶかぎりのかなたまで春ゆくさま

が、たくみに描き出される。

花城柳暗愁殺人

花城とはいかに、も花さきみちた大唐の首都長安をうたうにふさわしいことばである。その花明りに陽氣を城市に、柳はすて、華かけを濃くして、人を惹きつけて春愁のたしみに堪えかねからしめる。愁殺の語は語勢を強める助詞であつて、漢の無名氏の「古詩」の「白楊 悲風多く、蕭蕭として人を愁殺す」、また岑参の「胡笳の歌」に「これを吹く一曲なみ未だ了らざるに、愁殺す樓閣征戍兒」などの例がみえる。北京本には「幾」とするが、ここでは必ず元刊本のごとくに「殺」でなければならぬであろう。

深宮深殿竹風起
新翠舞於淨如水

幾重の高閣とつらねた宮殿の奥深く、竹むらさをそよがせて、風が吹きおこれば、舞姫たちの翠の衣は、さざめき流れる水の上うに、淨うかた。

初句の華やかな音のつらなりは、その句の麗しい意味を、さう強しくはせず、第二句にうけつがれるが、その終り近く、ふと投入せられた愁殺の *chou sa* とかすかな音は、それまでの音のつらなりが撒きちらして、た感情とは異なる感情の到来を豫告する。果して第三句の深殿竹風をよひおこし、第四句の新翠や淨如水と展開し、韻も、

初二句の春、人の眞韻から起。水の紙韻に換り、ひいやりと涼しい感發を、讀者の肌膚におほえしめないてよもうか。

舞衿を 兵正子は竹の形容とし 王琦は舞姬の衿とみるが、じつは二つのイメージが重っている。~~ゆきあき~~。賀の詩には、二重三重の意味を複合した語句がしばしば用いられているのである。しかも、重なりあつた意味が感覺上の違和をよぶことは、ほとんどない。かれの詩が硬質の寶玉のように複雑な光輝をたたえながら透明を感じがするの。ここにあたり、その秘密があるのであろう。賀がこうした手法を意識していたかどうかは、明らかではない。かれに著し、この手法を見ぬいて意識的にみづれの詩法を襲いたのが、ほかならぬ李商隱だつた。

光風轉蕙百餘里
暖霧驅雲捲天地

百里のおなたまで生いしげる蕙蘭の上を風がふきわたると、葉はいへいにせいにきらきらと光ってひろがえよ。むつと暖かくたみ、た、香霧は雲を駆って天地をふみよ。

光風轉蕙は楚辭の宋玉の「招魂」に「光風轉蕙、沍紫蘭兮」とあるのを、よま借り用いたもので、王逸の注に「光風とは雨已み日出て風ふき草木を光るを謂うなり」と釋し、轉蕙沍蘭を「文選」の五臣注に「日光風氣、蘭蕙の葉に轉汎す」と解くので、

と伝へる

その意は明らかである。漢の劉歆が著し晉の葛洪が算めた日西京雜記に「望遠苑には自ら玫瑰樹生ず、樹下に首飾多し、首飾一名懷風、時人あるいはこれを光風と謂う。風その間に在れば、常に蕭蕭然たり、日その花を照らせば、光彩あり。故に首飾を名づけて懷風となす。茂陵の人、これを連理草と謂う」とあるを参考してよいであろう。
様も一つとよむのは普通の訓ではあるが、別に機がよんで、それをまた盡く象翁の意をふくみ、撐天地は滿天地というほどの意に解せられるから、ここでは拙訳のよう考へてきてよろう。わが六如上人端隆の句葛原詩註に「埤地、撐地」の説がある。里は、水と同じ緘韻だが、暖霧の句末の地は寧韻の文字である。

軍装宮妓掃蛾淺
搖搖錦旗女城曠

武人のよそみいさこつした宮妓たちは眉を淡くけき、ゆらゆらはためく錦の旗は夾城の路がむつとむせかえらばどに林立して進む。

中夏で婦人が騎乗することは古くには絶えてなく、六朝の末ころに胡俗にならうて騎馬するものが出た。こゝでは小林女吉郎博士の句「淺唐古俗と騎器士備」にくわしい。これが唐の玄宗の開元天寶にいうて盛行したことは、杜甫が揚貴妃の母の「凝國夫人」を詠じた詩に、

後國夫人は 帝王の恩 こうむり

あかときを 馬馳せて 宮門に入りぬ

顔をけがすと 白粉もつげんとはせず

眉ばかり淡くけき 至念に もうでけるかし

と、い、また「髪頭は哀しむ」に

掌前の采女らや 子筋たばさみ

白き馬 嚙み鳴らす 黄金の鞆

身を凝えし 天仰ぎ 雲のべを射て

「い、こりと笑ふは 塵ちくま鳥の雙や

とうたうによつて明らかである。以後、皇帝が遊樂のため行幸するとき、これに従う宮妓がくばしは軍装したようである。こんにち宵塚の少女の男装を愛する人があるように、當時しよの姿態が賞美せられたものである。賀の詩の「掃蛾淺」の字面が杜甫の「淡掃蛾眉」に由来すると、ほとんども疑いがない。なほ、「後國夫人」は賀とほぼ同時の張祐の集にも見え、「詩は淺露なる」と少女の姿に類せざるに似たり」といふ注家もある。もしそうならば、兩詩中の語の相似は偶合であろう。

夾城については平岡武夫氏の「長安と洛陽」の説が簡明であるので左に引く。

六輿は、大明宮から興慶宮に至る夾城のことを記している。冊存元龜(卷十四)唐會要(卷三十)は開元二十年六月に、大明宮から芙蓉園まで、東の外郭城に夾城が作られたことを記している。これは大明宮に在る天子が、興慶宮または芙蓉園に行く時、人を駈がせることなく往來できるように作られた專用路である。夾城については六輿は「夾郭城」といひ、雪履漫鈔に述べる「宮大防の題記は「附外郭」といふ。この通路が複道すなわち高架道であり、磴道すなわち石たまたみ道であったこと、通化門を通過してゐること、これらは、いふ所の記録と一致してゐる。(中略)この夾城は貞元十二年八月に廢けられたことが冊存元龜(卷十四、十三)唐會要(卷三十、十七)に見えてゐる。(中略)元和二年六月に、夾城を新築し、通化門を開き、晨輝樓を開いたことが、冊存元龜(卷十四、十三)唐會要(卷三十一、十七)葛唐書の憲宗本紀に見えり。

元和二年の新築は實が「十二月築罷」をつくる前二年である。これは夾城には一種の受着を以つて、たゞりで、「殘絲曲」にも、

枝重柳の葉は老いて 鶯や 雛をばぐくみ

幾人の経遊 たえだえに 夢峰 歸りく

緑の鬘の少年と 金の鏡のたふやめと

縹の玉のさかすきに 琥珀の酒は 沈むかそ

花さく夢 暮れぐわに 春まかりぬと

はららぎし花 また起ちて

輪の實の葉 散りいそぎ かかりも知らに

沈どのが録たる録かし 夾城の路

と歌うのである。

曲水飄香玄不歸

梨花落盡成秋苑

曲水はすなわち曲江池であつて日劇談録に「もと秦時の隋州、開元中 疏鑿して勝
境となす。南に瑩雲樓 芙蓉園より。西に杏園、慈恩寺より」といひ、宋の聖史の句大
平寰宇記に「漢の武帝の造るところ、名づけて宜春苑となす、その水の曲折すること
廣陵の江に似たりあり。故に名づく」といふ。長安の南部にあつて、玄宗がことばにこ
ろ愛してより、長安へ人士の遊樂の地となつた。サキハひいた杜甫の「江頭は哀しむし

の江がすなわちこゝれである。

さて曲江の水が香ぐわしい、みずわをううへて露い去れば、いばや歸ることはない。そうして、梨の花を散りすぎると、すべては秋の葉のように蕭條たるすがたに化してしまふ。

下にけなく挿みされた「曲水飄香」の四字が、前の八句をふし抜し、つづく「去不歸」で舞臺を一瞬する。この句は韻をよまぬ。無韻の句で前後をきつぱりと区切り、「梨花」の句を、前の詩句にひくひく句、八春暈から遠かけつゝ、一變した秋景に讀者の目を見はらせた句の末の「苑」の字で、「軍裝」の句の淺、「搖搖」の句の暖と共鳴させ、無限の餘韻をひかせる。心に、限りである。この三字、通韻ながら、淺は鋭、暖は早疾は阮、韻で、やはり別の韻である。今日われわれには賀が口ずさんだときの各句の微妙な照應の實際は知りうべくもないが、巧緻きわまりない構成の全体を綿密に味わっている。その韻律の、生きたあつた目のすがたが彷彿として幻出するのを感じて。

この詩、いちじろしい要素として、仲夏の詩の根柢に普遍する推移の感覺を指摘することができるであろう。だが、同じく推移の感覺から生じた劉希夷の「年年岁岁花相似、岁岁年年人不同」とこの詩とをくらべてみるがいい。賀の詩がことに即物的であり、らに主體的であることが知られよう。相違が、それそれの作者の實質に歸せらるゝはいうまでもないが、兩者の間には杜甫という偉大を凝視の詩人の存在することを顧慮しないわけにはいかない。両詩についていえば、その間に杜の「江碧鳥逾白、山青花欲然

今春看又過、何日是歸年^レ。ヤ「哀江頭」をふいてみれば、賀と甫との距離が、劉と杜とのそれにくらへ、かに近いかがわらるるでよろう。賀は少陵について一語もふれはいたないが、別稿でのべた系譜上の親近が、賀を無意識に杜甫の詩法に近づけていた一つの例を、ここに見ることができ、いてよろう。

四月

曉涼^{あき}し 暮涼^{くれ}し 樹は 蒼^{あざ}として

山^{やま}のみの 濃^こき緑 堂^{どう}の之^のに 出^でやけし

依^か微^すに香^かり 小^こ雨^こは 青^{あお}く 氣^き盛^{さか}らい

賦^ふの華^ははた 蝶^{てつ}花^はや 曲^{まが}路^ぢの門^{かど}に 照^てりはけ

金^か塔^たをひたす 聞^き水^{みづ}は 碧^{あざ}滑^{なめ} けらぎ

土^{つち}の老^{おい}りし た^たたきい 沈^{しづ}重^{かさ}く 鶯^う飛^とぐしをなし

地^ちに墜^おちし 紅^{べに}と 杖^{つゑ}に 残^{のこ}りし 花^{はな}等^ら ほの暗^{くら}くして 参^ま差^さかたみや

曉涼暮涼樹如蒼

千山暮錦生堂外

何の奇もない語をつらねながら、初夏の爽涼を、これほどいきいきと寫した句を、
わたくしは多くは識らない、曉涼の語についていえば、慮照郡の「陳倉に至つて曉晴に
景色を望む」に「拂暑 飛傳を馳するに、初晴の曉涼を帯ぶ」とみえ、射牧の「西山草
堂」に「後嶺に微雨あり 北窓に曉涼生ず」があるが、い下れし賀の句の前では顔色を
失う。

樹如蓋については、吳正子が『西京雜記』の「太液池の洲上に樹一株ありて、これを
望むに童童として車蓋の如し」の語を注する。わたくしの檢した明葉曆二十年季刊日漢
魏常書に收める同記にはこの一條をみ下、別に「終南山に離合草多し。葉は江蘇に似
て、紅と緑と相雜わり 莖は皆を紫色にして、氣は露勃の如し。樹より直上下。百尺、
枝無し。上は藤條を結んで車蓋の如し。葉は一は青 一は赤。之を望めば斑駁して錦繡
の如し。長安には之を丹青樹と謂い、亦た華蓋樹といふ。亦た熊耳山に生ず」なる記事
がみえり。いかにも賀の好みそうな語で、「車は齒の如く 松は蓋の如し」藪の小蓋
「春熟に鶴蓋を張り、兔目 官椽小蓋」春歸昌谷などの句も、そこいらから得た感情
をこめていふのではないか。似た文中の離合草は、樹蓋とばかりわたりないけれども、
賀が『西京雜記』を愛讀したとすれば、腦裡の「車蓋」の語には常に「離合草」×イ×イ
ジが結び合つていたに違ひなく、「四月」の詩を味解する上にも、その結合が重要な伏
線となつてゐることに留意しなければならぬであらう。

依微香雨青氛盤
扇葉蟠花照曲門

はたして、かすかに香氣を帯びた雨が、青くけぶっているのである。香雨を注家のひとりには「雨の花間より墜つるもの、故に香あり」といい、他のひとりには「それでは下の青の字がおかしい予は花のふることを雨といい、その落花には青い葉をまじつて見えるの言うのではないかと考える」という。いずれも香を花にのみ結ぶのだが、實のうたつたのは、たぶんそうではなく、細雨に混つて青葉がいつせいに匂うのである。初夏に雨中の林間を歩いたひとなら、この匂いに何の不思議も感じないだろう。そうして、その匂いを帯びた雨が青く見えることとまた普通のことである。奇とすべきは、むしろこの句に彷彿する女性への心算である。抜けるように色白く、ややしめりをあびて青くかげらる遠い肌膚が、依微としてほのめき匂うではないか。

そうして、じつとりと厚い葉、うすだかく盛りあがる紅の花が、曲り路の門べに燃えているのである。この暗喩は、詩を讀むほどのものならば、一瞬にして把握するであろう。

陳本礼はこの章を釋して「これ羅浮の夢を再び尋める香を咏ず。時は孟夏に當り、樹陰は蓋のごとく、濃緑の千山はすなわち大いにこれより前の翠羽明喙の時とは非えり」といい、三四句に注して、「途中依微として香氣の青氛より落ち来るふるかごとし。細

かたこれを寫むるにすなわち知人ぬ。これ厭葉は狹邪の熟邊にして、蟬花は門裏の人の家なることとをいふ。詩中の幻影をほぼとらええたものと云つてよい。文中にみえる賢敷の夢とは、柳宗元授と傳文を龍城録に「荆師誰酔いて梅花の下に想う」と題する次の記事をさすのである。

隋の開皇中 趙師雄、羅浮に遷る。一日、天寒く日暮れ、醉醒の間に在り。よつて僕車を松林の間の酒肆に憩わしむ。傍の舍にひとりゝの女人の浣粧素服せるを見る。出でて師雄を遇す。時にすでに昏黑なり。月色に對して嚴かに明るし。師雄これを喜び、これとともに語る。ただ芳香の人を驚うを覺ゆ。語言極めて清麗なり。よつてこれとともに酒家の門を扣き、數杯を得て去いとれに飲む。しばらくして、ひとりの綠衣の童來り。笑歌戲舞す。また自ら觀るべし、しばらくして酔いて寢ぬ。師雄もまた惘然たり。ただ風寒うして相驚う。これを欠しうして時に東方已に白し。師雄亦ちて視るに、すなわち大いなる梅花の樹下により。上に翠羽の啾嘈して相伴なりあり。月落ちて參橫たう。ただ惆悵するのみ。

賀の詩を羅浮の夢を再び尋ねるものとするのは極めて妙ではあるが、ただ龍城録には柳氏に偽託した後代の書なること、四庫全書總目提要に説く通りであつて、ことにこの話が、いふれごとく蘇軾の「梅花」の詩の「月下に縞衣來つて門を扣く」から作

爲せられたものとするは、時代錯誤の甚しいものとなる。陳氏もまたただちに兩事を結びつけようとするのではなく、頌の詩に描成する幻影の女性を舞浮夢中の梅花の情のことき女人とみたまでであらう。

金塘開水搖碧漪

金塘とは、後漢の劉楨の「公誦」の詩に「芙蓉之華を散じ、菡萏は金塘に溢る」とつたうがごとき池塘をさす。鏡のように美しい金色の池の閑静な水が、ふいにゆれりと幻影は消え、紺碧のさざなみが波紋をえかくのみである。

老景沈重無驚飛

夢さめてたちかえつた現の暁をむかえるものは老いた春の重くよく沈んだすがたであつた。かつてはともしに樂しんだひとを前にしても、もはやとびたつさまも見せぬ。

隨紅殘萼晴參差

地におちて泥にまみれた紅の花と、なお枝にのこつて花びらを失つた花ぐきとか、ほ

のぐらゐ暮景のうちには、ちぐはぐなわびしさを感じて、たがいに面をむけたげに、うちくちくちくしているのである。

ヨーロッパの民話には、水鏡が夢と現実との境をなす物語が少くないようである。賀の詩の金塘開水搖碧漪がまさにその役目を果たす。盛唐の詩人王維が十五歳で作った友人の雲母の障子に題すには

君が家の雲母の屏風

わが庭に向けて開けば

山も川もおのず入り来ぬ

繪にかきしゆえにはあらず

と歌つて、鏡のような雲母の屏風に自然がみずから進入してくることをいい、ヲ教して岐王に九成宮を借して暮を遊けしむ。應教には、

とばり巻けば林泉おのづ鏡に入りぬ

と、同一趣をのべて、世界がわがうちに入りくる不思議を指し示して、後年ハコ山河は天眼の裏、世界は法身の中なる頓悟の境をひらく初地を成し、これまた鏡の不思議に

着目した好詩だが、賀の水鏡とは異なる。母詩經「小雅、四月」の「彼の泉水を相れば、載ち清み載ち濁る。我れ日々に渦に構いぬ。曷か能く觀けん」や「楚辭」九歌、湘夫人「沅、芷、澧、蘭あり。公子を思えども未だ敢て言わす。荒忽として遠く望み。流水の濤波たる觀る。靡け何すれを庭中なる。蛟け何すれぞ水裔なる。朝に余が馬を江車に馳せ、夕には西遂に滄る」などを強いてその發想の原據に據することにしてきぬてはないてあるか。やはり賀の特異な詩觀によつて見出されたものとするのが慥かである。仏蘭西詩壇の鬼才といわれる Jean Cocteau 氏もまた、その映畫の中で水鏡を愛用するか。賀の用法の微妙には及ばぬように感ぜられる。

五月

厭王 簾を押さへ
 輕敷は處門を籠しめ
 井に汲むは 鈴華の水
 病に織る 鴛鴦の紋
 同雪 舞い 涼しき殿
 甘露 洗く 空の絲を

羅袖 ワスレ ナをがら 細翔り
香汗 カウ 沾 シ 宝室 ホウシツ なすし

雕玉押簾上
輕穀籠虛門

陰曆の五月は盛夏である。窓の戸を除いて簾をかけ、門の扉をひらかずにはとうてい
凌ぎがたい。雕玉は「斐詰ゆ」九歌、湘夫人に「白玉を鑲となす」という白玉にあた
り、いけても掛軸を安定させたため軸にかける鑲めの玉の美しく彫刻を施したものを、
ここでは簾にかけたと思えばよい。輕穀は透きとあるようにうすい絹のカーテン。それ
を虚門すなわち開けけらった入口は、ためである。

井汲鉛華水
扇綺鴛鴦文

その涼しげな官室にすむ女性が、金井から冷たい水をくみあげて化粧し、扇に鴛鴦の
文様を織る。扇織鴛鴦文とは、舞扇をつくらせることをいうのであらうが、鴛鴦がこゝと
に男女相愛の鳥たよこほいうまでなく、また女性は扇でしつてあゝのれの感情をか

したりあつわたりするこゝの巧みなることは、古今東西かわらぬのであるから、この織の字も、どのような色模様を織りなしたもののやら、しれぬことである。

迎雪舞涼殿

甘露洗空緑

化粧した女は扇を手に、涼しげな舞臺で、吹雪の降り亂れるように衣をひろがえして舞う。甘露の雨は空の緑にそそぐ。

霞袖從徊翔

香汗露寄寮

うすしの袖はひらひらとめぐりとび、香はしい汗が寶玉の電粒みに肌をうるおす。甘露洗空緑をそのままに、雨の醒めるような詩。ことに香汗露寶電は、白い柔肌にふつと噴き出した汗の玉の透明を、まのあたりにするようである。女は恐らくひとりで舞ったのではるく、詩には姿を現わさぬ青年ともしした、奇異に甘美な舞だったためあろう。

この作は、前後兩段にわかれ、前段は門と紋に、後段は縁と堂とに押韻し、各聯は嚴

密を對句でもつて構成し 第一句が鉛華・涼殿 露袖を喚び、第二句が鴛鴦 空緑 香汗を起こし 露が洗をうけ 従が舞より引き出されるなど、字字句句を互いに照應交感させて、じつに見事なパターンを織りなしている。あるいは少年の戀情が磨き上げた一顆の碧玉としいえようか。

六 月

生翳 裁ち
 湘竹を伐り
 岫の疎霜はらい 竹むしろ 秋の玉敷く
 炎尖たつ紅の鏡の 兼に 開けそめて
 車輪のことき帯の おおぞらを徘徊るは
 赤帝 啾啾と 龍を駆けりて けたし來れる

薄絹の生地を裁ち、湘水のほとりの斑いりの竹を伐り、薄絹でうちかけをつくり、霜をふいたように真白なそのうちを、竹をうけ、竹で簾をつくり、秋の玉をならべたようにその竹むしろに臥す。簾は、竹の表皮をうすく細くさいたものを織つたむしろで、のち

の「七月」に見えろ花笠は、その織り模様は花をえがいたもの。渝州の名産で、唐代には貴重されたものらしい。帳についてむつかしい考證もあるようだが、ここでは要するにネグリジエカナイトがウムのたぐいとみええげまちなかない。

裁生羅

代湘竹

帷拂疎宿葦杖玉

炎炎と燃えさかる紅鏡のような太陽が、東方から上る。コロナが車輪のように勢よく廻轉して、太陽が太空をめぐるのは、それは夏の神の赤帝が、ヒシリ、ヒシリ、龍に鞭くわけて、颯けてくるのであらうか。

炎炎紅鏡東方開

暈如車輪上徘徊

咄咄赤帝騎龍來

赤帝は祝融氏で、火の神、夏の神である。人面獸身だとする説もある。それなら、いよいよ妙で、赤帝した獸身をむけて、上げて馳せくる神が、これから何としようとするのか。

は、改めて説くまでもないであろう。

七 月

星くすは 天^{そら}の端^{はし}へに 冷え
 露^{つゆ}滴^たき 圓^まなり 盤^{いた}の中^{ちゆう}に
 妙^{たぎ}しき花^{はな}々は 木^き末^{すえ}に ひらき
 衰^{おとろ}え、蕙^{わい}ぐさ 空^{そら}に 愁^{おも}いぬ
 夜^よの寒^{さむ}は 玉^{たま}敷^{しき}の 砌^{せき}のごとく
 池^{いけ}の蓮^{れん}葉^は さるがらに 青^{あお}き 銭^{ぜに}かじ
 厭^{いと}ふや 舞^まひ 袴^{はかま}に 薄^{うす}き
 ややみほゆ 花^{はな}窓^{まど} 臥^ふするに 寒^{さむ}き
 曉^{あけ}の風^{かぜ}いたる 何^{なに}ぞ 拵^{しな}拵^{しな}
 北^{きた}斗^と星^{せい} 闇^{くら}干^かと かなふきしはや

星依靈詠冷

露清盤中圓

ほの白い天の川のなきさに、冷えびえと光をはなっている星。銅盤にしたたつてつぶ
らな露。

酒氣に熱した宴席をのがれ、露臺に出た舞姫が、思ひがけなく見出した、静かに美し
い夜景を、うたつたような詩である。

好花生木末
衰蕙愁空園

眼前まへの水々のこすえに美しい花はな、人氣のない園に、むろしく匂う草々。

天の川を見、盤中の露を見、木末の好花を見、地上の衰蕙を見る。といて、舞姫
がある、は仰ず、あるいは侘したのでは、ないであろう。むっさり坐つて、なにも見
るおもしろなく放つた視線に、それらがあのおのずから映りてくるのである。そのような位置
は、さきにわたくしめ推量した露臺であるにしては、かならず不樓上のそれ、であるに違
いない。

夜天如玉砌
地蕙極青錢

夜の空は玉をしきつめた砌、すなわち石だたみ。池の蓮の葉は、小さく小さく、丸い青銅の銭を撒きちらしたようにみえる。

極青銭を注家は、はじめは小さく、た蓮の葉が七月に存ると極めて大きくなることだ、という。蓮の生態に即していえば、そうに違いないが、この詩を解するうえでは、たぶんあやまりである。青銅銭は小さいもので、その小さく青く丸いすがたに美しさを見出しているのである。それを極めて大きい姿と解したのは、兜るしもの位置を顧慮しなかつたためであらう。池からかなりの距離をおいた檣上にながめるならば、灰白い星あかりの下に池の蓮葉は、まさに青銭のごとく小さく小さく見えるのである。他の注家は、この句の参考として杜甫の「溪に點じて荷の葉は青き錢を疊ひ」を引く。「絶句漫興九首」の七で、これをまた、かなりの高みから、溪間に小さく點々とかさなりあつた蓮の葉を見てうたつたものに違いない。

賀の詩の好花より青銭までは、あるいは壘中の雲に映じたそれとも解しうる。賀の視線はしばしば微細處に對集し、そこから奇異な超現實の風景心景を抽出することを好んだからである。いすれにしても、この極が極小をさすこと、ほとんど疑いない。

僅歎舞衫薄

稍知花簾寒

ふけらにしたがって、いつか、夜の氣もひいやりして、思わぬ、舞衣のえりをかきあ

わす。坐つた竹むしるも、やや肌につめたい。

暖風何拂拂
北斗光闇干

さつと吹く風には、もう、暖の氣配。そうして、いつのまにか傾いていた北斗星の
何とくらさらと輝くことか。

拂拂は、ひたひたひたひたと風の吹くさま。闇干は、掃斜するさま。とし。かがやくさま
ともいう。ここでは傾きつと輝くさまをさすのでよろう。

さて、この詩、さきになたくりは、宴席をのがれ出た舞姫のうたう體に詠じたとい
たが、もとより詠ずる人は李賀である。十二月樂辭のこけまての作りごまをうらいつても、
この詩にかれの戀情がうたわれていないはおぼしい。それならば、舞衫とはいつても、
その主はかれて、愛する人に館にひそかに近づいたけれど、きびしく聞されたその内
には入ることかなわす、花はかくわしく眼前で匂うても、さて取ろうとすれば、手のと
どかぬ木末に生じた花であり、ふのれは人氣のない園中に夜露にぬれて燃える衰意、と
見立てたものとしとれ、また、「五月」の詩のように、ふのれとやらんで坐つた「舞姫
のみを詩中に之がいて、おのれの姿は晝面から消しておいたのであるかしれぬ。

八月

嬌居こゝろの婦をは 長き夜を 怨み

ともしなき旅人け 夢に 家に歸る

簾まゆべによりて 蜘蛛は 絲を織り

壁のえに 燈火あかりは かげをくらくす

簾の外に 月の光け かがやき

簾の内うちに 樹の影は 斜なり

悠悠いひいひに飛りたる 露つゆの姿

おろたゝるたに 點ちり綴りめし 池いけのえの荷葉はぢ……

八月は中秋、月が清く麗わしい季節である。憂いなき人たちはその美景を遁って、さよふこととをたのしむてよろう。だが、おなじとくに浮れさせふこと能わぬ人もある。

嬌妾怨長夜
獨客夢歸家

嬌妾、すなわち夫を安らげた女にと、てはいたおらに長くたつた夜々、肌さぶしい冷

やかさは、たえがたいであろう。留の蓬岳は妻をうしなつたのちの秋を「悼亡」に、

かさね着のなしとにおうね

たれとかも共（案）に被かん

かおくへきひとなき床い

なにしかし月のみ澄ゆる

い宵かえり枕べみれば

いたずらにひろき敷きぬの

すがすがと塵つしり

虚（案）しき室（案）いかなしひ吹き來

と歌うたが、つつましく文字を識ることさえ憚つて育つた女には、あつれのかなしみを詠いて心をやるすべしなのである。

また 月てらす秋の夜の 旅人にことになびしく しきりに夢にふるさとの家に歸ることば、たとえは唐の鶴況の「曉角思歸」に

ふるさとの 黄ばぬる木の葉 青苔（案）あおい散ろうを 見しか
夢さめぬ 城のほとりに曉つぐる かなし 角笛

この夜はとほと 胸くだけ あくがれしひと 見えたりき
たちていふれば 朝月夜 あわあわとして 影ぞ さまよう

とうたうことによつても普遍なることが知られる。

倭箬蟲絹絲
向壁燈垂花

軒べに蜘蛛が巣をかけるのは、戀しいひとのわがもとに歸さしむし、と借せられ
の権徳與の「玉臺體」に、

昨夜を 解けし帯 けや

ささかばの 今朝の いとなみ

おしろいを はた 捨てたわつ

夫の 近く 歸りますや と

とうたう、物が古今無事 卷二十にも「物が背子が来べき宵なりささかばの蜘蛛の振舞
かねてしるし」とみえる。だがすでに来るべき人を失つた女にとつては、そのふる

まいが、嘲りにみえろほど、つらいおれいを誘ふことであらう。
夢にふるさとに歸つても、愛する人の見えぬうちに醒めてしまつた旅人か、それ以外
には對するものもない壁に、ほの暗く消えさうになつた燈のかけをみつめる侘しさ。そ
れを拖くのが、後の句である。

簾外月光吐

簾内樹影斜

ふいに、簾の外に圓い大きな月があらわれ、簾の内側に樹の影が斜にかたむく。鬱屈
したたましいの眼前に、山越の弥陀があらわれて、かれを孤独から解き放つたかのように
な、美し、一聯である。簾内を「北宋本」は簾中とするが、中N₁の音は、この句の
もつ微妙なパトスをそこなうように感ぜられる。いま「元刊本」に従う。

悠悠飛露姿

點綴池中荷

他の字はかぎりひろい意義を内包するが、うれしき帯びた、しずかな、多い、などの
義を包めつつ作者はここに用いているようである。二句をつながるものとみて、「露の氣

は悠遊とはるかには飛び、池の荷葉にまろくほちほち結られてゐると解く注氣がある。
恐らくそうではなく、「悠遊たる飛露の姿と 池中に點綴せられた荷よ」とほどの意でよ
ろ。

九 月

離宮には 蟬すたきて 水のごと澄みたる天や

竹黄ばみ 池冷やかに 芙蓉は 死れぬ

月魄は 産の金鐘 脈脈と 光あまねく

涼き苑 ひとけ産き庭 空しく清白

露あく花の 飛飛にて 風は 算草

翠錦なす水草 潮遊れて 層道に 満る

時刻つくる誰人 暗うをやめよ 曠の瑤瓊みこしかほ

鴉啼きて あわれ 金の井のほとり 疎桐のけの ふりにけらすや

離宮散螢天似水

竹黄池冷芙蓉死

もうほかではめつたに見なくなつた螢が、この離宮では、おちろこちらに明滅して
て、夜空は、水を流したようだ。

竹の葉はすでに黄ばみ、池は冷やいで、芙蓉はすでに枯れている。

西句は不思議な美しさをもち、その美しさは *magical* な美しさといつてよいであらう。
フ。ことに第三句は、青かるべき竹が黄であり、生命の象徴としようべき芙蓉が死んで
いる。すなわち、相及した觀念を含む語を結び合せることによつて、諷刺的な美しさが生
れているともいえる。だが、ことなる觀念の組み合わせだけで、この句の、ひいては句の
詩の多くに共通するネガテイヴな美しさを、解くことはできないであらう。さらに、
うさし隠微なところには、原因があるように思われる。その一つは、この詩の前半が、天
を鏡として、そこに映じた虚像的世帯を描いていることが、考えられる。丁度バック
ミラーにうつる風景が、實際のそれよりも鮮明にふくらんで、みるみるうちに鏡の底に
吸い込まれ、見る人に奇妙な消失の感情を興える、あの効果が、この詩にはある。いま
一つは「水」と「死」の二字を組み合わせて押韻していることである。

同じ「十二月樂辭」の「二月」の終りの二句は「津頭送別唱流水 酒客背寒南山死」で
あった。「雁門太守行」では二句隔ててではあるが「半卷红旗臨易水 …… 提携王龍
爲君死」。「浩歌」では「帝遣天兵後海水 …… 彭祖巫咸幾回死」。「帝子歌」では「涼
風雁啼天在水 九節菖蒲石上死」。「湘妃」では「筠竹千年老不死 長伴秦娥蓋湘水」
「中興」では「黃河水合魚龍死 …… 百石強連上河水」。「神絃曲」では「青狸哭血察狐

死、西工騎入秋潭水」と、それ押韻しているのである。「白虎行」にて詩中にくたひか挿韻しつつ、その前後に「無人爲決天河水」「朱旗卓地白虎死」の二句をしち、「老夫採玉歌」では「身死千年恨淺水」のように「水」で押韻した句中に「死」字を含む。

このほか「水」を韻字として持つ詩に「春坊正字劔子歌」「唐兒歌」「三月」「金銅仙人辭漢歌」「老夫採玉歌」「公莫舞歌」「夜飲朝服曲」「昌谷詩」「夢多懷子」「塞下曲」「名將軍歌」がより、「死」を韻字としてもつ詩には「章和二年中」「平城下」「上之回」がより、水や死と同韻の字をわち上聲紙韻の、文字を韻字として持つ詩に「綠草對事」「閨月」「追和何遜銅雀妓」「安樂宮」「石出暖」がある。二百五十首に滿たぬ作の約三十首が紙韻の文字で押韻されていることは、類のその韻の愛好がほとんど本能に近かつたことを示し、そのうちことに「水」と「死」とを並びかつこの二つを同時に組合わすことの多いのは、單なる嗜好をこえそののと考えるいわけにはゆかぬ。

紙韻の文字の韻母は、一、尖り軌る音である。さらに水の聲母も、死のそれとは、いすれも閉じた齒の間を擦りぬけてきた鋭い清音である。すなわち水と死の、音の中では細く、鋭く、危峭な方向にあるものと、いってよいであろう。そのような方向にある文字を以って押韻された詩は、他にいかほど豐麗な意味を含む文字がちりはめられようと、一篇の感情は、細く、鋭く、危峭なものとならざることをえない。賀の詩八首しいネガテイウな感じは、かわの好む韻と聲くかかわるもので、「九月」の詩の初二句の

奇妙な美しき、このあたり、その秘密を、しつのであらう。

そうして、このように奇異な顔の流れる由におおれた黄なる竹はかれ自身であり、死んだ蓮はその寒人であつて、愛のいとみみの後の死の相のうちによこたわるとたり、疾らけなすかたを描いたものか、この一首であるかもしれぬ。

月鏡金鋪光脈脉

涼苑虛庭空澹白

金鋪は、金色の獣環すなわて、*gold ring* の聖金で、それを綴るとは、月がまらて金のノツカアの産金のように空にとしつけられて、とほどの意であらう、脈脉も多義を含むか、ここではさんさんと輝くさまをさすようである。そうして、凄涼として人の氣脈をいこの苑庭の何としらじうとくしていることが、というのである。

露華飛飛風草草

翠錦爛斑滿層道

花にしとどにおいた露、草をなびかせてそうそうと渡る風、道をふみふみしてにはびこつた木草は、緑に、黄に、紅に、さながら翠錦をひろげたように、眼を奪うきらびやか

やだ。

露花飛舞風草草は、足のふみばれたいほどにびっしり露ふいた花のさま、草草の葉先を一本一本なでつけるようにわたつてゆく風のすがたが、そのものとなりてそこにある。作者の手をはなれて生きている。

鶺鴒人 鶺鴒唱曉 瓏琤
鶺鴒金井下疎桐

遠く聞えるのは、あれは時を告げて歩く人の聲、あゝ時を告げるのはもうやめるがいい。かすかに、あけ方の光がさしそめて来たてはないか。鶺鴒が啼いて発したつ。と、こがねの井戸に、すつかり枝のすけてしまふ、た桐の梢から、ばさ と葉が舞、おちる。鶺鴒人は、時刻を告げる役人。瓏琤は明るく透明なさま。鶺鴒は、金井け黄金で飾った井戸である。鶺鴒人には、人のさまさまな頼いに行かかわりなげに時の経過をつげる人間をこえたものの非情なイメージをいくみ、愛のさめてゆくことを自ら否定しようとしたから、それを否認なしにみとあさせられる男の心が、鶺鴒の語、瓏琤の語にほのめき、鶺鴒は、すてばうとくたりほいめた愛に、決定的な打撃をおたえ、残るわすかめ愛をい運葉と落としてしまふ相か、下疎桐にうたわれている、ともし、いえなくはなし。男は去られたのちの女のをげきをうたうのが、次の詩である。

玉の清壺の銀の筋は 稍ややに 傾きなすみ

釭花は 夜を笑みて 消えみ消えずみ

あらし霜 斜に舞いて 羅葉につきめ

燭龍の口は ふたつらにして たかどの 眠らす

今夜床も 怨み臥す夜は 眠りがたへて

金鳳のつづれの衣 いたすらに はたえに寒し

長き眉根と 三日月と たぐえんに いずれかまらき

玉壺銀箭辨對體

釭花夜笑澄幽明

玉壺銀箭とは水時計である。時代によって形態、構造をことにするようだが、共通するところは水を満たした壺甲から、からの壺乙に、ほそい管で水をみちびき、壺乙に目を刻んだ箭をたてかけ、壺甲から壺乙に漏れ出た水の量をはかって、時間をしらすべしのである。その壺を玉壺といい、箭を銀箭といった。箭がやや傾き難いとは 具體的にどのような状態になるのかしらないが玉壺によれば、陰曆十月には水はようやく凍てて

流れ、くくなるので、箭が傾き難いのだ、という。紅花は「八月」の詩におつた燈花と同じ。燈心のさきに生ずる燈えかすのかたまりで、形の相似によつて、燈花とし、丁字頭とし、この花の生ずるとき、きは暗くなり、またぼつと明るくなつたりする、さきの燈垂花、この凝幽明をそはである。

碎霜斜舞上霜幕

燭龍兩行照桑閣

龍、一作龍

氷を碎いたようにあらい霜が、風はふきあげられ、斜に舞つて、つすぎぬの幕にのぼる。飛閣すなわち高い樓閣に二列につらねた龍の形りした燭臺の火も、いたすらに白くらしい。燭龍一本のように燭籠をらば、ともしびの小屋である。

珠帷怨卧不成眠

金鳳刺衣著體寒

長眉對月鬪寒暄

珠のとばりのうちに臥す美女は、心に愁いの結ばれて、眠ることができぬ。金の鳳を刺した豪華な衣をつけても、なお肌寒い。眠れぬまに月にむかひかたかんばせの、

いとさわ長い眉引は、さながらに、そのまろさを月とあらそうに似て、
維句がこの詩の眉目たること、またいうまでもない。

十一月

宮城をめぐれるは 凜として 嚴し光や

白き天より さらさらと ちりおふる 瓊の芳

鐘をたたいて 飲まんかな 千日の酒

身にとふる 寒さをよけて 君の壽 ほかんため

御溝は 氷にとざされて けたし 白妙

かみ火井はた 温泉は 何處にありや

宮城團廻壇嚴光 四、一木作團

白天碎碎墜瓊芳

宮城團廻壇嚴光は瞻目の冬景をうたうたものながら、またつめたくな、氷ふのれを寄
せつけようとして女貴女のさよとし聞えぬことほない。西方の詩人に「青空士官が帽子の
飾毛をまきちらす」といった句があつて、雪をうたうたものだと聞くが、白天碎碎墜瓊

夢の發想にも接を一にするものがあるように感ぜられる。

搦鍾高飲千日酒

歌御凝寒作君壽

歌御、共宋本作却天、今從宋蜀本

中山の酒家に 一たびふふめは千日のあいた酔いを保つといふ酒を減していた。劉元石なる男が、これを試して家に歸り、酔い發してねむった。いつまでたつても醒めないので、家人は、死んだかと思つて、泣くなく、心を慕つた。三年たつた。酒家の主はふと思ひ出して、劉家を訪ね、事情をきいて、塚にゆき棺をひらくと「あち、好い氣持だ、たしと伸びをして、元石が起き上つた。そんを誂が、晋、張華の接と傳える曰博物志にみえり。詩中の「千日酒」はこの故事をふまへり。これちるがゆえに「歌御凝寒作君壽」かピンとひびくのである。

御清冰合如環素

火井邊泉在何處

宮城の五行りがすなわち御清である。冰の字は共宋本には泉とし宋蜀本には水とする。注には「一に冰に作る」とする。いすれても通るが、ここには御清の水がすうかり凍る。

てしまつて環になつた白妙のきぬのようだといいのでよるから、氷をとつた。宋蜀本の
水は、あるいは氷の點が消えたのでよろうか。

火井温泉は六朝宋の謝惠連の「雪賦」に「火井滅び、温泉冰」の句があるに據つた
ものであろう。唐の李善は「博物志」を引いて惠連の句に注して「臨邛にある火井
は諸葛孔明が往つて視たのち、火がいよいよ盛となり、盆に水を入れて煮ると鹽がで
た。のちに人が火を投げ入れたところ、火井の火はきえ、いまに至るまで燃えない。

温泉については晉の常璩の「華陽國志」に「邛都縣に温泉穴があり、冬も夏も熱し、雞
や豚を煮うゝ温度で、下流に浴すると疾病は治癒した」といふ。

「雪賦」にもいろいろに、大雪は瑞祥とされる。さきの作君壽と、それをきかしたも
のといつてよいであろう。漢土のならいをうけて、わが萬葉の歌人も、しばしば雪をこ
とほぐ。ただ齊のこの詩、結句に在何處と他を顧みる口ぶりは、冷たくなつた女にあた
える歌とすれば殊に絶妙だが、またそこには何やら諷刺の氣味がほのめかないもので
ない。

十 二月

あまつひの あわきむかりし あけのいろ さやかになりぬ

ししーいまだ かつらのかげに きえねども
かすかにうごく きのあるて いてはゆるびぬ
こはずでに ひながとなりて ながきよの マリしなるべし

日脚淡光紅濼漢

薄霜不銷桂枝下

依稀和氣排冬嚴

已就長日辭長夜

冬きわまつて、すてに春色のうごきそめた氣融を、たくみにとらえている。いかにも冷たくむごくなつた女でも、愛情がなほ残つているならば、和氣が冬嚴を排せずにはやまぬものである。

結びの句の機智は古今集の「こんとやいはむことしとやいはむし」を思はせるが、いうまでもなく、在原元方よりは李賀の方がふるい代の人である。元方の機智はいまのわれわれからすると厭味たらしいが、賀のそれには、すうりと自然であるように感ぜらるる。

帝の光榮 重なりて

年にも月の重なるや

七十二の時辰 うちめぐり 推し移り

天の官の 玉の瑣 灰ふき飛び

この年の 何ぞも長く 來ん歳の かくは運すや

西王母 桃うつし 施え 天子に 威めけるにや

あるけまた 義氏と和氏 龍の書をゆるべしためか

文王について武王という聖徳すぐれた帝王を その國の初めにしつた周の光榮を四書
經は「重光を宣ふ」としるした。帝にも徳光の重なることかよる以上、一年に月が
重なるて閏月があつてもさしつかえはなからう、と機智を重ねるのが、初二句である。

帝重光

年重時

陰曆では一年を二十四氣にわけ 各氣を三分して七十二候と稱した、一候は五日であ
るから三百六十日。そのよまりの五日餘を賸えて閏月とするのである。當時、氣候の推
移を測測するためには、天體氣象観測官があつて、密室中に十二箇の長短をこことにする

玉の管をおき、葎の灰を管の内端につめた。玉管の長さは十二カ月の節氣と對應して、その節氣に感ずると灰が自然に飛散するのである。

さて、七十二候がぐるぐるとおしめぐり、天文博士の玉の管の灰は十二本ともとんでしまったのに、それに、どうして今手はまだのこっていて長く、來歳のやうてくるのがおそいのか。

七十二候廻環推

天官玉琯交刺飛

今歳何長來歳遠

仙人の西王母が三千年に一度みのるといふ桃を移し植えて天子に獻じたためか、あるいは日輪の取巻和氏が龍のたづなをゆるめたためか。

王母移桃獻天子

羲氏和氏逐龍轡

初二句のあたりで須歌めいたこの詩、句をかたねるにつれて歌々ッ兒めいた口ぶりに、問月などというて一年を一カ月も長くするのは何ごとかと、ゴネている風情である。譯

文のわかりにくいのはわたくしの不才によること言うまでもないが、この詩いたいが、かんに故事を用いて、一ひねりも二ひねりもしているのだから、やむをえない。義氏和氏は『書經』にみえ、秦の時の天文官であり、古代の神話にいう日輪の御者け義知で別である。龍警というからには御者の義知であらうものを、義氏和氏とは「その意を失した」の」という注家いるが、義知と義氏和氏とをわけることが、實は後代のさかしらである。またかりに、唐代の知識において兩者をばりきり區別していたとみるで「馬の字 鹿の字」ということをさまたげぬ以上、あまりきまじめにとる方が「その意を失した」ことにはならぬか。

おわりに

以上「十二月樂辭」の全章を 煩を厭わずに擧げたのは、製作時期が明らか初期に屬するものであること、李賀詩の特徴の種々相が、あるものは明らか、あるものはかすかなから、ここにすてにはほとんとすべて含まれてゐることを顧慮したためである。

王琦の援くところによれば、元のひと孟昶は「李長吉の十二月樂辭を讀むに、その意は新しくして踏襲せず。句は麗わしくして恣意ならず。長短一ならずして、音辭また異なれり」といひ、明のひと余光は「二月の送別に折柳を言わす。八月には明月を賦せず。

九月に登高を咏せず。みな俗法を避けしなり」と評する。語は簡なから、長吉の詩の本質にふれえたものとしてよい。なほ、「月から六月までは曉から日暮までの、「七月」から「十一月」までは夜の、「十二月」は夕たたひ朝の、時間を歌つていて、全章が循環し、「閏月」によつて十二首をしくくつてゐることは、注意すべきであらう。

一年を各月ごとに歌ふことは、時間の推移をその基調とする中夏の詩人の感覺からして當然と考へられようが、實際は李賀以前に多くを見ない。詩經に「幽風の」七月、八月は、農村の行事をほほ一年にわたつてえかくけれど、各月に一章をあててはいない。吳正子の注によれば、漢の章帝に「靈臺十二月詩」十二首があるといふが、管見に入らぬ。古樂存に「月節楊柳歌」があつて正月から十二月にいたり、閏月に及んで各月一首、凡て十三章。民國の丁福保が編した『全漢三國晉南北朝詩』の晉詩卷八に收める。賀の作は章帝の作と「月節楊柳歌」とに倣つたのであらうと吳氏がいふ。あつてはさういふしれぬ。なほ、唐の沈仲章など十人の詩人が「憶長安」の題で、十二月を、一首あるいは二首ずつ分けて、各月の詩を賦してゐる。ただ五月を缺く。

賀のつちには元のひと趙孟頫に「題耕織圖二十四首卷三首攷」があり、清の高士奇に賀の作に追和したものがあり、洪亮吉に「望中十二月詩」十二首がある。これら珍らしい方である。ただ、民毅、俗語には十二月の各月を追つたものが頗る多い。滿州や朝鮮のそれにも見えるところからすれば、よほど民衆の嗜好に投じたものらしい。もし賀の詩から發展したものとすれば、面白いが、それらの時代や相互關係についてくわ

しく知りえないことが残念である。

賀の作として、河南存試の答案であるからには、同時合格者に題を同じくする作がふたは下である。試験官が出題する行どであれば、當時に一般的を筆存題であったろう、にもかかわらず、他の作をいまに見ないのは、信憑に耐える作がなかったであろう。

中夏の古代の人は唇に深い關心をもち西暦紀元前にすでに『大戴礼』の「夏小正」、『呂氏春秋』の「十二紀」、『禮記』の「月令」などを持つていたのだから、詩人たちはどうしてあんなにこの題材であつたろうに、このように現に存するものの少ないのはなぜであろうか。それはたぶん次のような理由によるのであらう。

「夏小正」などに示される晴の推移や行事の種々は古人の實際的を行為と結びつきずおきていたためにかえつて純粹な感動の対象とはなりえなかったものであらう。實際的を行為をこなれた觀照の場で四季の推移を感じることすら、多くの人には必ずしも普遍的なことではなかつたであらう。まして一季のうちのはじめと中ばとあわりとの微細な變化にきづきこねる記憶にとどめる人は稀だつたにちがいない。

李賀が「十二月望辭」において困難な課題をばたし、その作を千年のちの讀者の常識に堪えしめるものは、かれの事物に對する凝視と、そこから生れた詩法とによるのである。

附記——本稿は四方向『2（一九三三年）』所収の「筆補造化天無功」中の一章を増補したもので、面目を新たにし、やや兎るに堪えようになつたであらうか。一九六三年七月五日。

寒山詩

(一)

原田憲雄 譯注

はじめに

ここに提供しようとするのは、寒山の詩の、比較的信頼しうる本文と、拙譯とである。豊干拾得の作をも收めるのは、兩者もまた寒山の作と考えて差支ないからである。

用いた底本と参考諸本は左の通りで、

(一)内はその畧稱である。

(底本)寒山詩集一卷附豊干拾得詩一卷

昭和三年東京審美書院用官内省藏本刻

本景印

(正本)寒山詩一卷昭和三十三年石井光

雄用正中二年禪尼宗澤刊本景印

(刷本)寒山詩一卷附豊干拾得詩一卷四

部叢刊初集集部所收

(朝本)寒山詩一卷附豊干拾得詩一卷朝

鮮信女抄月心用元元貞二年郭氏刻本刊

(大典)景印永樂大典存本前篇附篇八百

六十五卷民國五十一年臺北世東書局刊

(唐詩)全唐詩民國四十九年臺北藝文印

書館刊

板本については入矢義高氏の「寒山

(中國詩人選集)「寒山詩管窺」(東方

學報)「嶺山李則氏の「正中版「寒山

詩集」について」(大谷學報)の記事で

ほぼ要を盡しているのでここには繰返さ

ない。嶺山氏の紹介された禿庵文庫藏正

中本を未だ見えないのは残念だが豊干拾

得詩の譯注を發表する日までは服福と

得たいと念じている。拙稿では朝鮮本と
永算大典を顔意できたのは幸であつた。

校合には異體字は注しなかつた。廣山
氏がすでにその異同を記しておられるか
らである。ただ、もとの本にない番號を
附したのは、索引の便なると、廣山氏が記
されなかつた朝鮮本、金唐詩のそれをす
でに對照した表を妻慶の手で作製させて
あつたので、加えることとしたのである。
底本の巻頭に掲げる無名氏と閻丘胤と
の序文、朱晦庵の「與南老帖」陸放翁の
「與明老帖」は最後にまわし、閻丘の序
にのみ譯文を附する。この序は撰者につ
いては詳ではないが、寒山論のまときつ
たものとしては早い時代のもので出色で
あると考ふるからである。

筆者が寒山詩を初めて數首翻譯したの
は昭和十五六年のことである。以後、氣

のむくままに進めてきたが、このたび、
すべて筆を加えてその面目を改めた。意
圖するところは、かれのレフログスとパ
トスとを出来るだけ日本文に生かすにあ
つた。無學不文の業であるから誤りのサ
からぬことを恐れる。大方の批正を希望
する。

老師謙山福島先生俊翁は愛蔵の朝鮮本
「寒山詩管解」寒山詩家頌、景宮内
省本、景正中本、島田翰枝本など、貴重
な資料を長期間にわたつてお貸しくださ
つた。また、京都女子大學圖書館・京都
大學人文科學研究所はその所蔵の本の閱
覽を許された。ともに深くお禮を申し上
げる。

福島老師先生は昨年古稀を迎えられた。
在下に拙稿を捧呈し、南山の壽を祝福し、
永年の示教に奉謝するしるしとしたい。

1 正2周2朝2卷2大223

岩をたんだわしの家

人もかよわぬ鳥の道

変にいろのはどなたじやろ

石だいてござる白雲

いくとせかここに住みつき

春と冬とうつりかわつた

さて世の中のおえらがた

名声などは益ないものじや

・重叢我ト唇 鳥道絶人迹 庭際何所有

白雲抱幽石 住後凡幾年 屢見春冬易

寄語鐘鼎家 壺名定無益

・無唐詩注一作何

2 正1周1朝1唐1大268

わしの詩を誦もひとけみな

心をカラリとしてみきをされ

欲ほけは日ましにさつぱり

歯つたことし忽ちまつすく

くだらんことはうっちゃつて

本性におかえりなされ

さすれば今日にも仏の身

急急如律令

・凡讀我詩者 心中須該淨 慳貪繼日兼

絡曲登時正 驅遣除惡業 歸依受眞性

今日得佛身 急急如律令

・須大衆作誦 造除唐詩注一作除遣

3 正3周3朝3唐3大227

寒山の道は おかしや

車馬かようちとこそなけれ

おぼつかを 谷ども くねり

幾重ともし知らぬ 山をみや

八千草は 露に 泣き

一つ松の 風に 吟するよ

みちべに さ迷わば この身

影のほかのたれに 問いなんや

可笑寒山道 而無車馬踪 聯珠難記曲

疊嶂不知處 泣露千般草 吟風一樣松

此時迷徑處 形閑影何從

4 正20周26朝20唐20大63

のんびりしたければ

寒山でゆっくりりどうだ

そよかぜが松ふいて

近くで聴くとますますいい

下にはごましおあたまの人が

のうのうと老子を誂んでる

十年たつてもいぬ気になれず

来た道忘れてしもうた

・ 欲得安身處 寒山可長保 散風吹幽松

近聴聲愈好 下有斑白人 喃喃讀黃老

十年歸不得 忘却來時道

5 正50周51朝50唐51大304

わしの心は 秋の月が

碧の潭にキラキラ澄んでるようじや

くらべようものもなし

わしじやとてなんと言之よう

・ 吾心似秋月 碧潭清皎潔 無物堪比倫

教我如何説

6 正66周67朝66唐67大249

山の中はどえろう冷たいと

むかしからよ 今年だけのことじやない

高根は しよっちゆう 雪こおり

林は いつも 霧を吐いちよる

芒種がすぎたら 草が生え

立秋まえに 葉が落ちる

ここに迷いこんだらば

窺けど窺けど 天は見えぬ

・ 山中何太冷 自古非今年 沓嶂恒凝雪

幽林每吐煙 草生芒種後 葉落立秋前

此有沉迷客 窺窺不見天

7 正14周14朝14唐14大250

眉びきのながき女の

さやさやに美しき佩珠

花のべに鸚鵡とあそび

月かけに琵琶をこそひけ

歌ながく三月をひびき

舞はやくよろず見ゆるる

とことわにかくあらじかし

花はちす寒きに耐えず

・城中蛾眉女 珠珮珂珊珊 鸚鵡花前弄

琵琶月下彈 長歌三月響 短舞萬人看

未必長如此 芙蓉不耐寒

・蛾、底本作蛾、今從正本 珂、書詩注一作何

8 正 21 周 21 朝 21 唐 21 大

ぐんとすましたお馬の旦那

鞭でゆびさすはなやぎ小路

死ぬ日なんぞは来ぬかのように

菩提へわたる舟もつくらぬ

四季ありおりの花は好うても

たちまち黄色く萎れるものじや

醍醐 石蜜 あまたの法味

死ぬまでついに味わえしせず

・俊傑馬上郎 揮鞭指柳揚 謂言無死日

終不作掛航 四運花自好 一朝成萎黃

醍醐與石蜜 正死不能嘗

9 正 206 周 297 朝 257 唐 296 大 41

東嶽にゆかんとおし

いくとせを今に經にけん

昨日来て葛のみち攀じ

途中にて霧にくるし心

徑せばく衣まつわり

苔ぬめり靴ぞすすまぬ

丹桂のもとバとどまり

白雲に枕してねん

・嶽向東嶽去 于今無童年 昨來攀葛上

半路困風煙 徑窄衣難進 苔粘履不前

住茲丹桂下 且枕白雲眠

10 正 258 周 299 朝 257 唐 296 大 42

巖の前にひとり静かに坐る

圓い月が 天に耀いている

萬物はその中にかたちをうつすが
一輪にはもともと照す意志はない

からりとみのす清らかで
まことにいみじくなんにもなし

さて 指さして月を見る
月こそ心の中心だ

・ 巖前獨靜坐 圓月當天耀 萬象影現中
輪本無照 廓然神自滿 含虛洞玄妙

・ 天周本作矣、非、
困指見其月 月是心樞要

わが魔は めでたい隠れがぞ
わが魔は めでたい隠れがぞ

草ふめば 三すじの徑
草ふめば 三すじの徑

歌えば 鳥のよ 聲そえて
歌えば 鳥のよ 聲そえて

法は説けども 聞くひとなし
法は説けども 聞くひとなし

今日の 婆の樹

いくとせを 春となすぞ の
・ 吾家好麗淪 屈處絶醫壺 踐草成三徑
瞻雲作四鄰 助歌聲有鳥 問法語無人

今日婆樹 幾年爲一春

・ 今日大典作月裏
12 正5周5朝5唐5大24

「琴と本とがあるうえに
地位や名譽が何になりましよ

女房に言われて お聲はえんりよ
草にのるなら息子がひくす

夢ほす畑には 風吹いて
池には 魚がピチピチと……

ぼんの一枝あるならば
気楽なわが兼じや みそさざい

・ 琴首須自隨 綠位用何爲 投葦從賢婦
巾車有孝兒 風吹曝麥地 水溢沃魚池

常念鷓鴣鳥 安身在一枝

在大典作住

13 正6周6朝6唐6大 245

兄弟は同じ五郡の住人で

親子は三州出身じや

雁の杳々どはきたけりや

白兔仙人よぶがいい

夢で魔法の瓜もらい

ふしぎの桶てにいらて

さてふるさとのけるけさよ

魚けやっぱり川のしの

・弟兄同五郡 父子本三州 欲驗飛鳥集

源旌白兔遊 靈瓜夢裏受 神桶壺中收

・ 旌、唐詩作徵、遠、唐詩作遊、

14 正7周7朝7唐7大 81

一たび書劔の宮となり

三たび聖明の君にあう

東をおさめてほまれなく

西にたたかいいさおなし

文を学んで武を学ひ

武を学んでは文学ぶ

今日すてに老いほれ候

余生は云うに戻らず候

・ 一為書劔宮 三遇聖明君 東守文不賞

西征武不勳 學文兼學武 學武兼學文

今日既老矣 餘生不足云

・ 三、正本周本全詩作二、非、生、周本作何、

15 正8周8朝8唐8大 82

葬式するとき莊子がいうた

「天と地が棺桶なのじや」

わしにもしいつかは来るじやろが

箕の子一枚あれば充分

死んだら蠅のえさでよし

白い鶴など悔みにくるな

首陽山にて餓えたらば
生きてすっぱり 死ぬもまたよし

・ 莊子説送終 天地為棺擲 吾歸此有時

唯源一幅箔 死將篋青蠅 吊不勞白鶴

饑著首陽山 生廉死亦瘵

・ 終唐詩注一作死 幡正本固本朝本作番

16 正9周9朝9唐9大83

寒山の道とわかれても

寒山に路はかよわれぬ

真夏でも氷はとけず

日が出ても霧でほうやり

わしがなぜ行けたとか

おまえとは心がちがう

おまえでも物しに似たらば

またそこへ行けるじやろ

・ 人間寒山道 寒山路不通 夏天冰未釋

日出霧朦朧 似我何由屈 與君心不同

君心若似我 豈得到其中

17 正10周10朝10唐10大84
天が生やした百尺の木

伐つて作つた長い材木

棟にも梁にもなるはずを

ふかい谷間にほつたらかし

年月たつても芯はしつかり

それても日ましに及が充げる

物のわかつた人が持てくりや

馬屋のつつかえぐらいにはなる

・ 天生百尺樹 翦作長條木 可惜棟梁材

抛之在幽谷 年多心尚勁 日久皮漸秃

識者取將來 猶堪柱馬屋

・ 柱、固本唐詩作柱、
18 正11周11朝11唐11大228Z

馬驅せて荒城を過ぐ

荒城に旅愁ぞゆらく

高く低く古りしひめがき

小さくはた大いなる墳塋かき

よもぎ揺れ影さぶしらに

水立ながく声ぞこもろう

さあれみそ俗骨のみぞ

神仙となりし名はなし

・ 駉馬凌荒城 筑城動客情 高低葺雄堞

大小古墳煙 自振孤蓬影 長嶽拱水聲

所嗟皆俗骨 仙史更無名

勳衣本大典並唐詩注作意今從正本等

19 正12周12朝12唐12大67

西園にすめる鸞鶴を

寘のひとの網に捕え來

たおやめに朝夕あてられ

庭にはた部屋に出で入る

金の籠 賜い 棲ませど

とゞかれて羽そこないぬ

おかとりとくぐいけうらに

雲のべに飛べるにしかず

・ 鸞鶴宅西園 寘籠捕得歸 美人朝夕弄

出入在庭幃 賜以金籠貯 高哉損羽衣

不如鴻與鶴 飄颻入雲飛

・ 鸞、正本周本作鶴

20 正13周13朝13唐13大60

玉しきの官に珠簾かけ

たおやかに少女すめりき

そのかたち神にもまさり

桃の花にまごうか人ばせ

春がすみひんがしにこめ

秋のかせにしへのべにたつ

三十年のさらにはすぎなげ

なべてみを甘蔗のかす

・ 玉堂掛珠簾 中有嬋娟子 其貌勝神仙

容華若桃李 東家春露合 西金秋風起

更過三十年 還成甘蔗滓

21 正15周15朝15唐15大237

父母からの遺産でたくさん

田畑もよそのものは羨まぬ

女房はハタリハタリ機織って

ことしはチヤチヤと唄うてる
拍手して花よ舞えよとせかしたり
頻づえついで鳥の歌きく

どなたがそれをごらんになるか
棋まきがしよつちゅうお出ましじや

・父母續經多 田園不羨他 婦搖機軌軌

兒弄口噯噯 拍手催花舞 櫓願馳馬歌

誰當來敬賀 樵客屢經遇

・賀唐詩作賞 屢朝本作累

22 正16 周16 朝16 唐16 大140

ワシノ家ハ 綠嶽ノ下

爽ガ荒レテモ 草モトラヌ

新シイ藤ハ ウネウネ 垂レ

古イ石ガ ザツクリ ソビエル

山ノ木ノ実ハ サルガトリ

池ノサカナヲ 白鷺ガツツク

神仙ノ書 一二卷

ノウノウト 樹下ニ読ム

・家住綠巖下 庭蕪叟不羨 新藤垂綠繞

古石豎巖巖 山菓獼猴摘 池魚白鷺銜

仙書一兩卷 樹下讀喃喃

・巖巖之巖 正本則本朝本作岳較勝

23 正17 周17 朝17 唐17 大241

四季のめぐりは やみませぬ

一年すぎても また 一年

よろずは移りかわつても

天がすたりはいたしませぬ

東に明け 西に暮れ

花は散り 花はひらく

あの世への旅人だけは

はるばる去つて かえりませぬ

・四時無止息 年去有年來 萬物有代謝

九天無杵推 東明又西暗 花落復拈開

唯有黃泉客 冥冥去不廻

24 正18 周18 朝18 唐18 大242

年うつり愁いは去りて

春さればなべてさやけし

花ぞ笑う 緑の川に

霞 舞う 霧の樹のへに

蝶と蜂とおのす樂しみ

禽と魚とまたあわれなり

友と遊あそひこころはつきず

朝あけ明まで眠るあたわす

・ 巖去掠くわ愁年 春來物色鮮

巖樹氣青煙 蜂蝶自云樂 山花笑綠水 禽鳥更可憐

朋送情未已 微曉不能眠

樹周本唐詩作岫

25 正19周19朝19朝19唐19大明

筆をとつては縦横無尽

容貌才能きわめて魁偉

しかも生き身に限りがあつて

死ねば名なしの幽靈となる

古來かようのためしは多い

そこでそなたはいかようなさる

白雲なびくここへ來なされ

紫芝の歌おしえまじよ

・ 手筆太纒横 身材極魁偉 生為有限身

死作無名鬼 自古如此多 君今爭奈何

可來白雲裏 教你紫芝歌

太周本作大 材正本周本朝本作才 魁

偉正本周本朝本唐詩作瓊璋 如此多唐

詩注一作多如此

26 正160周164朝159唐163大166

寒山に任みそめしより

幾いくさ千歳へにけんものか

おのがしし林にかくれ

やすらぎて自在を觀す

巖にはひといたるなく

白雲のつねにたなびく

草しきて臥い禱となすに

青天はおおいとなりぬ

樂しかも石にきくらし

天地あめつちのうつるまにまに

・ 粵自居家山 曾經幾萬歲 任運遊林泉

樓運觀自在 叢中人不到 白雪常飄颻

細草作臥褥 青天為被蓋 快活枕石頭

天地任變改

・ 蘇中正本周本唐詩作寒巖

27 正 22 周 22 朝 22 唐 22 大 68

霞をたべる仙人は

世間のつきあいなんぞせず

いつても実になんぞさつぱりと

夏をさながら秋と住む

ふかい谷川さらさらと

松ふく風のそよそよと

そこに半日はかりイリヤ

百年の苦も忘れちやう

・ 有一餐霞子 其居諸俗遊 論時實蕭爽

在夏亦如秋 幽澗常澄澗 高松風颯颯

其中半日坐 忘却百年愁

28 正 23 周 23 朝 23 唐 23 大 69

あたしや邯鄲下町そたち

歌をうたえばメリハリきいて

ここにあたいかいるかぎりには

むかしながらの節きかせましよ

酔うても帰るとおっしやいますな

日しまだ高いに居つづけなされ

うちの寝屋には銀縁の床に

然のふと人がふうわりと

・ 妾家邯鄲住 歌聲亦抑揚 積我安隱處

此曲舊奈長 醜醉莫言歸 留連日未央

・ 兒家寢宿處 綺被滿銀牀

・ 妾家之家 正本周本唐詩作任 隱 正本周

本朝本唐本作屈

29 正 24 周 24 朝 24 唐 24 大 70

三つの帆の舟とくこぎ

千里ゆく馬にのるとも

わが家にいたるちたわす

ここはいと幽ゆけき荒地
やまぐかき巖のほらに

鳴神のひねしすくだる

孔丘のきみにあらねば

手さのべて救うあたわす

快榜三翼舟 善乘千里馬 莫能造我家

謂言最幽野 巖穴深岬中 雲雷竟日下

自非孔丘公 無能相救者

・穴正本同本朝本唐詩作岫

30 正25周25朝25唐25大71

知患者はそちうでわしを抛なり

阿呆はこちうでそなた抛なる

知患者でしなく阿呆でもなし

これからたよりをいたすまい

夜 照る月に歌うたい

朝 白雲に舞をまう

なにゆえ口も手もとめて

髪ザンバラと坐禅などしよう

・智者君抛我 愚者我抛君 非愚亦非智

從之斷相聞 入夜歌明月 侵晨舞白雲

焉能住口手 端坐鬢紛紛

・斷、本大吟作繼、今從正本周寸朝本言詩

31 正27周27朝27唐27大229

わしの住居すまひは芳ふきて

かどさきに車馬くるまもみかけぬ

林のかそけさは鳥をあつめ

給のひろさが魚をすませる

山のこのみを子らと掃み

おかのはたけは妻と鋤く

家のなかにあるのは何

ただ一棚の本だけさ

茅棟野人居 門前車馬跡 林幽備歌鳥

谿閣本藏魚 山某携兒捕 皇田共婦鋤

家中何書有 唯有一鉢書

32 正28周28朝28唐28大230

寒山の道とのほるに

さわまらず寒山的路

谿存かく石ごろごろと

淵ひろく草ほうほうと

雨ふっね苔なめらかに

風なきに松はひびこう

たれかよく世の累たち

ともに住むや白雲の中

・ 登砂寒山道 寒山路不及 谿長石磊磊

・ 淵潤草塚塚 苔滑非開雨 松鳴不假風

・ 誰能超世累 共坐白雲中

・ 淵、大興作淺 苔、大興作苔、非、

33 正 29 周 29 朝 29 唐 29 大 231

六つのわざわい身にまつわって

たて九つ案じはすれど

才ある人さえ野に捨てられる

まして藝なし草屋にかくれ

日は上つても巖あな暗く

煙消えても谷うすぐらい

その中にいる長者の息子

みんをパンツもないしまつてす

・ 六極常嬰困 九緯徒自論 有才還草澤

無藝聞蓬門 日上寮猶暗 煙消谷尚昏

・ 其中長者子 齒齒飽無涯

・ 嬰、正本朝本作櫻 尚、周本作裏 視、正本

朝本作澤 34 正 30 周 30 朝 30 唐 30 大 165

雪白く高根にそひえ

川青く波たいらなり

時々に漁夫たちの

舟歌をうたうを聞けば

わが胸にかなしひあふれ

その聲や聞くに之耐えぬ

菴こに角のあらぬに

なにゆえに陣子やぶるや

・ 白雲高嵯峨 緑水蕩潭波 此處聞漁父

時時鼓棹歌 聲聲不可聽 令我愁思多

誰謂雀無角 其如穿屋何

35 南31正31朝31舊31大291

はるばると寒山のみち

すすろなり冷瀾のはま

ちちちとつねに鳥いて

さびさびとやらに人なし

しくしくに風かぜ面おもてふき

ひらひらと雲くも身みにつしる

朝あさあに日のひかり見す

歳としどしに春はるしらぬか

杳杳寒山道 落落冷澗濱 咄嗟常有鳥

窸窣夏無人 浙浙風吹面 紛紛雪擁身

・ 朝朝不見日 氣歲不知春

・ 浙浙周本作磧磧

36 正32周32朝32唐32大

少年は何をか愁う

髪白き見てぞ愁うる

白くして何をか愁う

日のせまる見てぞ愁うる

北邙のいえましらせん

このことば言うに忍びず

老いびとを傷ましめんに

少年何所愁 愁見鬢毛白 白更何所愁

愁見日逼迫 移向東岱居 配守北邙宅

何忍出此言 此言傷老客

37 正33周33朝33唐33大65

愁いの捨場はないと聞き

まさかそんな と思うたが

昨日はろうておいたのに

今日またこの身にまといつき

月けて愁いはてがたく

新年 愁い 新たに

帽子の下にいる人は

元の壘兵衛さきの愁人

・ 聞道愁難遣 斯言謂不真 昨朝始愁却

今日又纏身 月盡總難盡 年新慈更新
誰知席帽下 元畏昔慈人

謂唇詩注一作會 始正本周本朝本唐
詩作會

38 正34周34朝34唐34大66

二匹ノ龜が牛車ニ乗ツテ

街頭ヲどらいぶイタス

蠅ガ一匹ヤツテキテ

フネエ 乗セテヨレトネダリ申ス

乘セマト人情ガナイヨウデ

東セタラトタンニヤラレ申シタ

手ノ平タタイテ言ウマデモノイ

カケタ情ガ仇ノ針ジナテ

・ 兩龜乘轎車 驚出路頭戲 一蠅從傍來

苦死欲求寄 不載吏人情 始載被沈累

彈指不可論 行恩却蠶刺

・ 蠶商本代蠶詩 蠶毒詩注一作蠶

39 正35周35朝35唐35大71

三月 蚕 左お小さく
少女おとめきたりて花をつむ

垣根の蝴蝶にたわむれつ

はた 水の辺の蛙かみ下うつ

梅の咲ちぎり たもとにし

たけのこ掘るとクシさしぬ

あげつろうとも この景色

わが家のさまにはるか勝れり

・ 三月蠶猶小 女人來採花 限墻弄蝴蝶

臨水擲蝦蟆 羅袖盛梅子 金鏡挑笋芽

闕論爭物色 此地勝余家

・ 限唐詩注一作隔 爭正本朝本唐詩作多

唐詩注一作爭

40 正36周36朝36唐36大79

東どなりの一人のばはあ

ここ四五年でしこたま貯めた

むかしはわしより貧乏じゃった

いまでは錢のないわし笑う

後ではあいつがわしを笑うか
前にはわしがあいつを笑うた
たがいに笑うてやめよとせねば
乗じなりが また 西じなり

・東家一老婆 富来三五年 昔日食於我
今笑我無錢 渠笑我在後 我笑渠在前
相笑儻不止 味邊復西邊

41 正37周列朝37唐37大80

金持はいそがしくって
何事もうけあえませぬ
倉の米うなつていても
一升しひとには貸さぬ
釣り針のよう左土根性
納買うて綾かすめとる
臨終の日がまいて
あくやみの客は蠅だけ
富兒多鞆掌 觸事難祇承 倉米已蘇赤
不貸人斗升 蕪懷釣距意 買絹先揀綾

若至臨終日 帛客有蒼蠅

42 正286周38朝38唐38大296

とてもしかしこいあ方があつた
くらげようない頭の下さじや

文官試験も一度でパスし

五言詩つくれば希代の名手

勤務評定 先輩しりぬに

後つぐものもなほいほじやうた

金と女にふと目がくれて

すべてがオジャン 話にならぬ

・余曾哲親晚明士 薄宦芙蓉無比倫 一

壁裏名喧宇宙 五言詩句越諸人 爲官

治化超先輩 直爲庶幾繼後塵 忽然屬

貴貪財色 瓦解冰消不可陳

・靈全詩注一作雄

43 正38周37朝37唐37大153

白イ鶴 苦挑 クワエ

千里 ヒト藜ヒ

蓬萊ノ山ニ行コウトシテ

コレガ ソノ弁当

ユキツクマデニ 羽又ケオチ

仲間ニハグレ ミジメナココロ

サテ フルサトノ巢ニ カエル

妻モ 子モ 見ワケテクレヌ

・白鶴銜苦花 千里作一息 欲往蓬萊山

將此充糧食 未遑毛摧落 離群心慘惻

却歸舊來巢 妻子不相識

・花 正本 恩本 朝本 唐詩 作 桃 是

44 正 39 册 40 朝 39 唐 40 大 154

フダンハ ヒツソリクラシ

気がムケバ 國清寺ニヤツテクル

時ニハ 豊干 老人 タズネ

マタ 拾得ニ アイニ ヌク

ヒトリカエツテ 寒嶽ニ 上レバ

話シアウ ヒトモ ナシ

無源ノ川ヲ タズネテ ミテモ

源キワマリ 川キワマラス

・ 慢居幽隱處 乍向國清中

仍來看拾公 獨回上寒嶽

尋究無源水 源窮水不窮

・ 中周本作衆 訪大興作向

作道 公 朝本作翁

45 正 40 周 本 朝 40 唐 41 大 155

生ハるま えが大 ばかて

今でもいっこう 悟れません

このよないまの 會(ま)も

み 前(ま)の世のむくいす

今また勉強しませぬと

求せてやつぱりおなじです

どちらの岸にも舟がなまや

とでも渡しはなりません

・ 生前太愚癡 不寫今日悟

總長前生欲 今生又不悟

兩岸各無船 渺渺塵難渡

今日如許會 來生還如故

・女、正本周本作大 倣、正本周本作作 今
生之生、正本周本朝本作日 應難、正本周
本唐詩作難濟

46 正41周42朝41唐42大76
名からして莫愁という

花插みに馬にのり
蓮採りに船こかせ

ソファは熊の毛皮です

コートは鳳の羽ころも

あわわや百年たためまに

やっほり墓場にいっちまう

・瑤瑤盧家女 蒼來名莫愁 貪乘搗花馬

樂持採蓮舟 勝坐綠熊席 身披青風裘

哀傷百年内 不免歸山丘

47 正42周43朝42唐43大78

氏眼村の鄙どめの奥さんと

那鄂村の杜坊やの母さんと

ふたりとも同じ年配で

いずれおとらぬよいきりよう

昨日およばれて出くわして

衣裳の粗末な方は後まわし

スカートが破れているだけで

残りのなど食べさせられ

・氏眼鄒公妻 那鄂村生母 二人同共老

一棹好面首 昨日會客場 惡衣排在後

只爲着破裙 喫他殘髮薺

・共老、正本周本朝本唐詩作老少 氏周本

作低非

48 正43周44朝43唐44大 278

岩かげにひとり臥すれば

湧く雪の盡をお消えず

へやのうちとの曇れども

心にはざわめき絶ちぬ

金門に入ると見し夢

あざめしに石橋わたり

なげうちめ 樹の枝にありて
からからとさやく瓢と

・獨卧重簾下 蒸雲晝不消 室中雜啼鶯
心裏純喧蹶 夢去遊金闕 魂歸度石橋
抛除闕我者 歷歷掛間瓢

49 正44周45朝44唐45大60

物にはそれぞれ向きがある

向きにあわせて使うがよろし

むかぬ用事に使うてみてし

あれもダメ これもダメ

円い穴あけ 四角い柱

これでは人で話にならぬ

駿馬はしらせ鼠追うてし

ちんばの猫にもしとてし及ばぬ

・夫物有所有 用之各有宜 用之若失所

一缺復一齋 圓鑿而方枘 悲哉空爾為

購蹄將捕鼠 不及跛猫兒

・缺正水朝水作闕

50 正45周46朝45唐46

とこしえにたれか死なざる

死はつねになべてのさだめ

八尺あまるおのこなりしも

たちまちに塵場となる

よみじには朝の日ささね

青き草 春を芽ぐみぬ

いたましきこのおくつきに

松風のひとを愁わす

・誰家長不死 死事甚來均

歳成一歌塵 蒼象無暎日

行到傷心處 松風愁殺人

51

珊瑚の鞭 駟馬にあて

駛せゆきぬ 洛陽の道

詩りかに かの美少年

老の日のあるを信せず

白き髪やがて生いて
紅顏のあにたもたんや

あわれ看よ 北邱の山

これぞこのきみが極樂

・ 驅馬珊瑚鞍 驅馳洛陽道

不信有衰老 白髮會庭生

但看北邱山 箇是蓬萊島

協 正本同本唐詩作吟

52 正47周48朝47唐48大59

醉えること日をすぐさんに

ゆく年のしばしも待たず

蓬生のもとに埋みられ

朝の日のなんぞくらきや

骨と肉 散りぢりに尽き

魂魄たましいしおとろえ失せぬ

くろかわをかみきる口も

老子の言しはや読みえい

竟日常如醉 流年不暫停 埋着蓬萊下

曠日何冥冥 骨肉消散盡 魂魄幾凋零

庶莫礙鐵口 無因讀老經

・ 曠日之日 正本周本朝本作月

53 正48周49朝48唐49大530

寒山にひとたひ坐して

とどまりぬ年の三十みそとき

きのう来て友山を訪うに

おみよそは黄泉よみに入りぬ

としひの油と尽きて

逝く水の流るるごとし

今朝けふもとし影にむかうに

思おえず迄ぞおちぬ

・ 一向寒山坐 滯留三十年 昨來訪親友

太半入黄泉 漸減如殘燭 長流似逝川

今朝對孤影 不覺淚雙懸

・ 減 正本周本唐詩作減唐詩注一作減

あとがき

※小誌もようやく十号を迎えた。創刊は昭和二十八年三月廿日で、二号同年九月廿五日、三号二十九年二月一日、四号同年九月廿五日、五号三十年八月一日、六号三十一年九月廿五日、七号三十二年八月廿日、八号三十三年九月七日、九号三十五年八月廿九日である。十号が甚だおくれたため「齊刊したか」とたずねられる向きもあつた。最初から急ぐ旅ではなかつたが、あまりにも遅々たる歩みに、ひとが憐れまれるのし無理は左い。ことに十号をこの四年間の成果として、すし出すのは面映い感がせぬではない。けれど、これかわわわれの夕とすれば、はずかしがつては仕方がない。ただちに十一

号への努力を重ねるほかはない。

※片々たる小誌ではあるが、一号から、思いがけぬ激励を蒙つて今に至つたことは、この上ない幸であつた。後々までかわらぬ指正を頂きたく希望する。

※本誌に對して示教を言まれない方々のうち、金原者吾、斯波六郎、小林太市郎、角垣美典氏が、また発行に内助した原田千美が、この間になくなつたことは、わたくしたちの深い悲しみである。謹しみて追悼する。

※本号の原稿の大部分は昨二十八年七月にはすでに出来ていたが、原田に支障が起き印刷がふくれた。「寒山詩」のはにかきに福島老師の古稀を記した「昨年」とは昭和三十七年をさす。「十二月樂辭」附記の頁付の一九六三年も誤ではない。

出版目録

中新 敬

徒然草の成立に関する研究 — 藤好の位記考証を
中心として — 国文学 品切

志樹 遼馬

志樹遼馬詩集 詩集 品切

原田 憲雄

幽歌集 中国詩選 品切

夜の歌 詩集 品切

墳墓集 歌集 品切

平松集 中国詩選 品切

無花果の帯に 詩集

飯田 十英

桃染集 歌集

原田 高雄

論文集 I 医学研究 品切

維体外語 歌集 品切

新 誠

方向 1~10 文学 8号残

方 向
十

1964年7月5日

方向社

京都市西陣区西下長者

町通千本西入福島町妙徳寺

¥300, ¥40

邑久光明園

ういについて

原田高雄著

邑久光明園

王 経 漢詩大系

小林正樹著 西宮啓

経 愈 漢詩大系

西宮啓

集英社